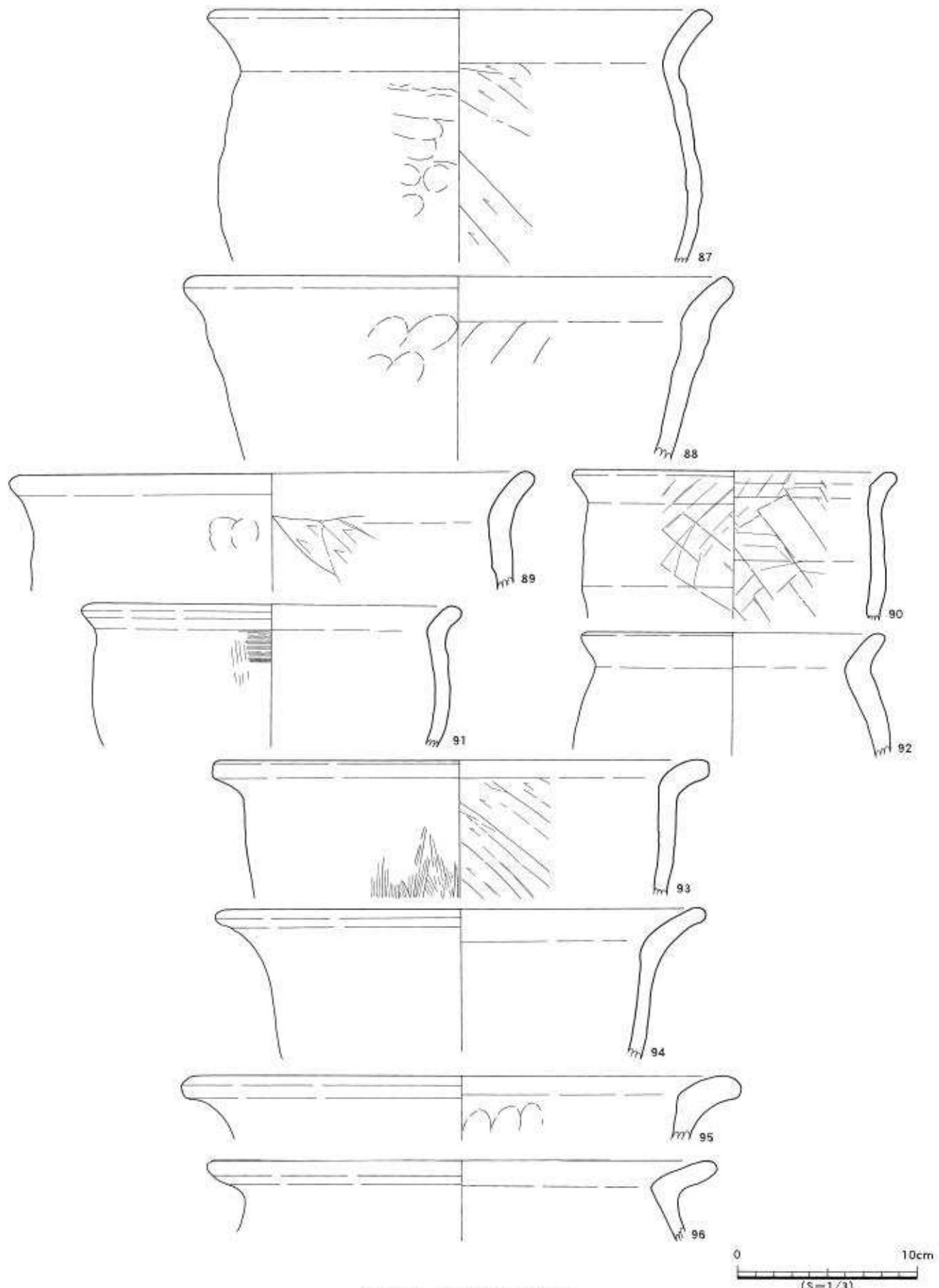


第396図 包含層出土遺物②



第397図 包含層出土遺物③

ものもあり、111にも内面に、112、113は外面で確認できる。114は口縁部と胴部の境目に稜が見える。115は底部の高台と口縁部は欠損するが、底部から胴部下半分まで平坦、胴部上半分よりふくらみをもち口縁部へと続く。底部外面にケズリとヨコナデの痕跡、内面にヘラミガキの様相を呈する。H-49区II層より出土した116は充実高台をもつ。底部と胴部をくの字形で屈曲のあと立ち上がる。

117~120はハの字状の高台をもち、立ち上がりは、底部からくの字状で胴部へと移る。117、118、121は底部外面にススの付着、内面にヘラミガキを施す。119、120は高台裏面右側に斑点状の塊が見られる。121、122、124、126は底部からL字状に屈曲し胴部へ移る。121は断面四角形の高台と内面にミガキを、122、126は断面三角形の高台をもち、外面底部にススを付着する。122は外面に黄斑点を施す。

123はH-49区II層より出土し、丸底に近い平底の様相を呈する。底部と胴部の境界が不明瞭で、なだらかな立ち上がりと考えられる。内面にミガキがあり、外面にススの付着と底部に渦巻き状の線が施される。124、125とも断面三角形の高台をもち、底部と胴部の境目が明瞭で、高台から胴部で凹んだのち緩やかにのびる。125は底部外面に十の線刻がある。126には内外面とも明瞭なヘラミガキが見られ、高台部分にケズリ痕を呈する。

黒色土器B類（第399図127~130）

4点を図化した。内外面とも黒く燃した土器である。出土数は量的に見ても極めて少ない。塊のみ掲載した。

127はIV層からの出土で、胴部でふくらみをもち、口縁部手前で一旦凹み、先端に向かって外反する。内外面ともにミガキがかかること。

128~130は底部に高台を持つ。128は充実高台を呈し、高台部分を突出したあと胴部へと続く。129、130は輪高台（断面三角形）を残す。129は高台部分からすぐに胴部へ移り、内面にヘラケズリが推定される。130は内面にヘラミガキ、ヘラケズリ、外面にヘラケズリの痕跡を残す。

須恵器

壺、蓋、甕、壺などの器種が見られる。総点で107点出土し、18点を図化した。

壺（第399図131~133）

3点を図化した。H-49区II層より出土の131は壺の蓋であり、133と同一個体の可能性がある。132は口縁部が外反し、内外面ともにヨコナデを推定できる。133の底部には小さい高台が堅固に残る。内面にナデ調整が推定される。

甕（第399図134~143・第400図144・145）

12点を図化した。134、136は外面に平行文タタキ、内

面にタタキを呈する。135は外面を平行文タタキ、内面を当て具痕で施す。137は外面を平行文タタキ、内面をタタキで施す。138、139、141の内面はタタキまたは同心円当て具痕となる。138、139は胴部の最大径である。140は内外面ともに格子目タタキを施す。142、143は内外面とも平行文タタキで仕上げる。144の外面は格子目タタキと平行文タタキを組み合わせる。145は色調が赤みを帯びる。

壺（第400図146~148）

3点を図化した。146は頸部から肩部で、外面を平行文タタキで施す。147は外面を格子目タタキで覆う。148は内外面ともヨコナデを施す。

綠釉陶器（第400図149）

調査区全体から合計3点で出土し、1点を図化した。149は口縁部から底部まで残る。復元に伴い完形になる。口径18cm、底径8cm、器高6.4cm、高台高0.5mm。口縁部手前で凹んだのち、端反り風になる。線描きの沈線が胴部上半分に呈し、部分的には2条確認できる。高台端は貼り付け高台を有し、断面は四角形になる。高台の豊付部分は露胎を施す。胎土は軟質の精製粘土で白色風を呈し、黄味を帯びたうすい線をもつ。

越州窯系青磁

調査区全体から合計で5点出土し、うち3点を図化した。

碗（第400図150~153）

150は、碗の口縁部から胴部である。復元で完全な形となった。151は碗の底部で、底部の高台にはケズリが見られる。何らかの目的で再加工が施されている。152は碗の口縁部である。胎土が悪く、黑色粒子の斑点が入り、部分施釉で全色が悪くむらが多い。153は碗の底部で、G~H-49区I層からの出土より、152と同一個体の可能性がある。

土鍤（第400図154~161）

土鍤では円筒状を呈する粘土の長軸方向に孔を穿った管状土鍤が出土している。14点が出土し、8点を図化した。

焼成粘土塊（第400図162~164）

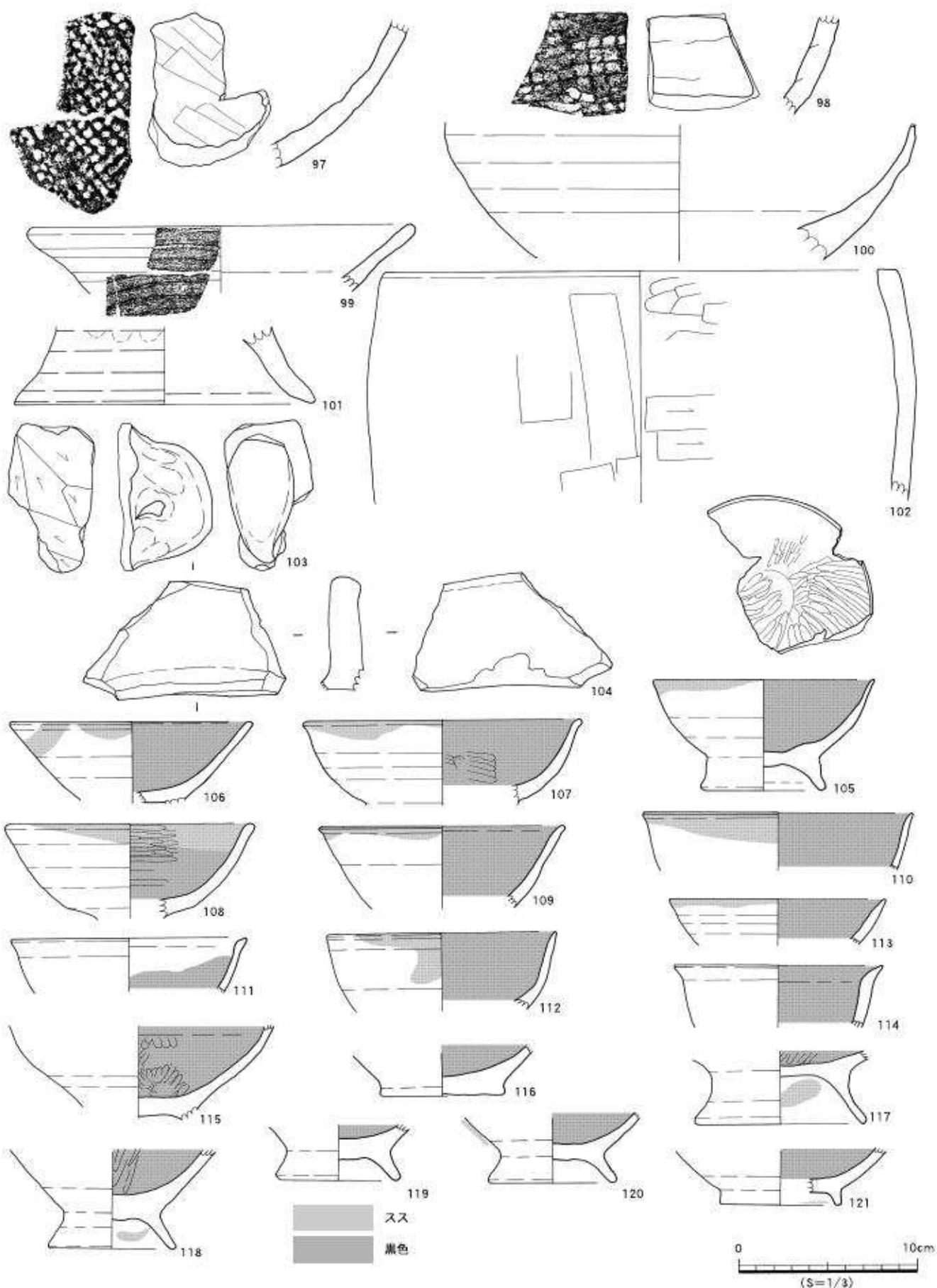
焼成粘土塊は、様々な要因で焼かれた土が粘土のような塊になる状態をいう。122点が出土し、うち3点を図化した。

砥石（第400図165）

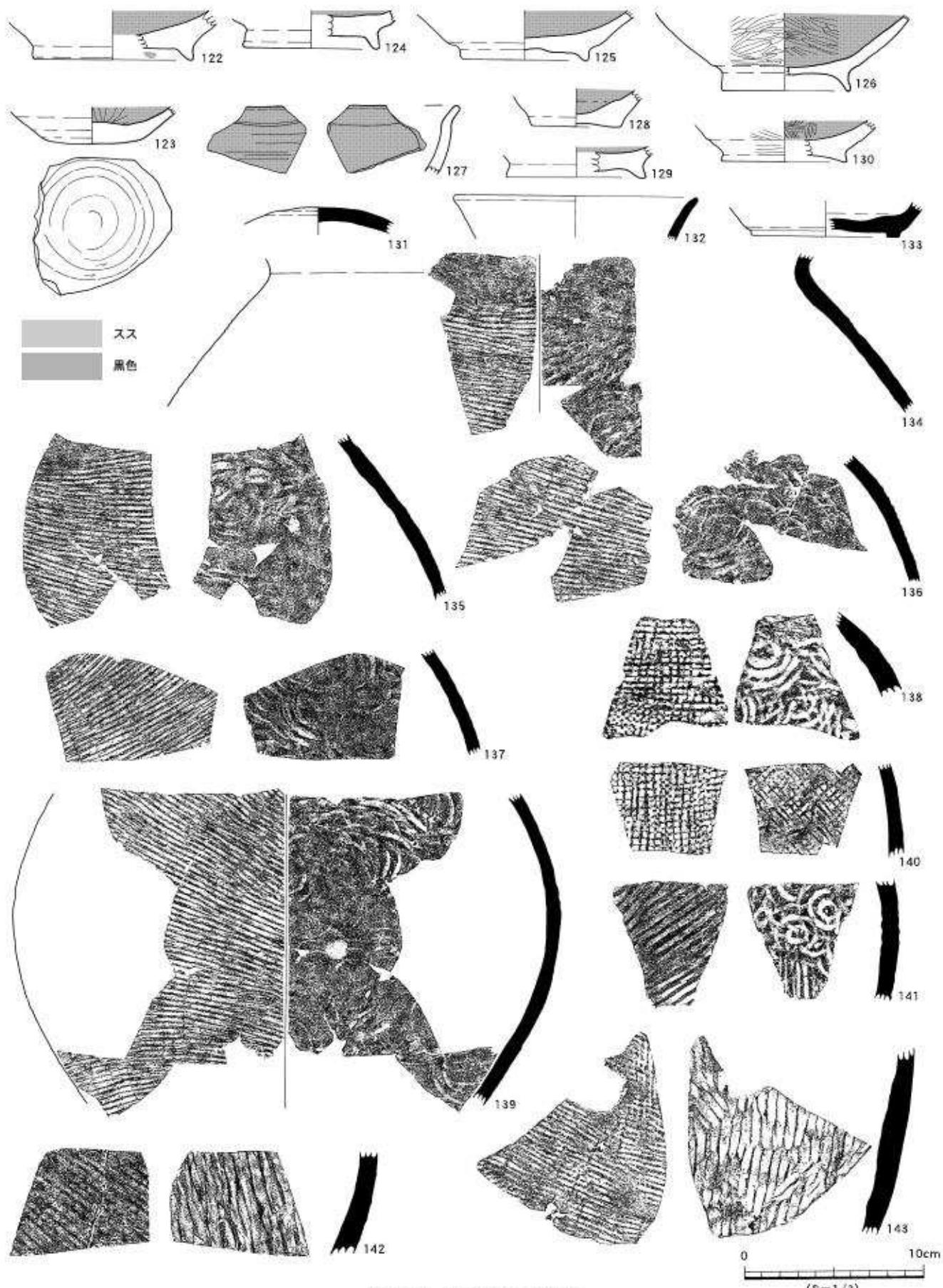
砂岩製の砥石で、4面使用の擦痕がある。上面に針描状の細い沈線が確認できる。

軽石（第400図166）

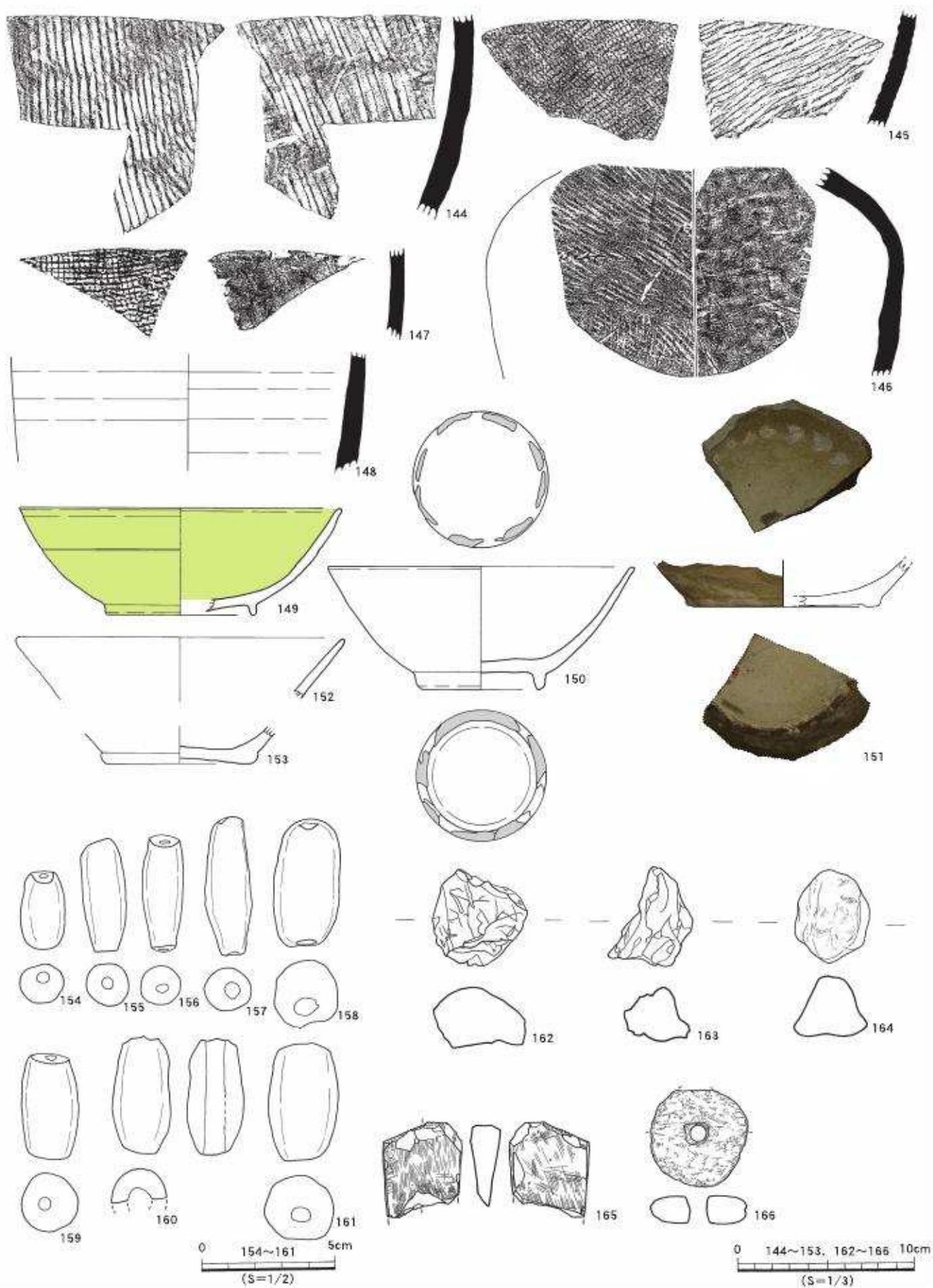
隅丸方形（略円形）を呈する軽石で、大きさ5.5cm×5cm、中央に径1.2cmの穿孔がある。全面に整形が見られる。



第398図 包含層出土遺物④



第399図 包含層出土遺物⑤



第400図 包含層出土遺物⑥

5 中世・近世の調査

(1) 調査の概要

中世・近世の遺構は、掘立柱建物跡14棟、竪穴建物跡13軒、建物状遺構3軒、土坑29基、大型土坑8基、炉状遺構19基、溝状遺構3条と多数のピット群が検出されている。遺構検出は、VI層のアカホヤ上面で行った。埋土は、I b層、II層を主体とする。ほとんどの遺物は一括で取り上げた。また、多くの遺構は中世と近世の帰属時期を区分出来なかつたので、中世・近世としてまとめた。遺物の分類方法については、土師器、輸入陶磁器、国産陶磁器、その他（瓦質土器・土師質土器・鉄製品・滑石製品・軽石製品等）に大分類し、さらに種別、器種に細分化した。碗、皿の器種については、口径の大きさによって分類してある。また、産地や年代についても考慮した。（以下参照）

十一

主師器 壴 壴 燈器

输入磁器

青磁 榄
白磁 榄
青花 碗
色繪 碗

ベトナム青花 碗

輸入陶器

中国系陶器

朝鲜系陶器 碗 盘

国産磁器（青磁・白磁・色絵を含む）
肥前産磁器 碗皿鉢蓋 德利
薩摩産磁器 瓶

国学陶器

瀬戸・美濃産	碗	瓶子	德利
備前産	甕	播鉢	
肥前産	碗	皿	德利 蓋 播鉢 壺 仏具
薩摩産	碗	皿	德利 播鉢 片口 蓋 甕 壺 灯明具 仏具
琉球産	甕		

その他の

土製品	輪の羽口
瓦質土器	播鉢 火鉢
土師質土器	茶釜 焙烙
鉄製品	刀子 鈎
滑石製品	滑石製石鍋 二次加工品
金床石	
砥石	
軽石製品	
櫛 錢貨 鉛玉 など	

哭穎公稿

碗(椀)	小碗	口径5cm~9.1cmのもの
	中椀	口径9.1cm~12cmのもの
	大椀	口径12cm以上のもの
皿	小皿	口径7.6cm~13.6cmのもの
	中皿	口径13.6cm~25.8cmのもの
	大皿	口径25.8cm以上のもの
鉢	小鉢(向付・猪口を含む)	13.6cm以下

陶磁器についての基本的な名称、及び表現方法は次の通りである。

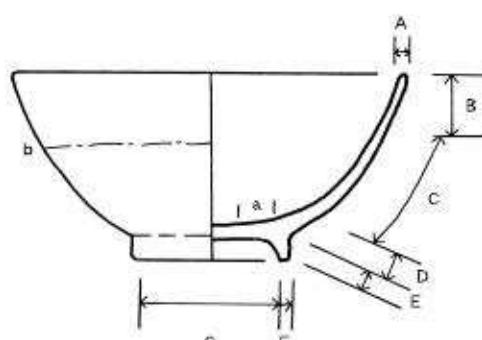
名称	A	口唇部
	B	口縁部
	C	体部
	D	腰部
	E	高台脇
	F	疊付
	G	高台内面
表現	a	見込み蛇ノ目軸剥ぎ部
	b	施釉ライン

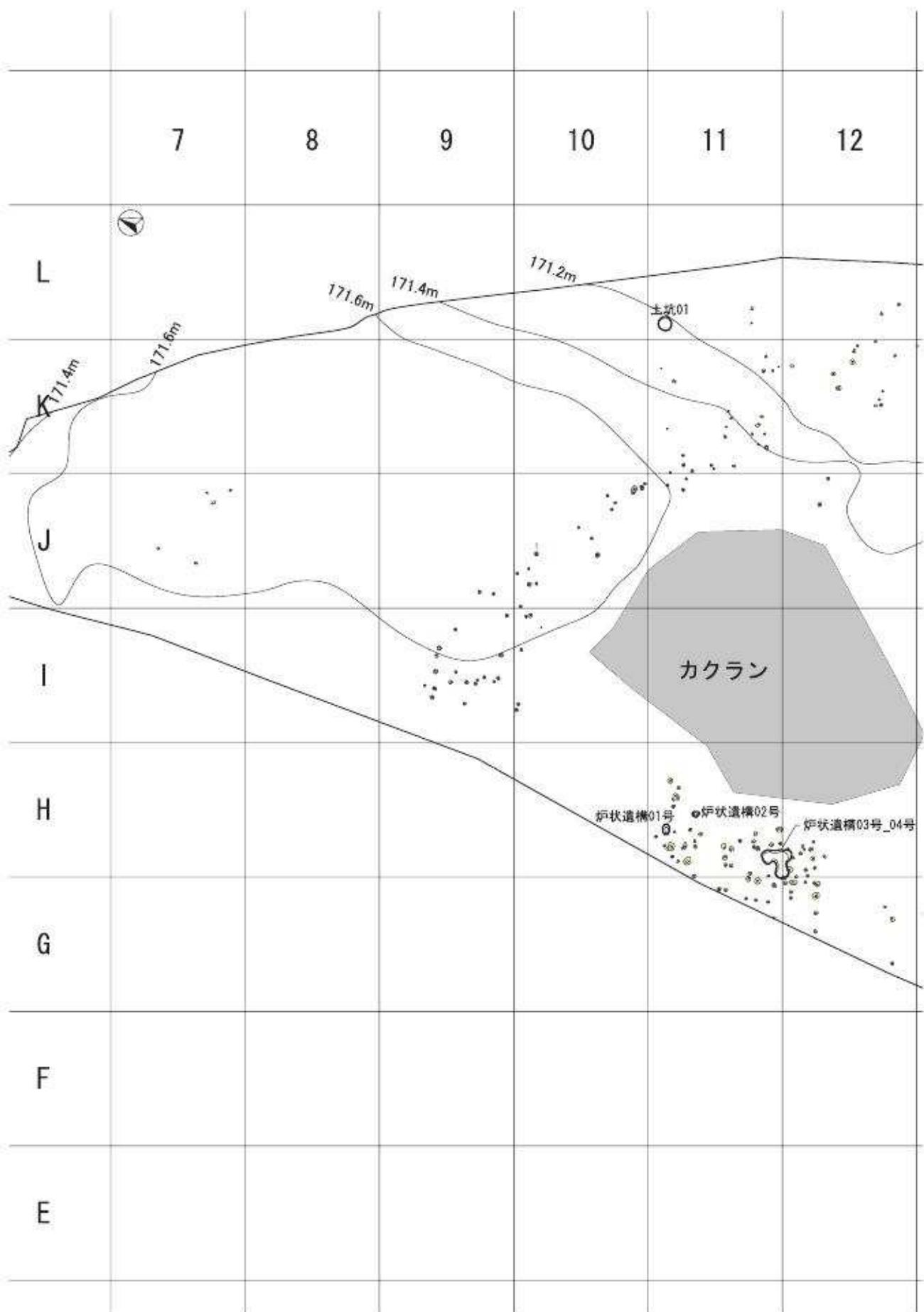
炬状遺構などの表現は次の通りである。



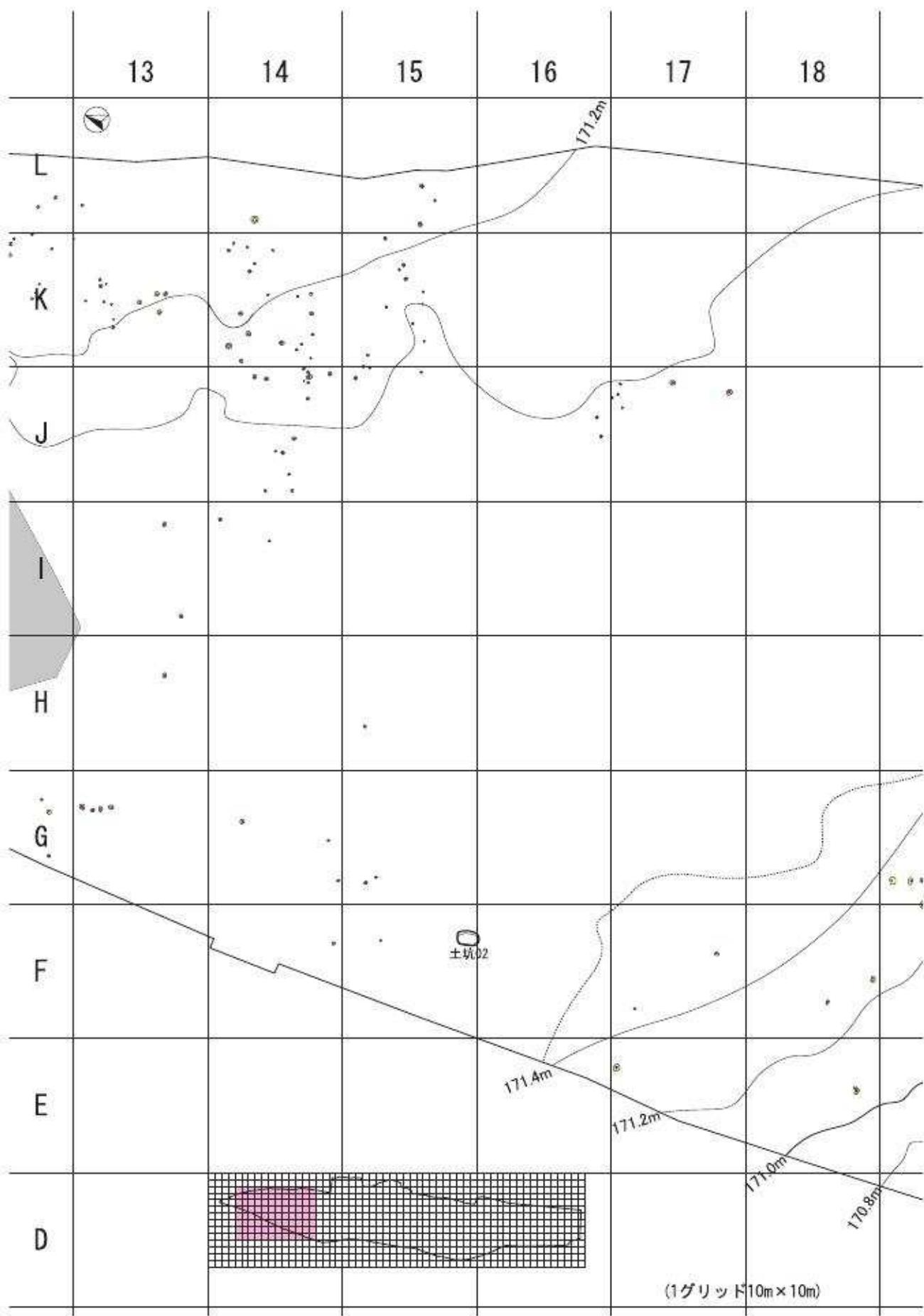
輪の羽口に付着した鉄滓については網フセで表現してある。

なお、埋土の状況や遺物の出土状況等から、中世と近世が判別しているものについては、文章の中で報告する。

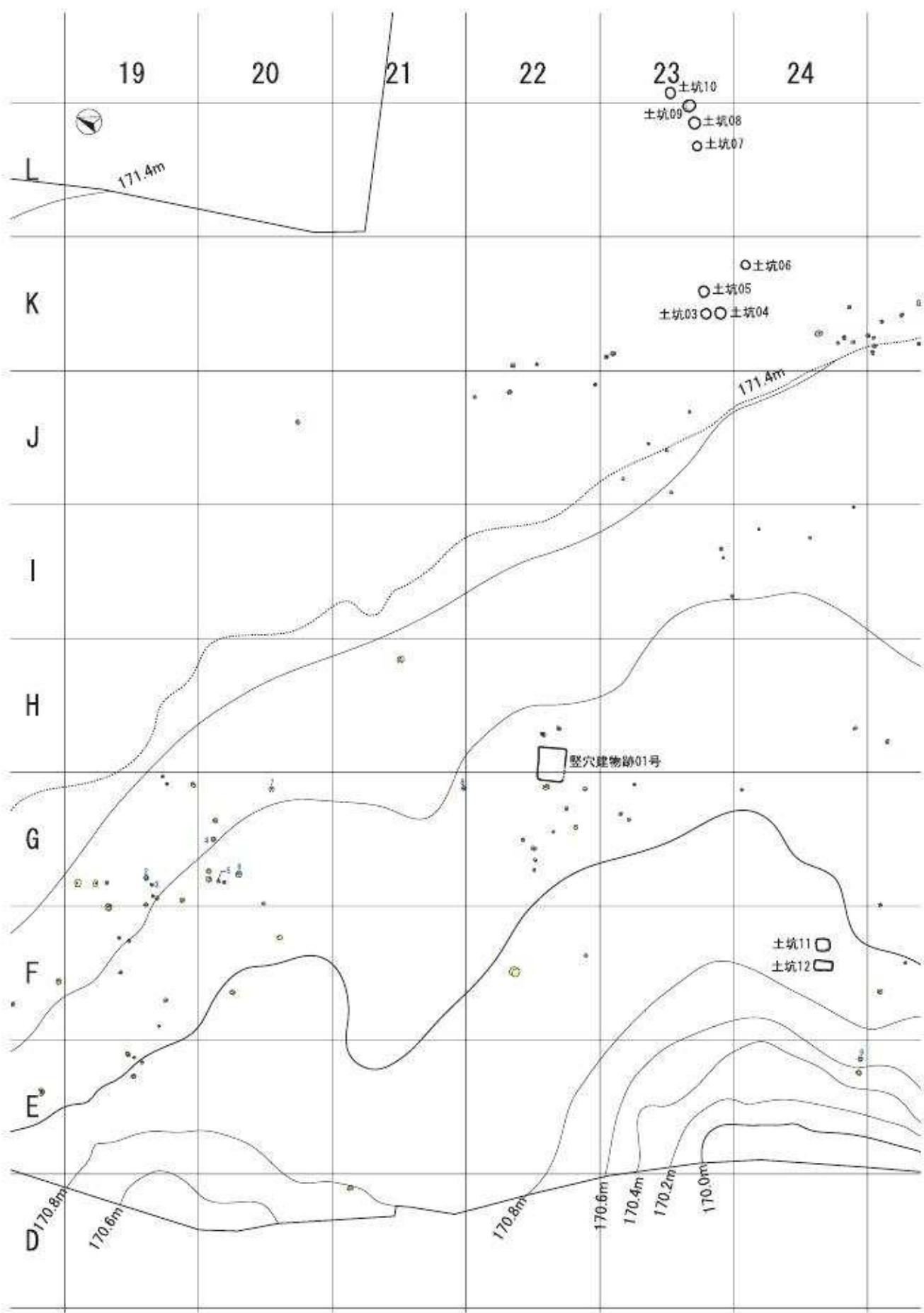




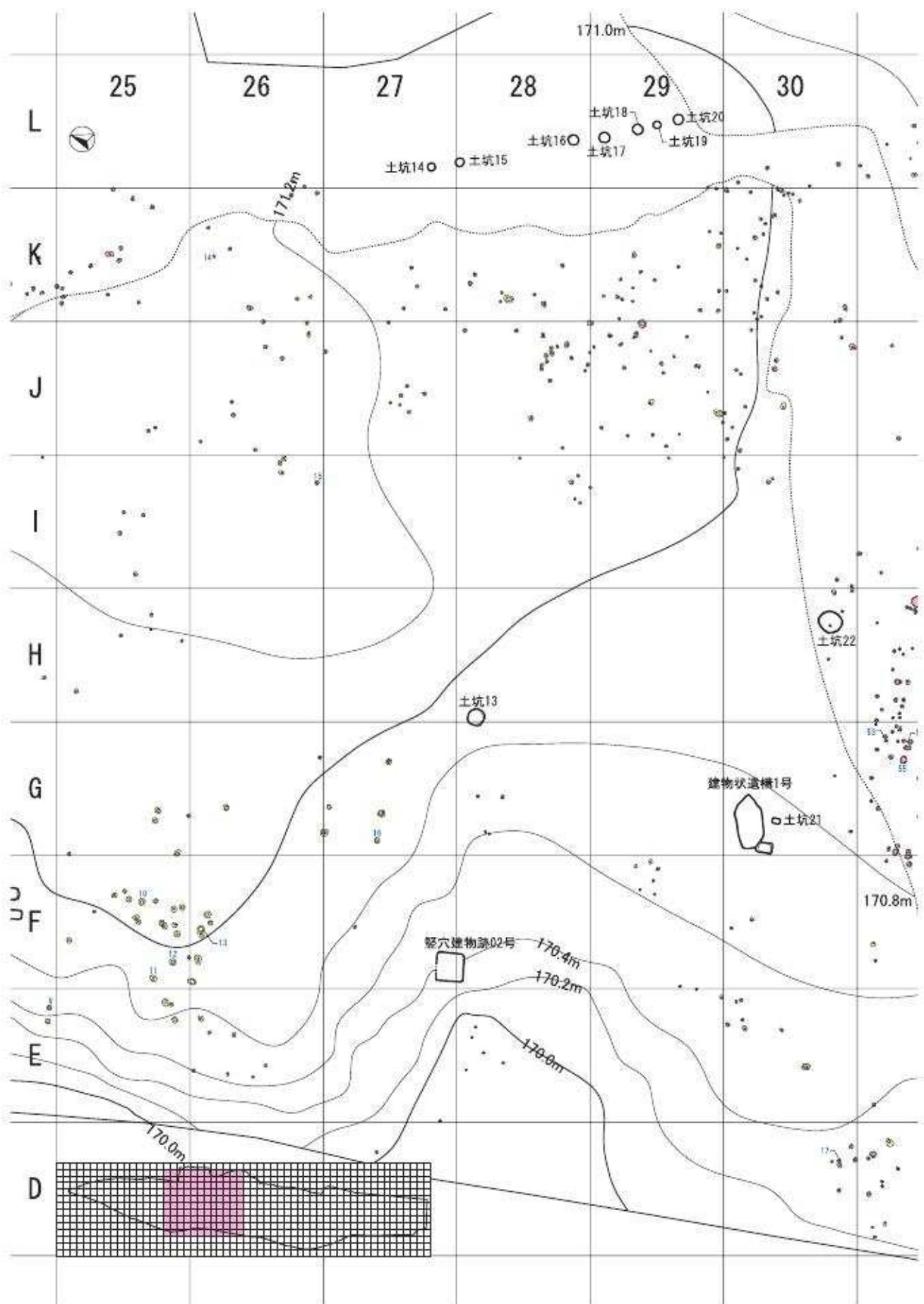
第401図 中世・近世遺構配置図(1)



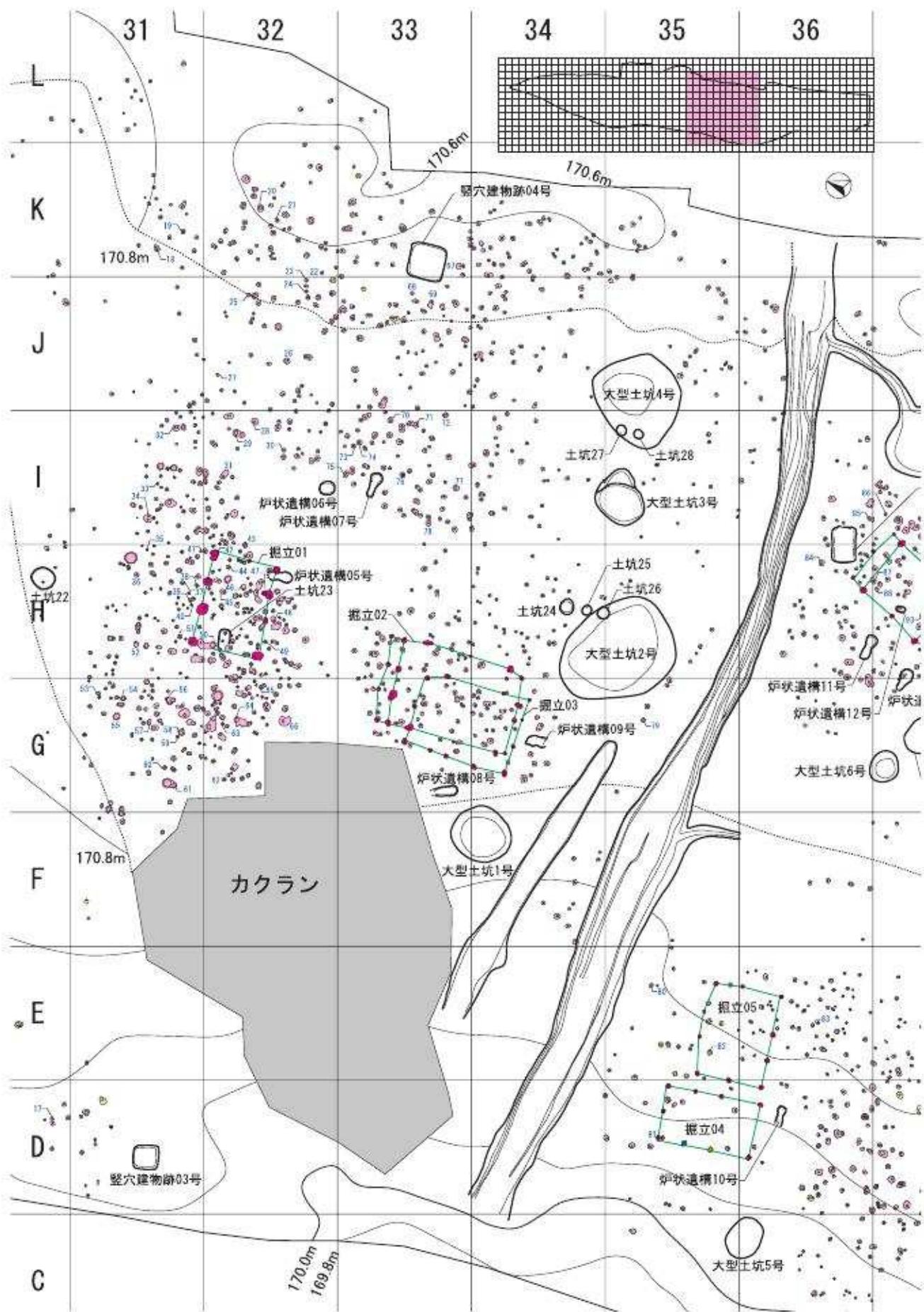
第402図 中世・近世遺構配置図(2)



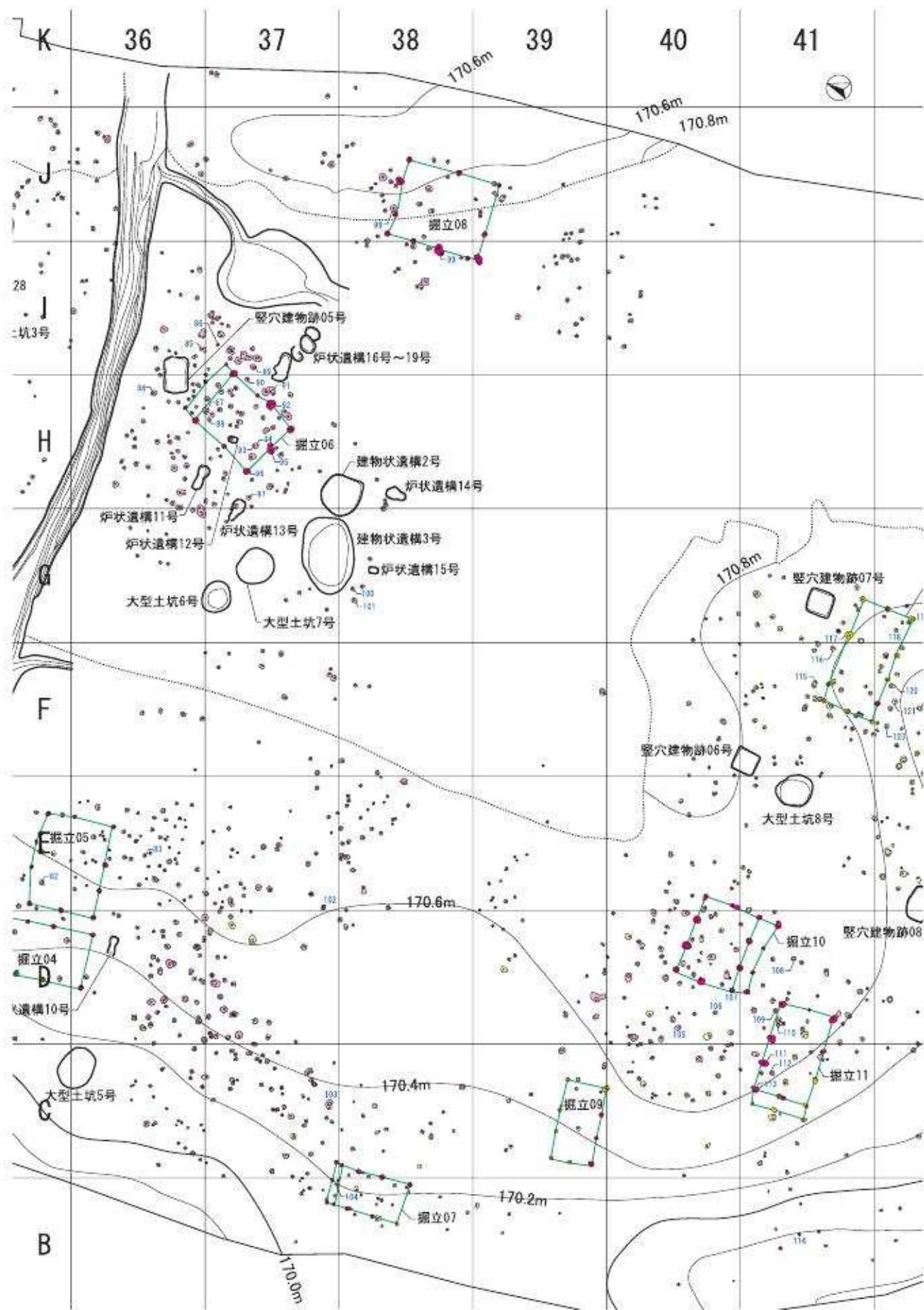
第403図 中世・近世遺構配置図(3)



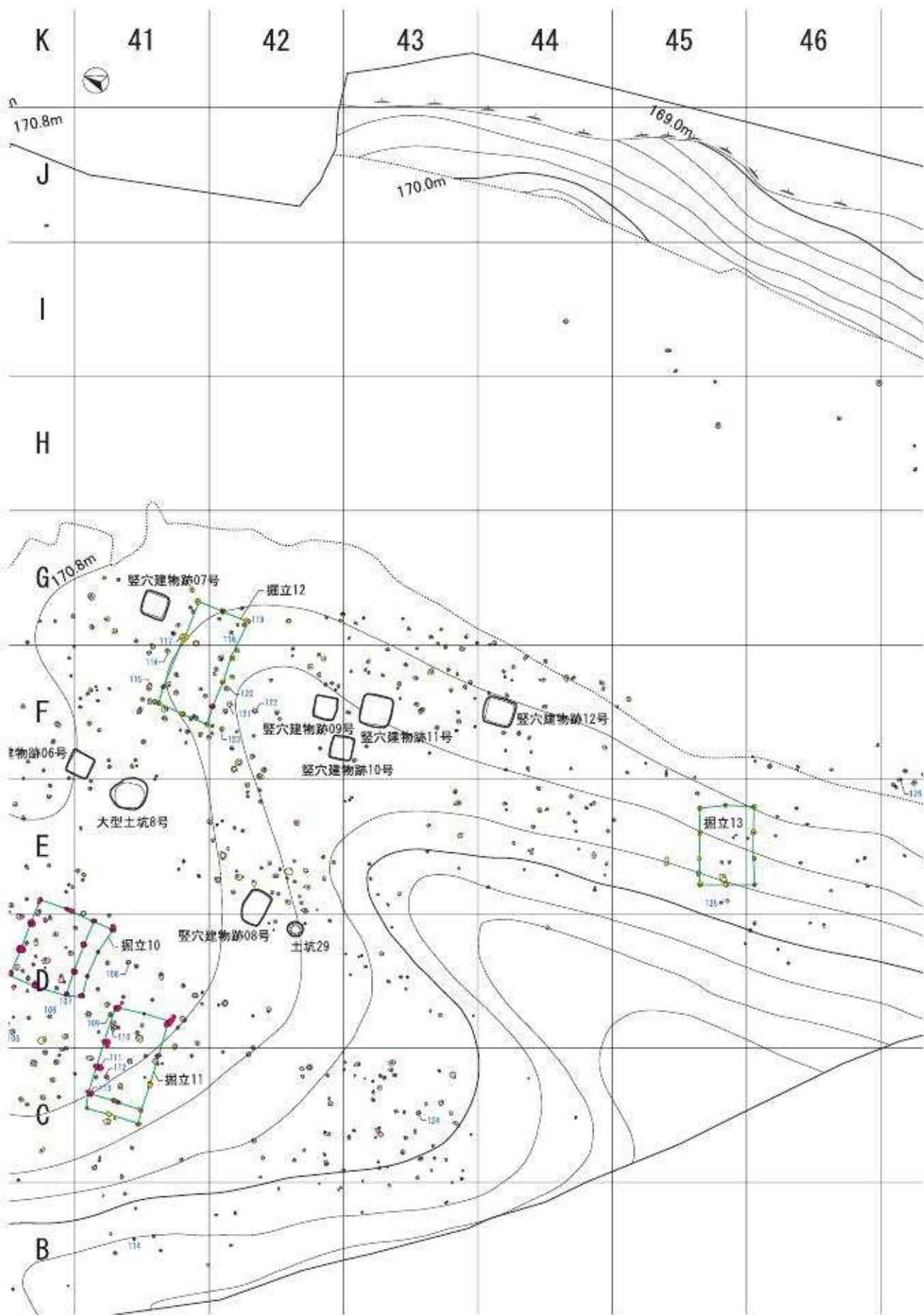
第404図 中世・近世遺構配置図(4)



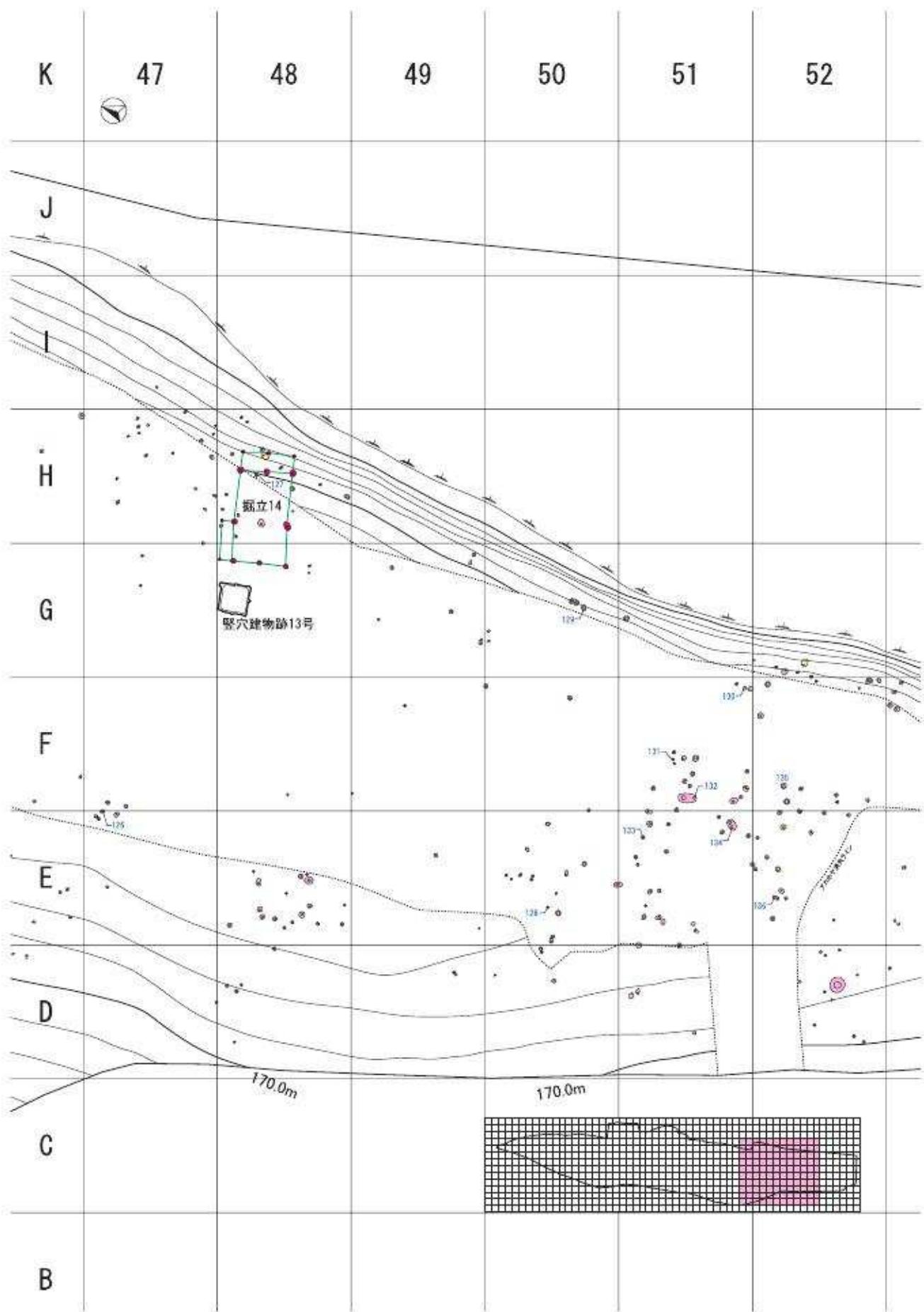
第405図 中世・近世遺構配置図(5)



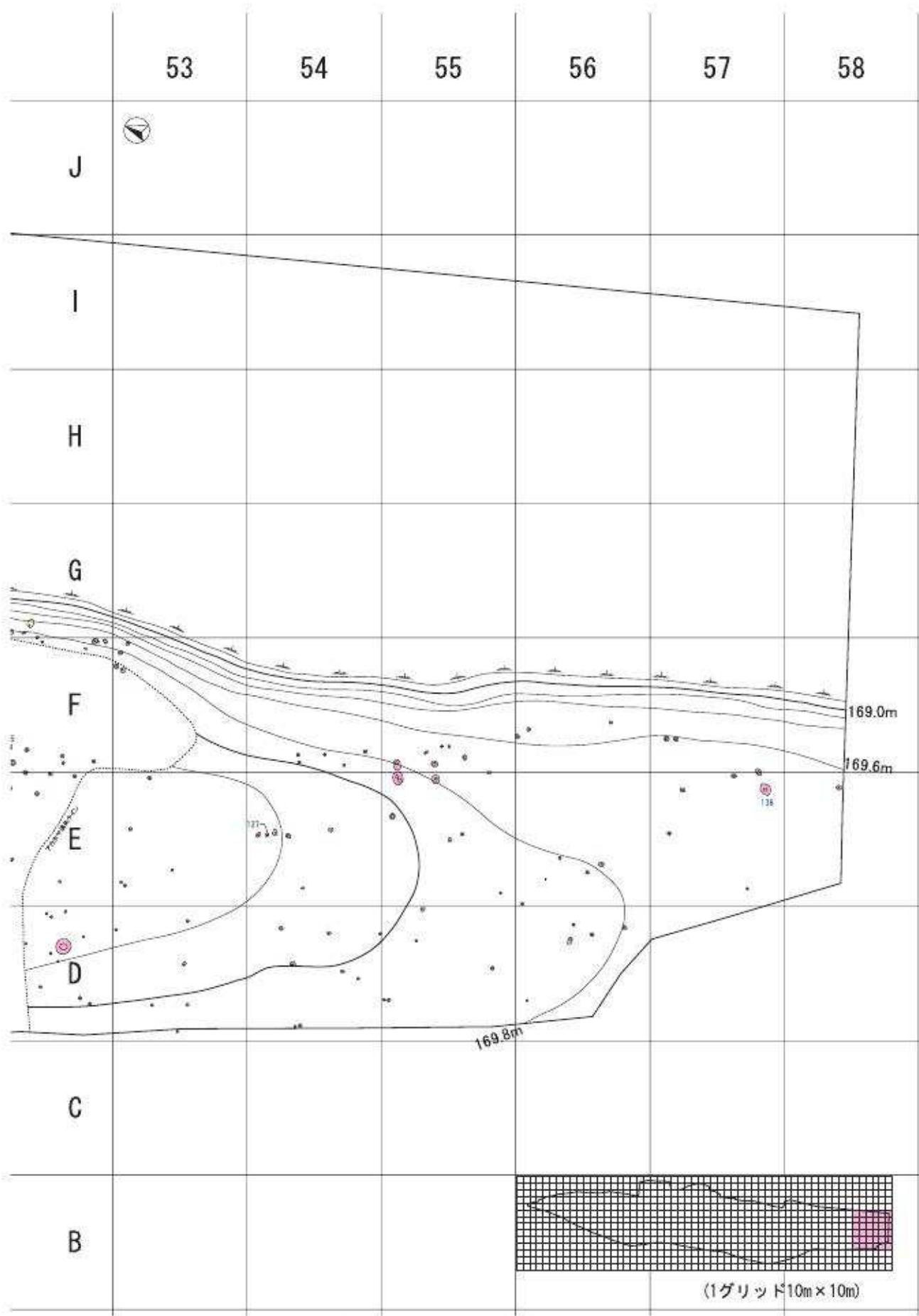
第406図 中世・近世遺構配置図(6)



第407図 中世・近世遺構配置図(7)



第408図 中世・近世遺構配置図(8)



第409図 中世・近世遺構配置図(9)

(2) 遺構

① 堀立柱建物跡（第410図～第418図）

堀立柱建物跡は、3間×4間の建物が2棟、3間×3間の建物が1棟、2間×4間の建物が1棟、2間×3間の建物が7棟、2間×2間の建物が2棟、1間×3間の建物が1棟の合計14棟が検出された。調査時に検出できたものもあったが、整理作業中に組み立てたものがほとんどである。また、出土した柱穴内遺物は、ほとんどが小片であった。それぞれの遺構内で報告する。

堀立柱建物跡1号（第410図）

H-31・32区で検出された。規格は2間×3間の建物である。大きさは4.8m×6.8mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので32cm、最も深いもので100cmとなるが、残存値で90～100cm程度の深さのものが多い。土坑23号と炉状遺構5号を切る形で柱穴が検出されているので、建物の時期は近世のものと思われる。柱穴内遺物は、景德鎮窯系の青花と17世紀中期以降の肥前産染付の徳利が出土している。

堀立柱建物跡2号（第411図）

G・H-33・34区で検出された。堀立柱建物跡3号と切り合う建物である。規格は3間×4間の建物であ

る。北側に庇を持つ。大きさは6.3m×10.2mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので10cm、最も深いもので80cmとなるが、残存値で20～50cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

堀立柱建物跡3号（第412図）

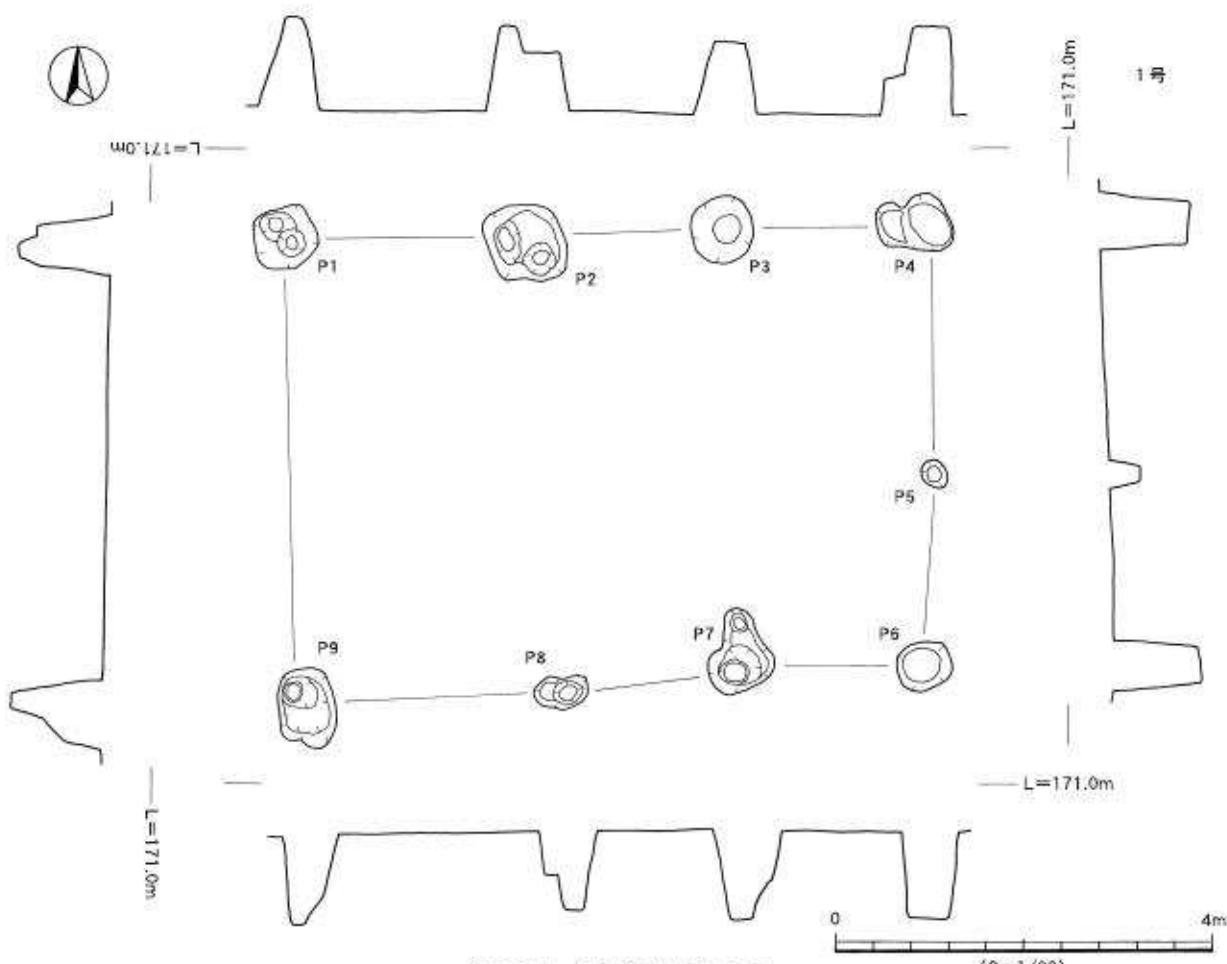
G・H-33・34区で検出された。規格は3間×4間の建物である。大きさは5.9m×7.8mである。柱穴の検出面からの深さは30～40cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

堀立柱建物跡4号（第412図）

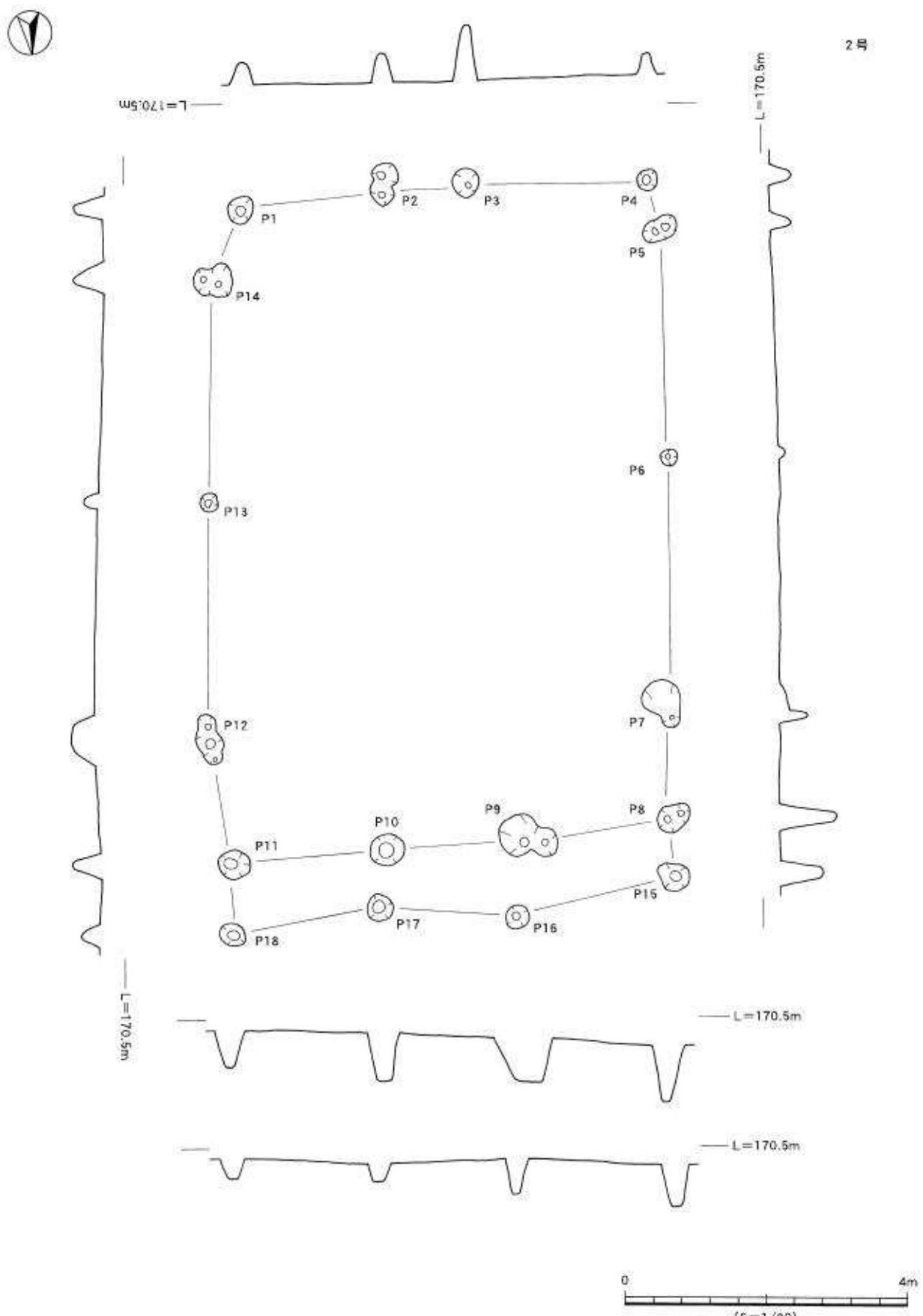
D-35・36区で検出された。規格は2間×3間の建物である。大きさは4.0m×7.0mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので30cm、最も深いもので58cmとなるが、残存値で30～40cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

堀立柱建物跡5号（第413図）

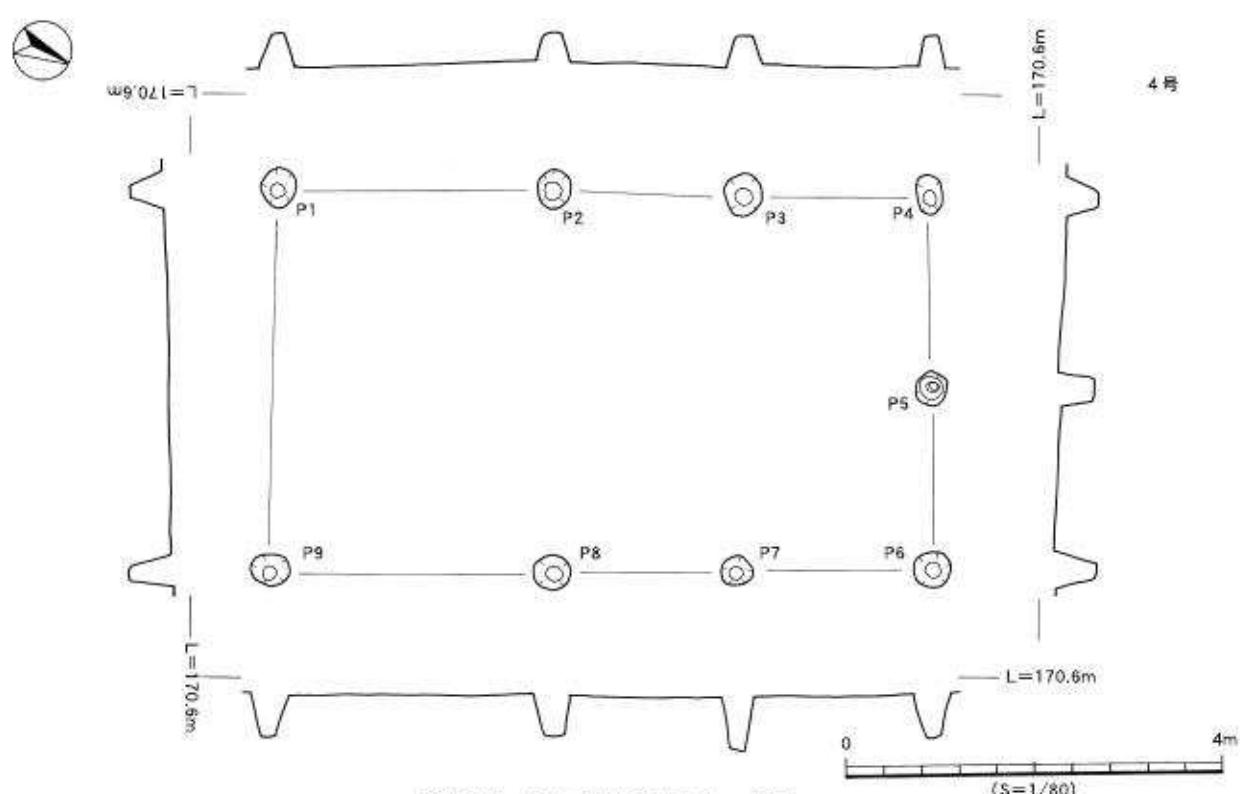
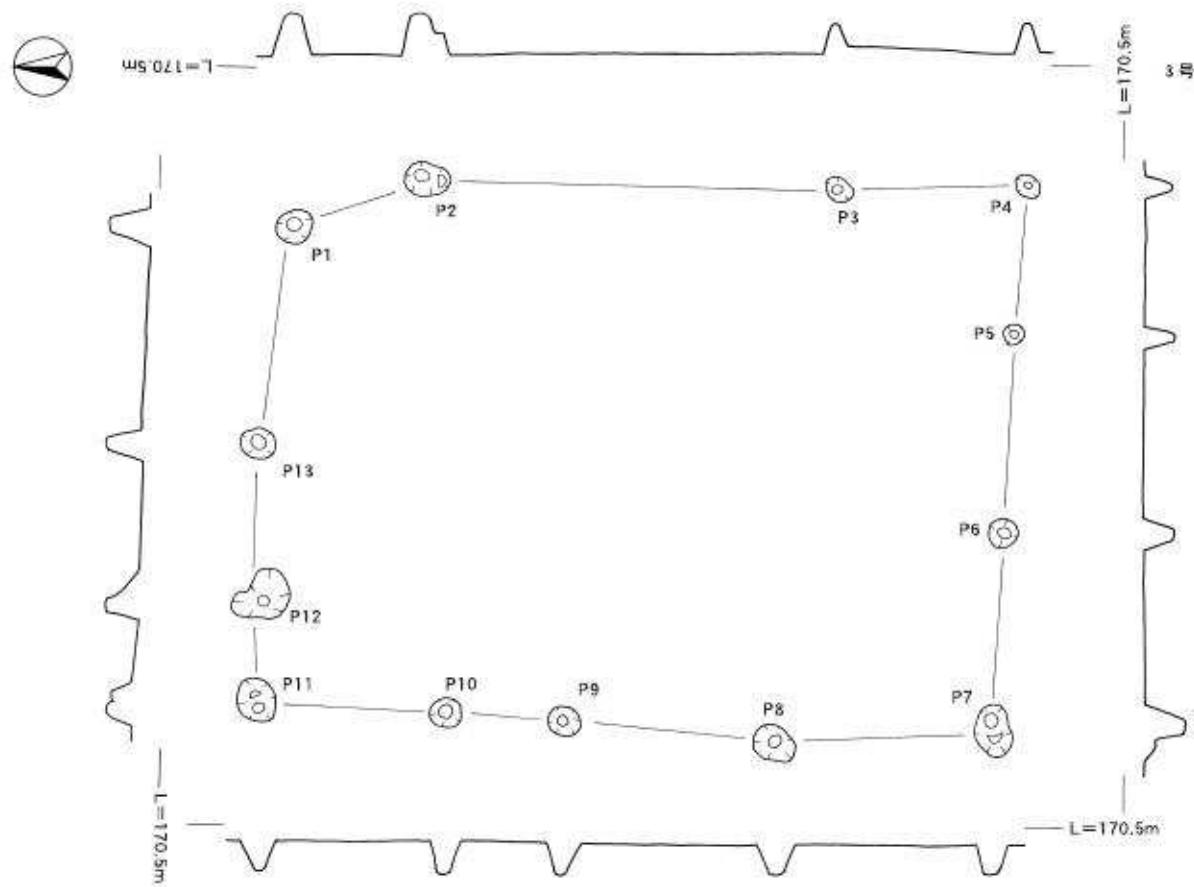
E-35・36区で検出された。規格は2間×3間の建物である。大きさは5.0m×6.9mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので30cm、最も深いもので70cmとなるが、残存値で30～60cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。



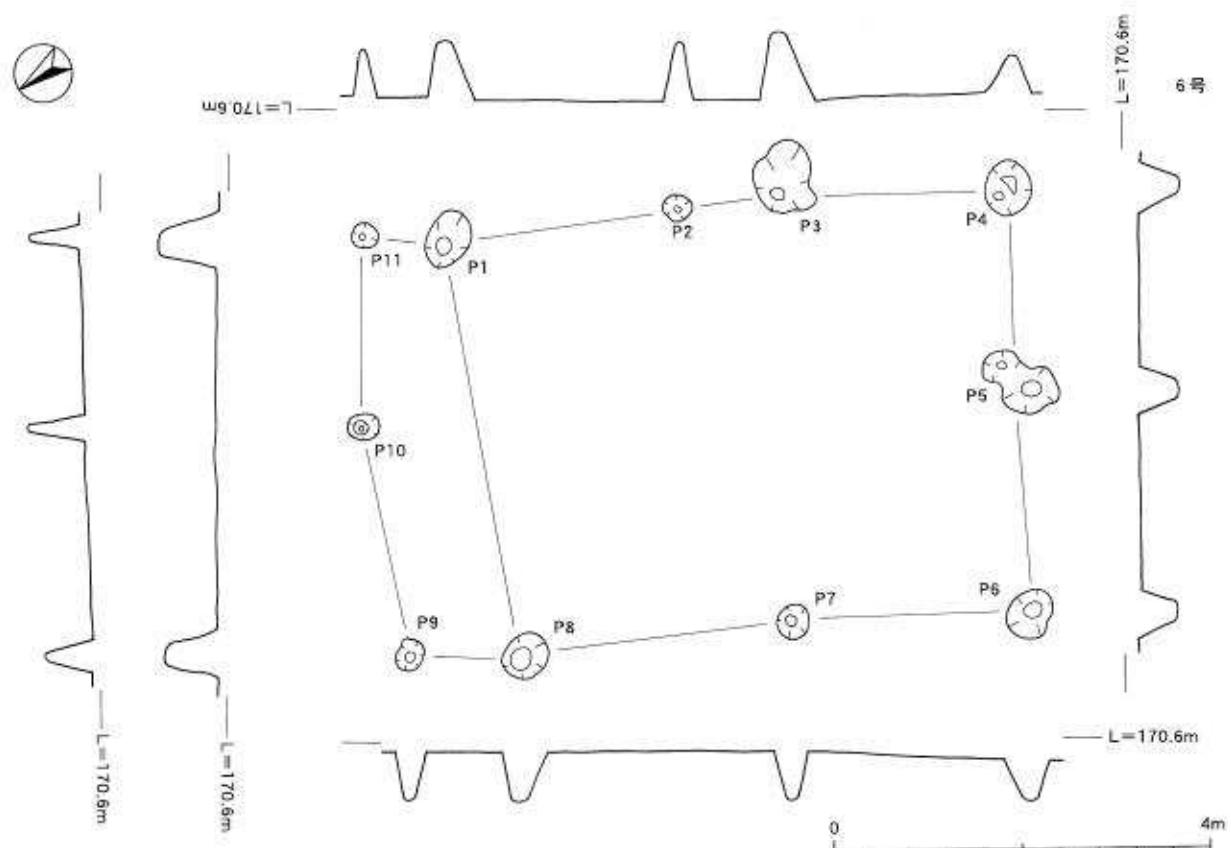
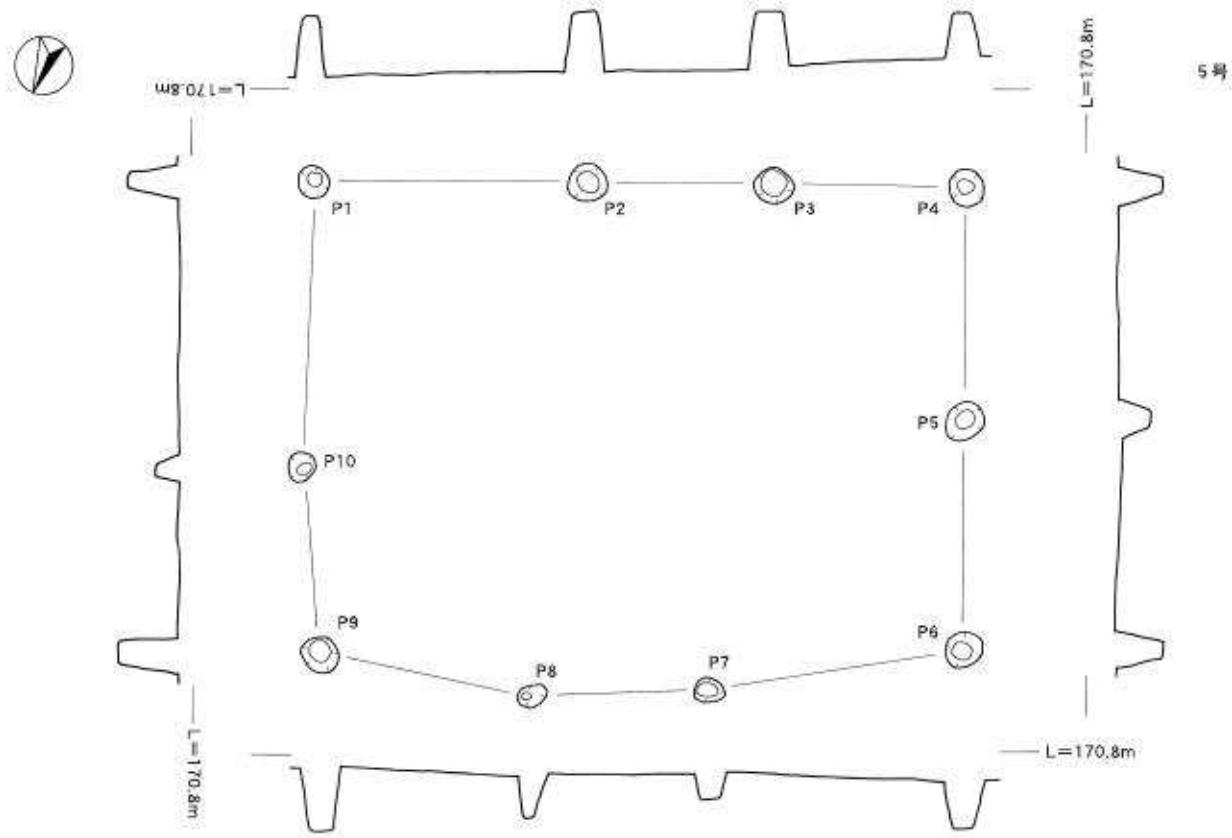
第410図 堀立柱建物跡1号



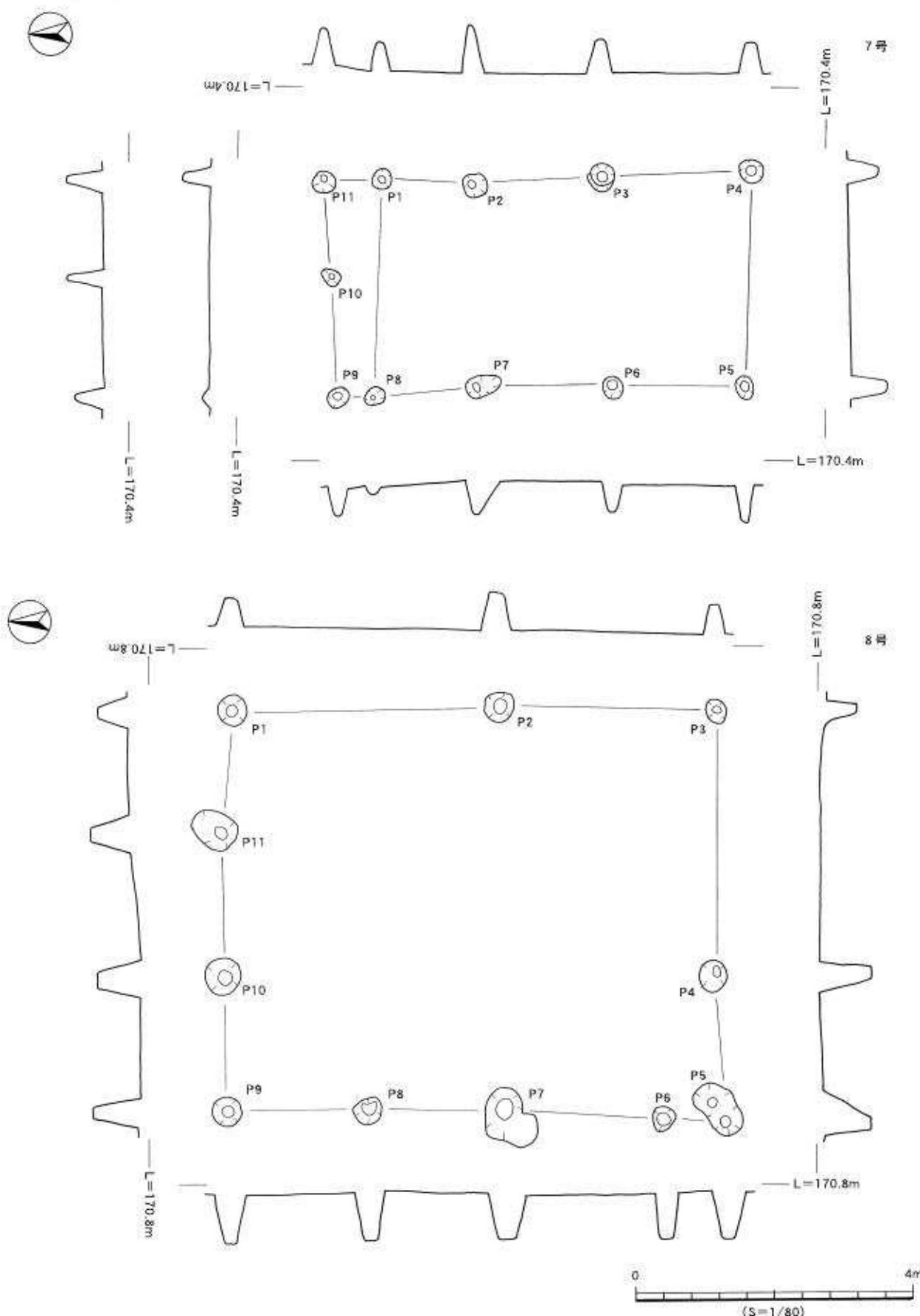
第411図 堀立柱建物跡 2号



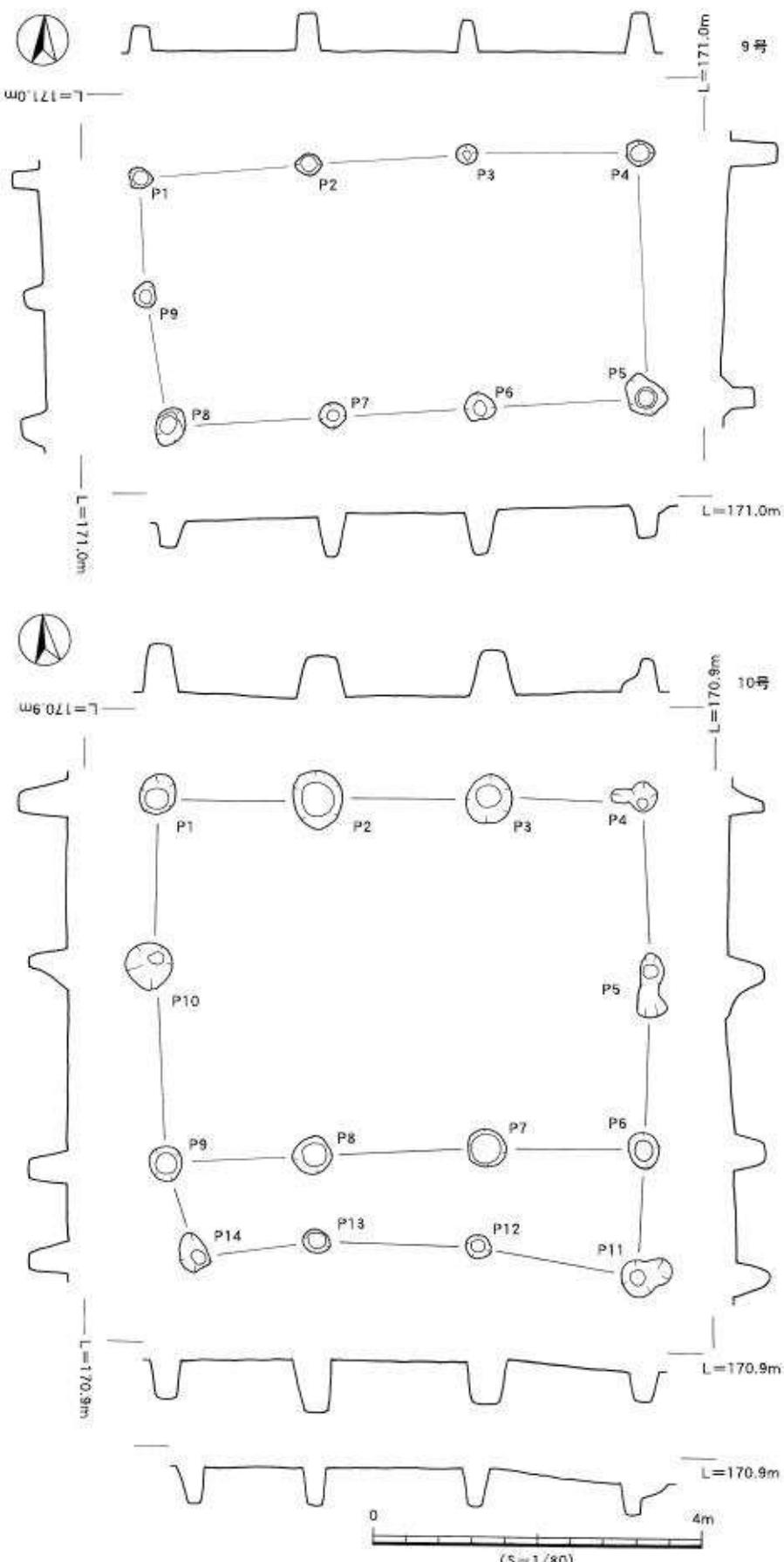
第412図 掘立柱建物跡 3号・4号



第413図 掘立柱建物跡 5号・6号



第414図 挖立柱建物跡 7号・8号



第415図 掘立柱建物跡 9号・10号

掘立柱建物跡 6号（第413図）

H-36・37区、I-37区で検出された。規格は2間×2間の建物である。北側に庇を持つ。大きさは4.5m×6.9mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので40cm、最も深いもので74cmとなるが、残存値で40~50cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は、肥前産の染付碗、溝縁皿、擂鉢、瓦質土器の擂鉢が出土した。

掘立柱建物跡 7号（第414図）

B・C-37・38区で検出された。規格は1間×3間の建物である。北側に庇を持つ。大きさは3.1m×6.1mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので10cm、最も深いもので70cmとなるが、残存値で40~50cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡 8号（第414図）

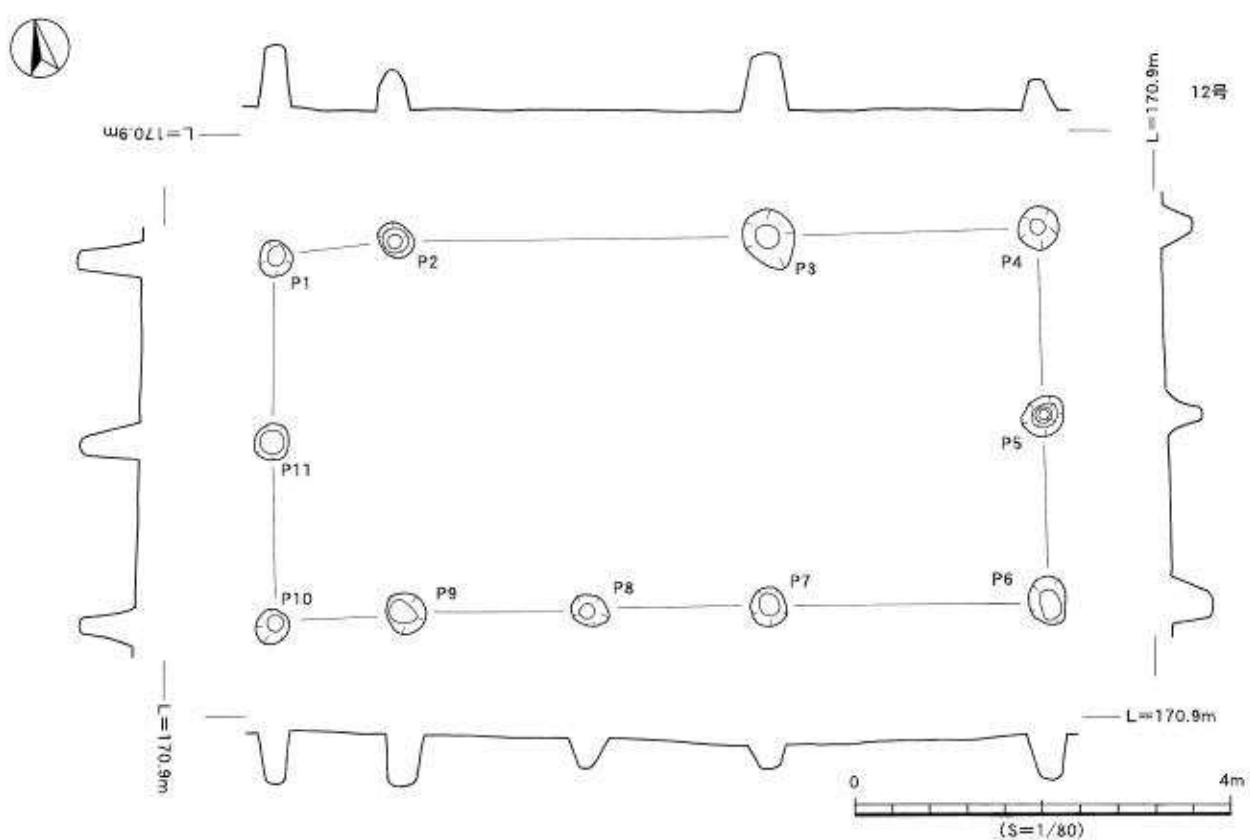
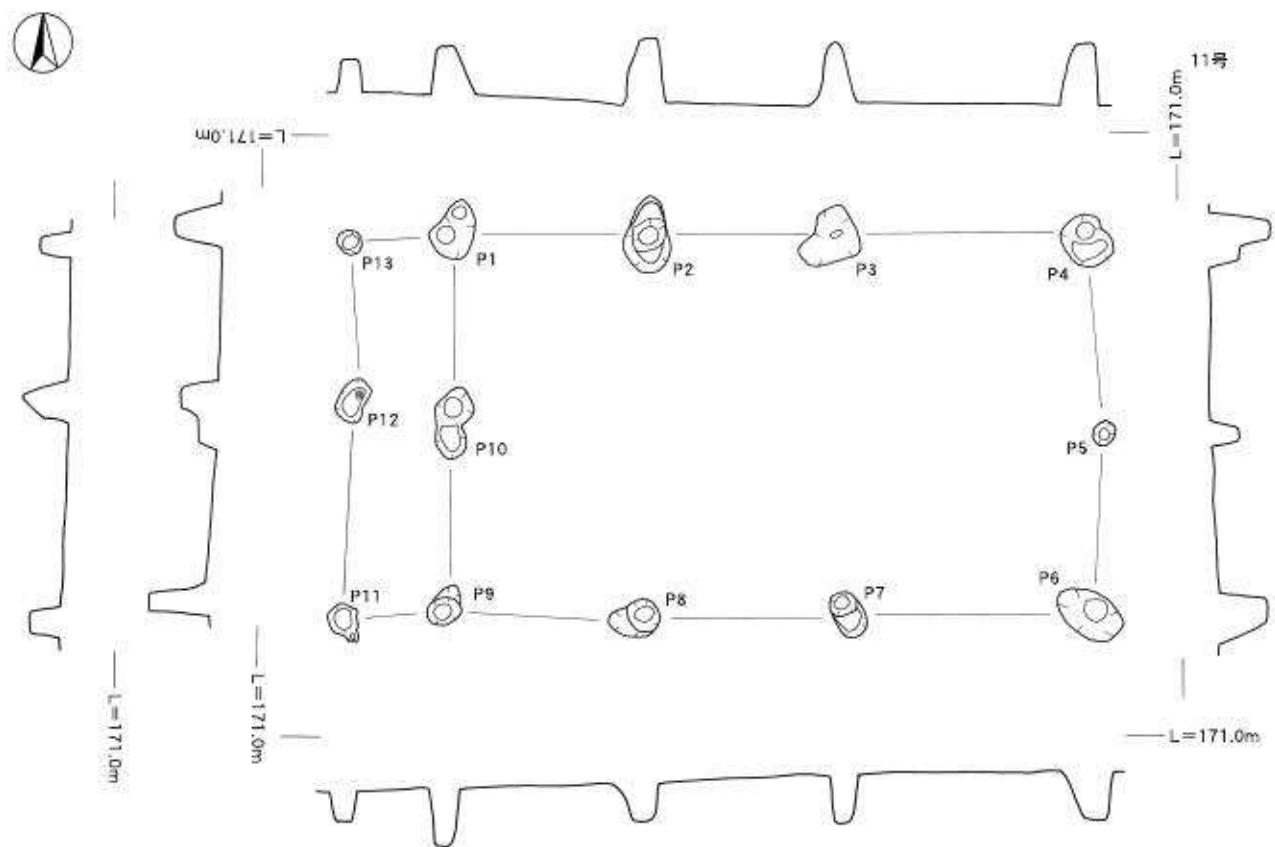
I・J-38・39区で検出された。規格は3間×3間の建物である。大きさは6.0m×7.1mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので40cm、最も深いもので75cmとなるが、残存値で60~70cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の陶器碗、薩摩産の龍門司窯の皿が出土した。

掘立柱建物跡 9号（第415図）

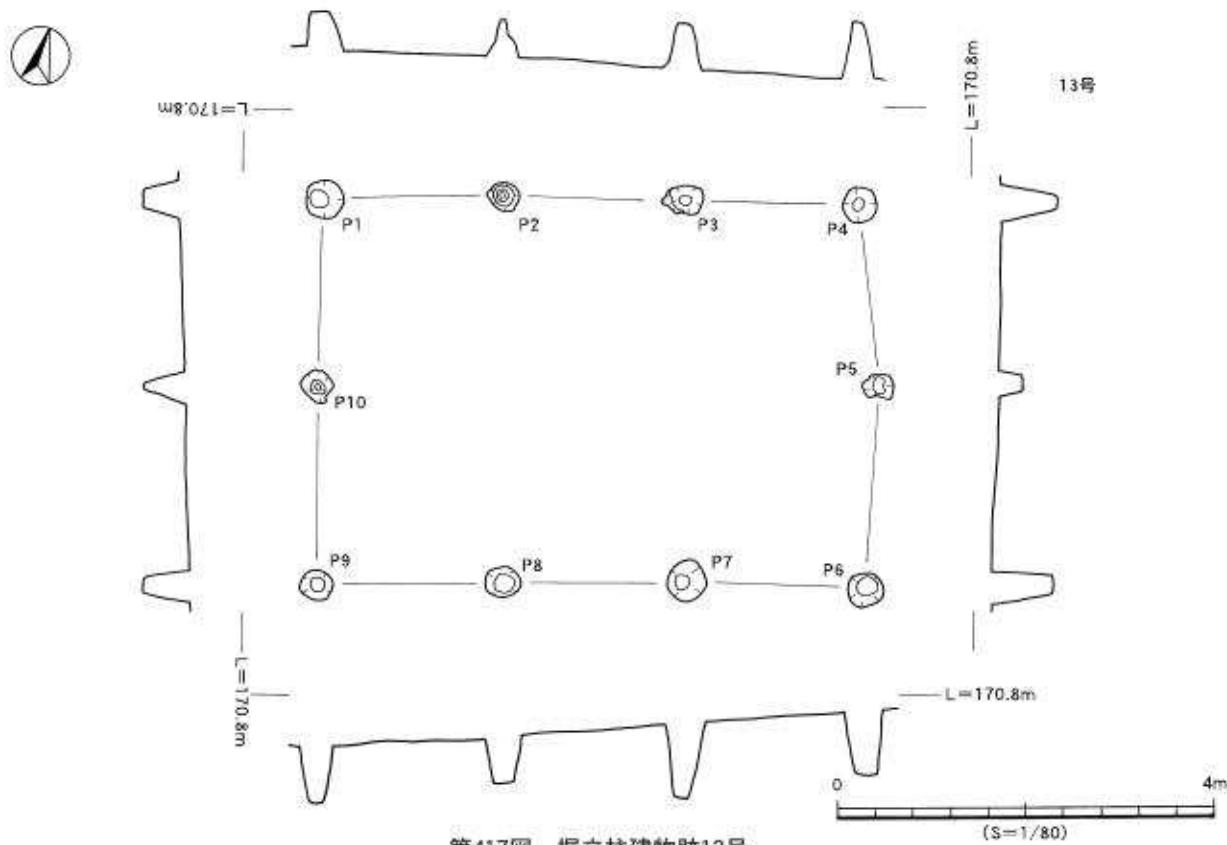
C-39区で検出された。規格は2間×3間の建物である。大きさは3.0m×6.1mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので28cm、最も深いもので50cmとなるが、残存値で40~50cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡 10号（第415図）

D・E-40・41区で検出された。規格は2間×3間の建物である。南側に庇を持つ。大きさは5.8m×5.9mである。柱穴の深さは、最も浅いもので40cm、最も深いもので62cmとなるが、残存値で40~50cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の銅緑釉碗が出土した。



第416図 掘立柱建物跡11号・12号



第417図 堀立柱建物跡13号

堀立柱建物跡11号（第416図）

C・D-41区で検出された。規格は2間×3間の建物である。西側に庇をもつ。大きさは4.0m×8.0mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので30cm、最も深いもので70cmとなるが、残存値で30~50cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の溝縁皿が出土した。

堀立柱建物跡12号（第416図）

F・G-41・42区で検出された。規格は2間×4間の建物である。大きさは4.0×8.2mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので28cm、最も深いもので68cmとなるが、残存値で30~60cm程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の染付碗と薩摩產堂平窓の甕の胴部

が出土した。

堀立柱建物跡13号（第417図）

E-45・46区で検出された。規格は2間×3間の建物である。大きさは4.1m×5.8mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので25cm、最も深いもので80cmとなるが、残存値で40~60cm程度の深さのものが多い。

堀立柱建物跡14号（第418図）

G・H-48区で検出された。規格は2間×2間の総柱の建物である。東側に庇と、北側に部分的に張り出しを持つ。大きさは5.0m×8.3mである。柱穴の検出面からの深さは、最も浅いもので30cm、最も深いもので80cmとなるが、残存値で50~70cm程度の深さのものが多い。

堀立柱建物跡計測表①

堀立柱建物跡1号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	70	67	100
2	100	80	100
3	72	70	80
4	80	40	100
5	32	26	32
6	60	50	92
7	92	40	94
8	60	38	80
9	88	60	90

堀立柱建物跡1号規格表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 4	680	1 - 9	480
1 - 2	240	2 - 8	480
2 - 3	210	3 - 7	470
3 - 4	220	4 - 6	470
9 - 6	670	4 - 5	270
9 - 8	290	5 - 6	200
8 - 7	180		
7 - 6	200		

堀立柱建物跡2号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	35	35
2	60	30	40
3	40	40	80
4	30	30	30
5	50	30	30
6	30	25	10
7	70	25	40
8	50	40	80
9	90	40	60
10	50	50	70
11	50	40	60
12	80	30	30
13	28	28	20
14	60	40	40
15	50	30	60
16	40	30	60
17	40	35	30
18	40	30	15

堀立柱建物跡2号規格表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 18	1020	1 - 4	570
1 - 14	110	1 - 2	200
14 - 13	320	2 - 3	120
13 - 12	340	3 - 4	250
12 - 11	180	14 - 5	620
11 - 18	100	13 - 6	650
2 - 17	1000	12 - 7	650
2 - 10	930	11 - 8	620
10 - 17	80	11 - 10	220
3 - 16	1030	10 - 9	200
3 - 9	930	9 - 8	210
9 - 16	100	18 - 15	630
4 - 15	980	18 - 17	210
4 - 5	70	17 - 16	200
5 - 6	330	16 - 15	230
6 - 7	370		
7 - 8	140		
8 - 15	80		

掘立柱建物跡2号柱穴計測表

掘立柱建物跡3号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	40	50
2	50	30	50
3	32	25	30
4	30	26	30
5	25	25	30
6	32	28	30
7	58	36	30
8	50	38	26
9	34	30	40
10	34	30	40
11	50	40	25
12	64	50	40
13	40	30	40

掘立柱建物跡5号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	34	34	68
2	40	40	68
3	42	40	60
4	40	38	48
5	44	40	30
6	40	38	48
7	34	28	30
8	32	20	48
9	40	40	70
10	30	30	30

掘立柱建物跡7号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	35	30	50
2	30	30	40
3	38	30	70
4	45	40	50
5	33	40	50
6	38	22	55
7	32	26	40
8	50	30	50
9	30	20	10
10	32	30	40
11	30	22	50

掘立柱建物跡9号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	30	25	32
2	36	30	50
3	26	26	40
4	38	30	50
5	54	46	40
6	40	32	50
7	30	30	50
8	50	40	30
9	40	20	28

掘立柱建物跡11号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	65	40	50
2	80	45	70
3	65	45	60
4	60	40	65
5	30	25	30
6	75	50	50
7	50	30	50
8	50	40	40
9	45	35	60
10	80	28	40
11	40	30	30
12	50	28	48
13	28	28	32

掘立柱建物跡13号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	40	40
2	40	30	40
3	50	30	50
4	40	38	60
5	34	20	25
6	40	36	66
7	40	40	80
8	40	30	50
9	40	30	60
10	40	30	50

掘立柱建物跡3号柱穴計測表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 4	780	1 - 11	510
1 - 2	160	1 - 13	230
2 - 3	420	13 - 12	170
3 - 4	200	12 - 11	120
13 - 5	810	2 - 10	560
12 - 6	785	3 - 8	590
11 - 7	780	4 - 7	590
10 - 10	200	4 - 5	160
10 - 9	125	5 - 6	220
9 - 8	230	6 - 7	220
8 - 7	230		

掘立柱建物跡4号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	44	36	40
2	44	34	30
3	48	30	30
4	42	28	35
5	40	34	40
6	40	40	50
7	34	30	58
8	40	40	48
9	40	30	50

掘立柱建物跡4号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 4	690	1 - 9	400
1 - 2	290	2 - 8	400
2 - 3	200	3 - 7	400
3 - 4	200	4 - 6	390
9 - 6	700	4 - 5	200
9 - 8	300	5 - 6	190
8 - 7	190		
7 - 6	210		

掘立柱建物跡5号柱穴計測表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 4	690	1 - 9	500
1 - 2	290	1 - 10	310
2 - 3	200	10 - 9	190
3 - 4	200	2 - 8	550
10 - 5	700	3 - 7	540
9 - 6	680	4 - 6	490
9 - 8	225	5 - 6	250
8 - 7	190	5 - 6	250
7 - 6	275		

掘立柱建物跡7号柱穴計測表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
11 - 4	610	11 - 9	310
11 - 2	80	11 - 10	140
1 - 2	130	10 - 9	170
2 - 3	190	1 - 8	310
3 - 4	220	2 - 7	290
9 - 5	580	3 - 6	300
9 - 8	50	4 - 5	310
8 - 7	150		
7 - 6	200		
6 - 5	190		

掘立柱建物跡9号柱穴計測表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 4	610	1 - 8	300
1 - 2	200	1 - 9	150
2 - 3	190	9 - 8	160
3 - 4	210	2 - 7	310
8 - 5	580	3 - 6	310
8 - 7	200	4 - 5	300
7 - 6	180		
6 - 5	200		

掘立柱建物跡11号柱穴計測表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
4 - 13	780	13 - 11	400
13 - 1	100	13 - 12	160
1 - 2	220	12 - 11	240
2 - 3	200	1 - 9	400
3 - 4	265	1 - 10	290
12 - 5	890	10 - 9	200
12 - 10	100	2 - 8	400
10 - 5	690	3 - 7	400
11 - 6	890	4 - 6	480
11 - 9	110	4 - 5	210
9 - 8	210	5 - 6	190
8 - 7	210		
7 - 6	265		

掘立柱建物跡13号柱穴計測表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 4	570	1 - 9	410
1 - 2	200	1 - 10	200
2 - 3	200	10 - 9	210
3 - 4	180	2 - 8	410
10 - 5	600	3 - 7	400
9 - 6	580	4 - 6	400
9 - 8	200	4 - 5	190
8 - 7	190	5 - 6	210
7 - 6	200		

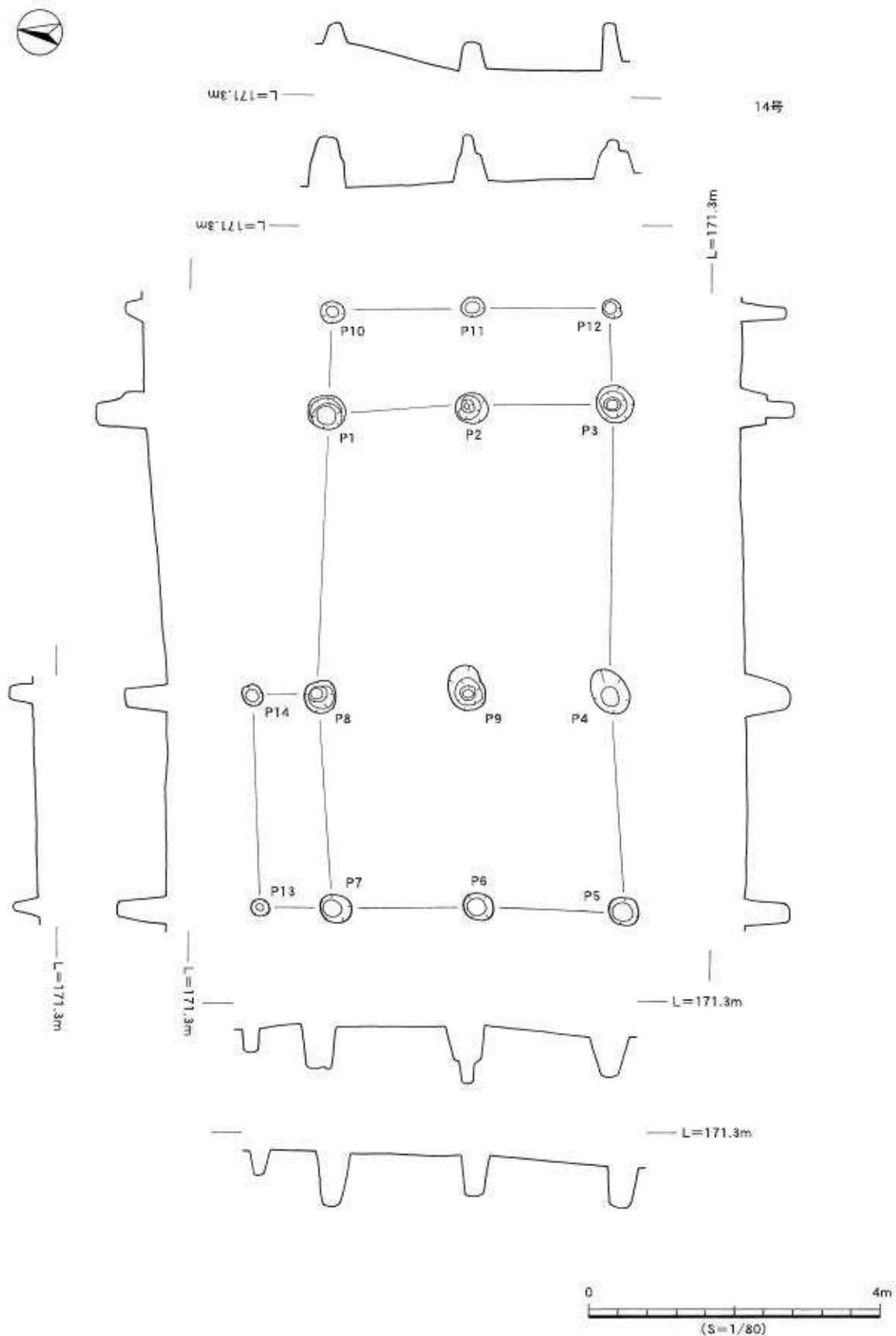
掘立柱建物跡4号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	35	68
2	42	30	42
3	68	55	60
4	46	40	34
5	50	42	38
6	50	40	40
7	40	40	28
8	40	30	38
9	45	40	55
10	49	32	55
11	40	36	60

掘立柱建物跡4号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)

<tbl_r cells



第418図 堀立柱建物跡14号

② 積穴建物跡（第419図～第428図）

積穴建物跡は、遺跡の中央部から羽月川の下流側にかけて13軒検出された。特に、D～G-40～44区に7軒が集中して検出されている。遺構内遺物は中世末から近世の初め頃のものが多く出土している。

積穴建物跡1号（第419図）

G・H-22区で検出された。2.5m×2.0mの隅丸長方形である。検出面からの深さ約15cmである。南側の一部が搅乱によって壊されている。直径10～20cm、深さ約20～30cmの柱穴が壁側にそって4基検出された。

遺構内遺物

遺構内に台石と考えられる安山岩が2個出土した。1は長さ38.5cm×25cmで重さは12,000g。2は長さ27cm×26cmで重さは11,000gであった。その他、小片で

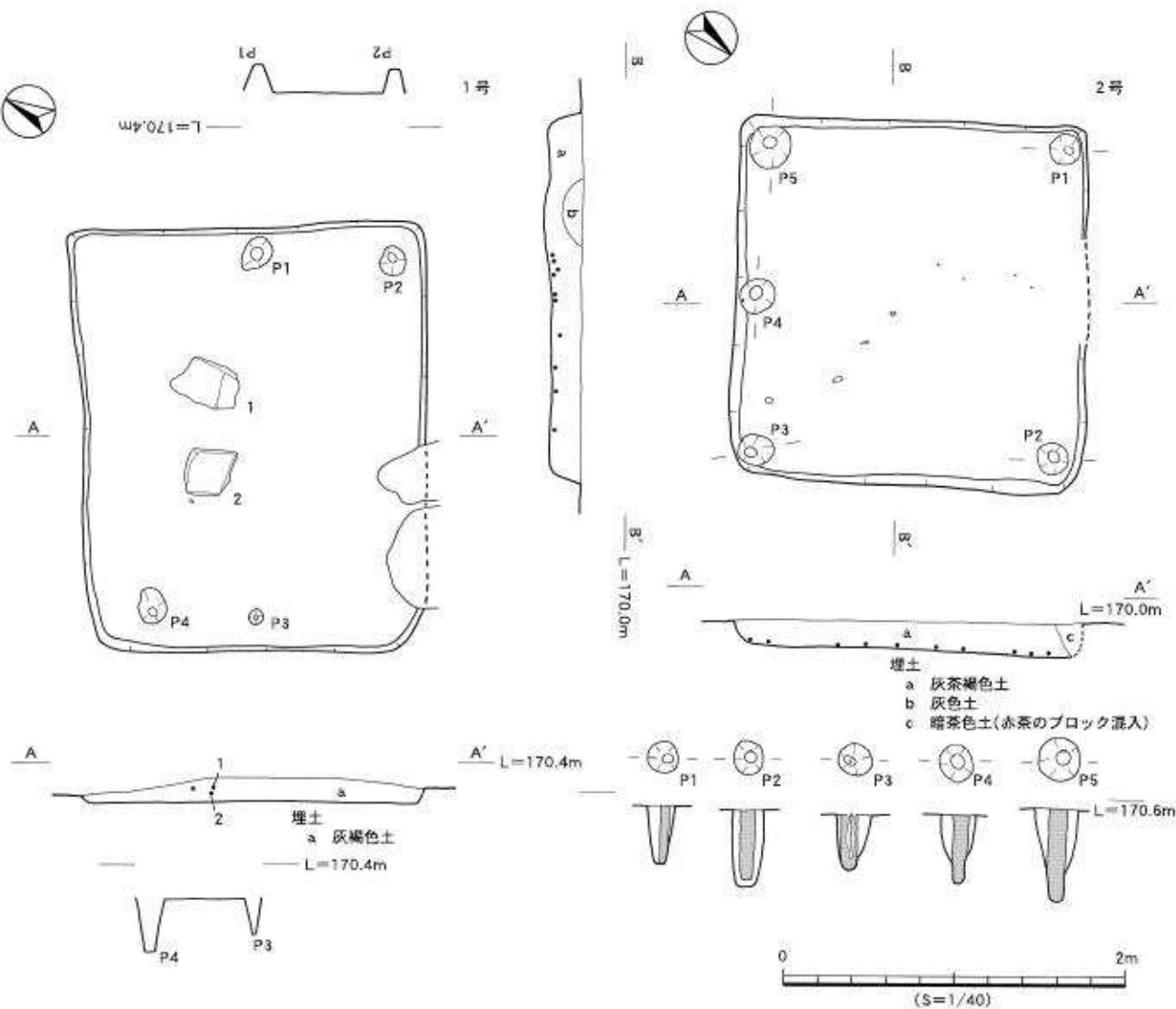
あるが景德鎮窯系の白磁皿が出土した。

積穴建物跡2号（第419図）

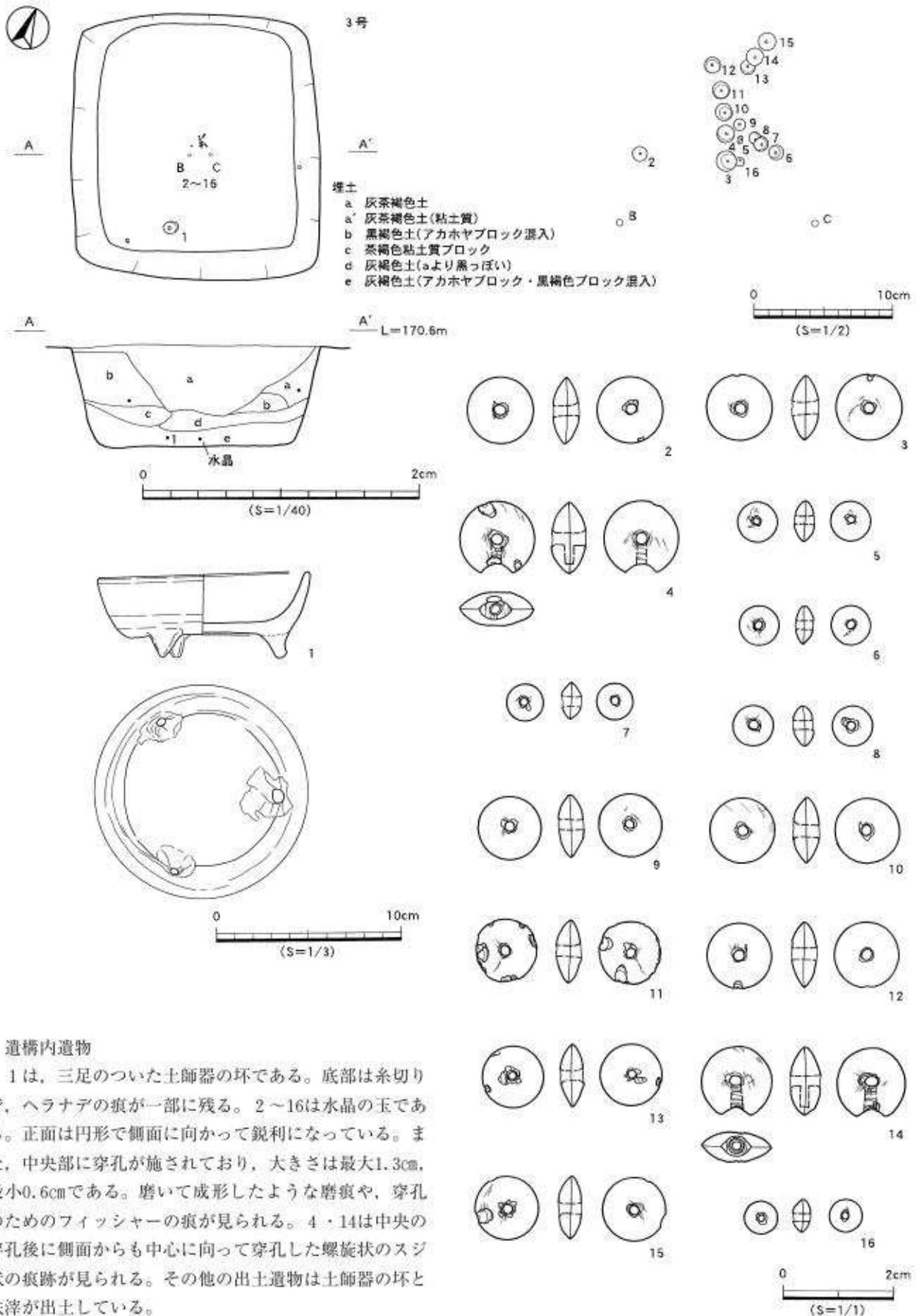
F-27・28区で検出された。2.2m×2.1mの隅丸長方形である。北側の一部は、現代の搅乱で壊されている。検出面からは深さ約20cmである。壁側にそって柱穴が5基検出された。柱穴内には腐敗した木材の残存が確認された。残存状況の良かった柱穴3号の木材は長さ29cm、幅4cm、厚みが1.5cmであった。その他、中・近世にあたる遺物は出土しなかった。

積穴建物跡3号（第420図）

D-31区で検出された。1.9m×1.8mの隅丸長方形である。検出面からの深さは約70cmである。柱穴は検出できなかった。遺構中央部に集中して穿孔のある水晶の玉が15個出土した（科学分析参照）。



第419図 積穴建物跡1号・2号



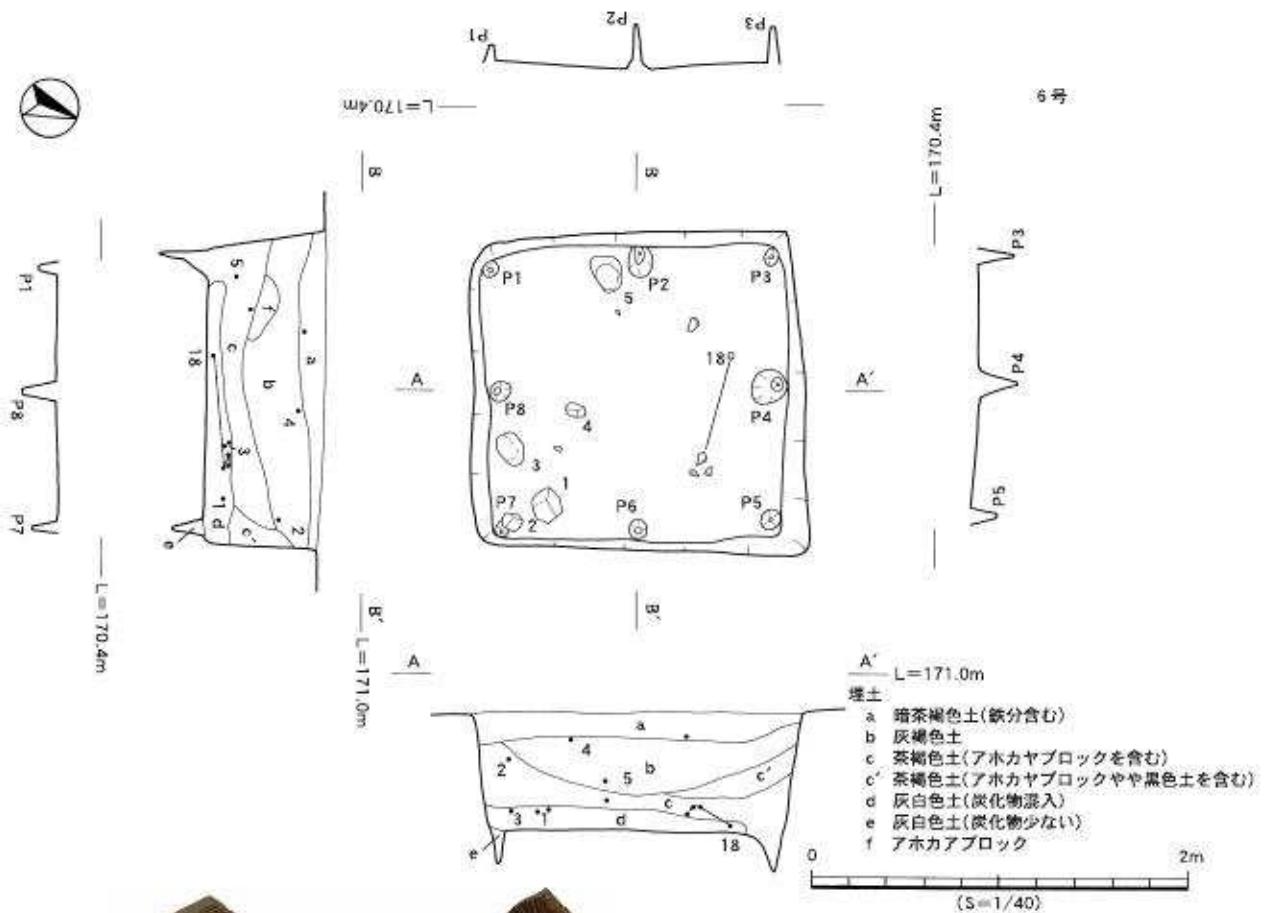
遺構内遺物

1は、三足のついた土師器の壺である。底部は糸切りで、ヘラナデの痕が一部に残る。2~16は水晶の玉である。正面は円形で側面に向かって鋭利になっている。また、中央部に穿孔が施されており、大きさは最大1.3cm、最小0.6cmである。磨いて成形したような磨痕や、穿孔のためのフィッシャーの痕が見られる。4・14は中央の穿孔後に側面からも中心に向って穿孔した螺旋状のスジ状の痕跡が見られる。その他の出土遺物は土師器の壺と鉄滓が出土している。

第420図 竪穴建物跡 3号 出土遺物



第421図 竪穴建物跡 4号 出土遺物・5号



沿って6基検出された。埋土中からは灰がブロック化したものや、焼土が多量に検出されたことから、火を使用した竪穴建物跡と思われる。遺構内遺物は出土しなかった。

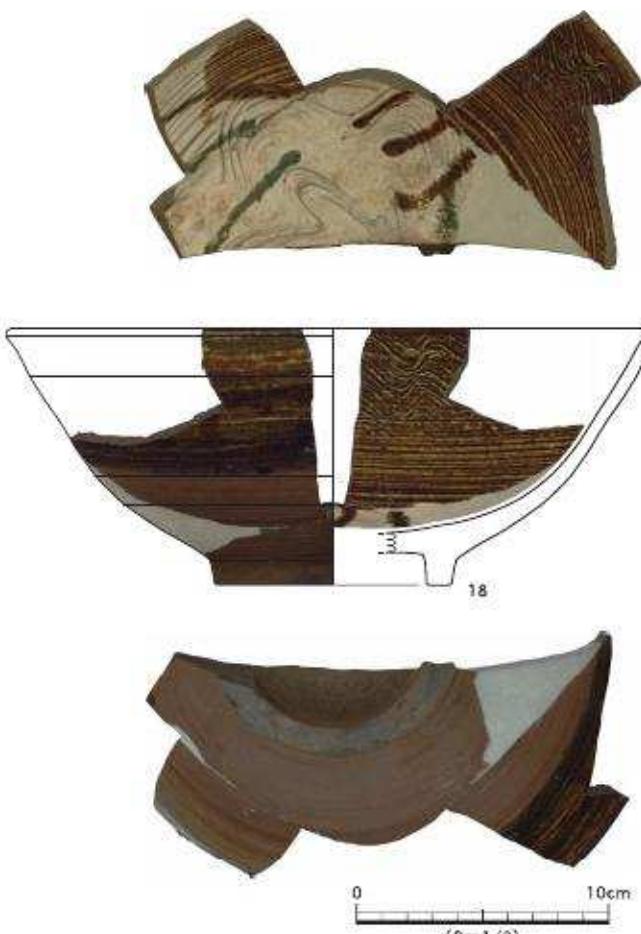
竪穴建物跡 6号 (第422図)

F-40・41区で検出された。1.8m×1.8mの隅丸方形である。検出面からの深さは約60cmである。直径が約10～20cmの柱穴が壁側に沿って、8基検出された。

遺構内遺物

遺構内からは、軽石製品が出土した。遺構平面図中1は大きさ25cm×18.5cmで重さは1,810gである。2は大きさ13cm×11cmで重さは385gである。3は24.6cm×14.8cmで重さは1100gである。4は11cm×10cmで重さは235gである。5は21.5cm×18.5cmで重さは1390gである。

18は肥前産の二彩手の鉢である。鉄釉と銅緑釉を掛流したものである。



第422図 竪穴建物跡 6号 出土遺物

豊穴建物跡 7号（第423図）

G-41区で検出された。1.9m×1.9mの隅丸方形である。検出面から深さ約60cmである。直径が約10~20cm、深さ20~30cmの柱穴が壁側に沿って8基検出された。

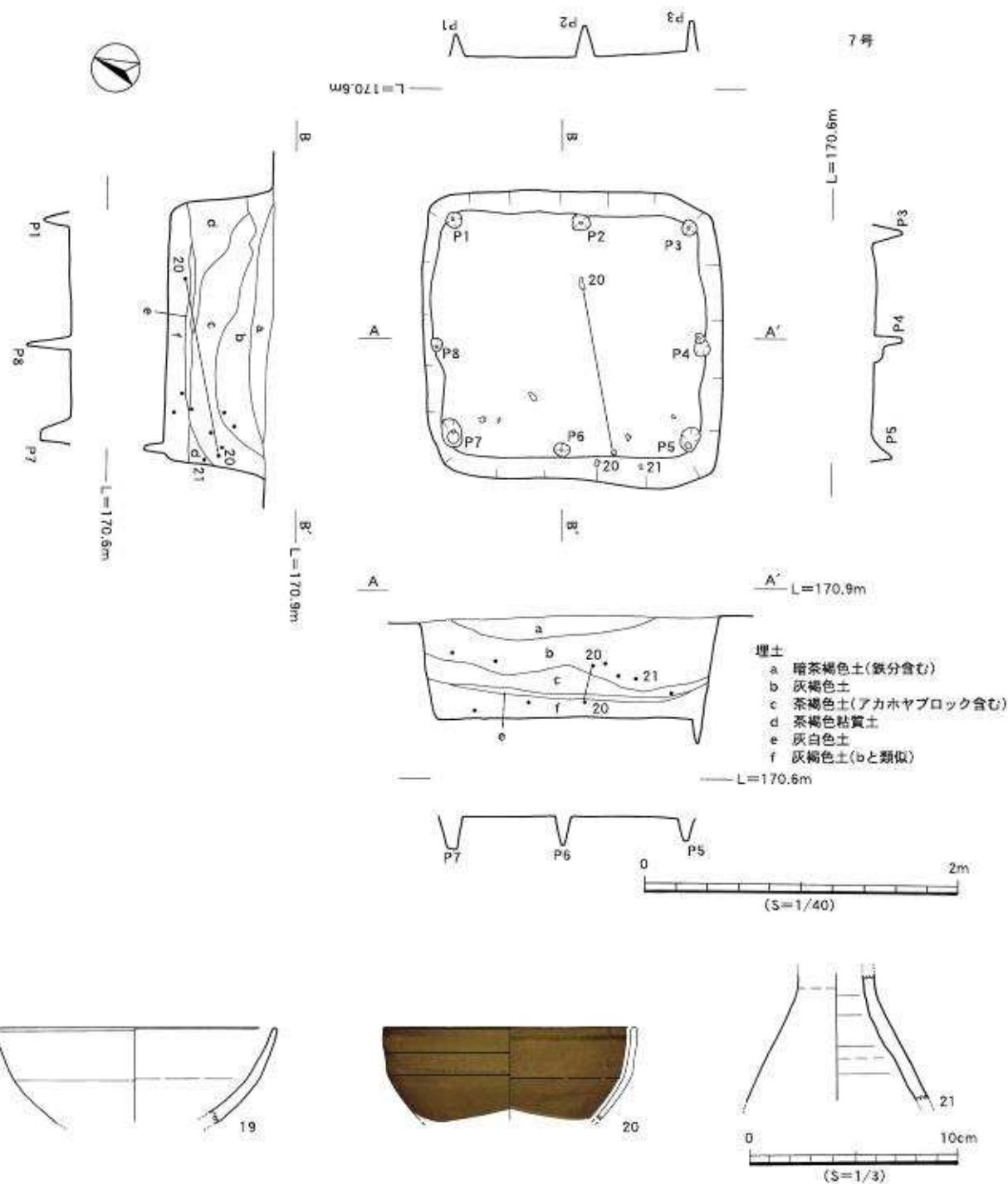
遺構内遺物

19・20は薩摩産の龍門司系の碗である。21は備前産の徳利の頸部である。その他の出土遺物は、17世紀後半の

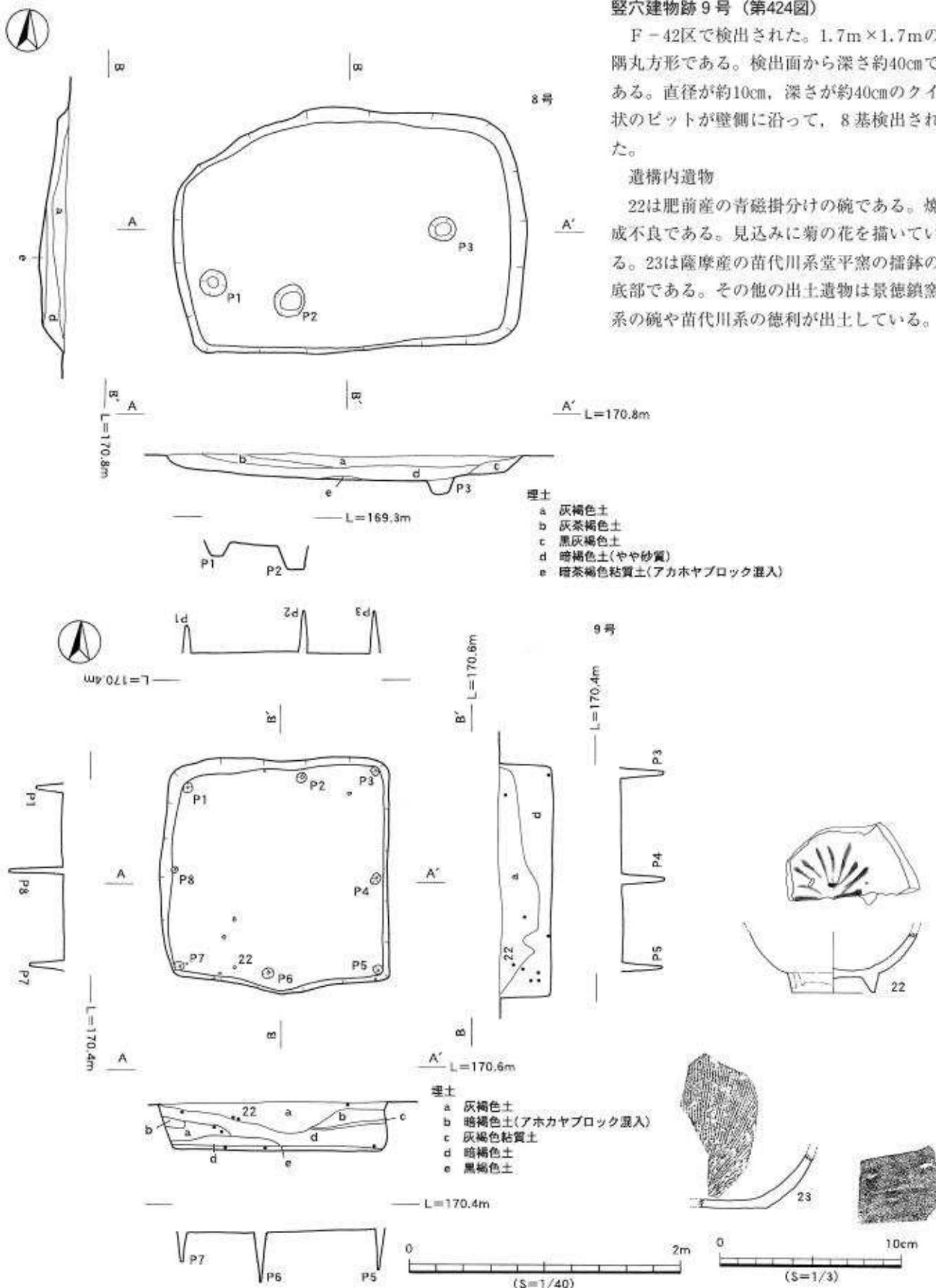
肥前産の磁器が出土している。

豊穴建物跡 8号（第424図）

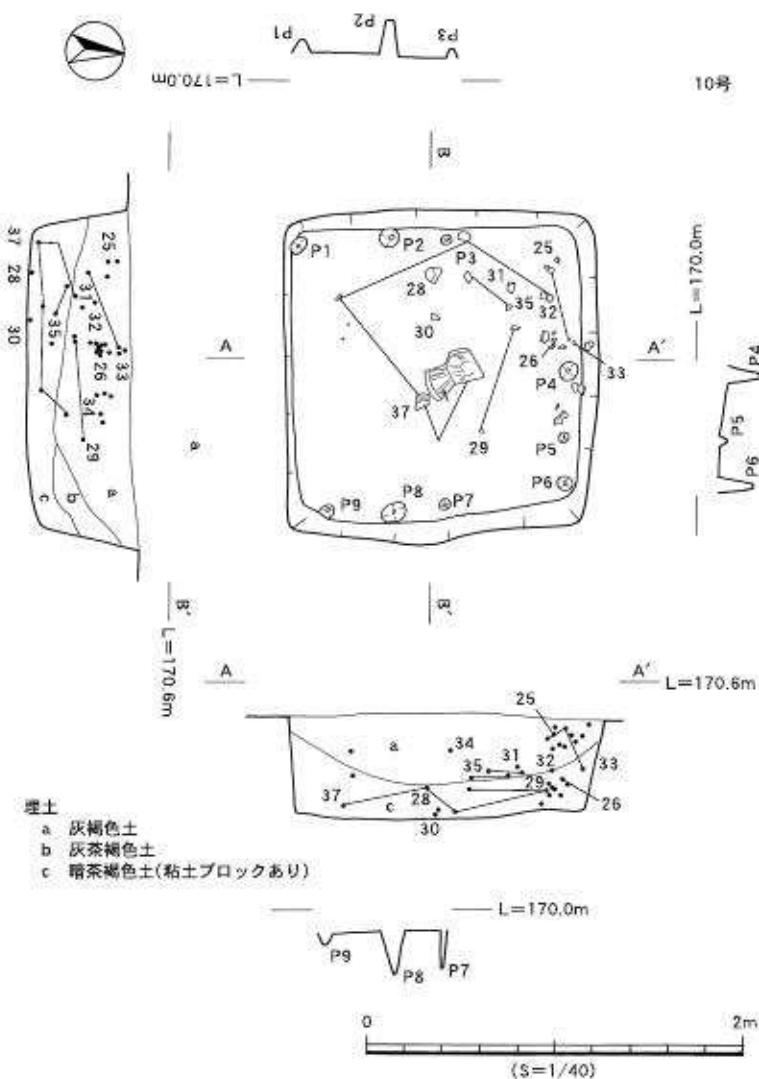
D・E-42区で検出された。2.6m×1.8mの隅丸長方形である。検出面から深さは約20cmである。直径が約20~30cm、深さ約10~20cmのピットが3基検出された。遺構内遺物は出土しなかった。



第423図 豊穴建物跡 7号 出土遺物



第424図 竪穴建物跡 8号・9号 出土遺物



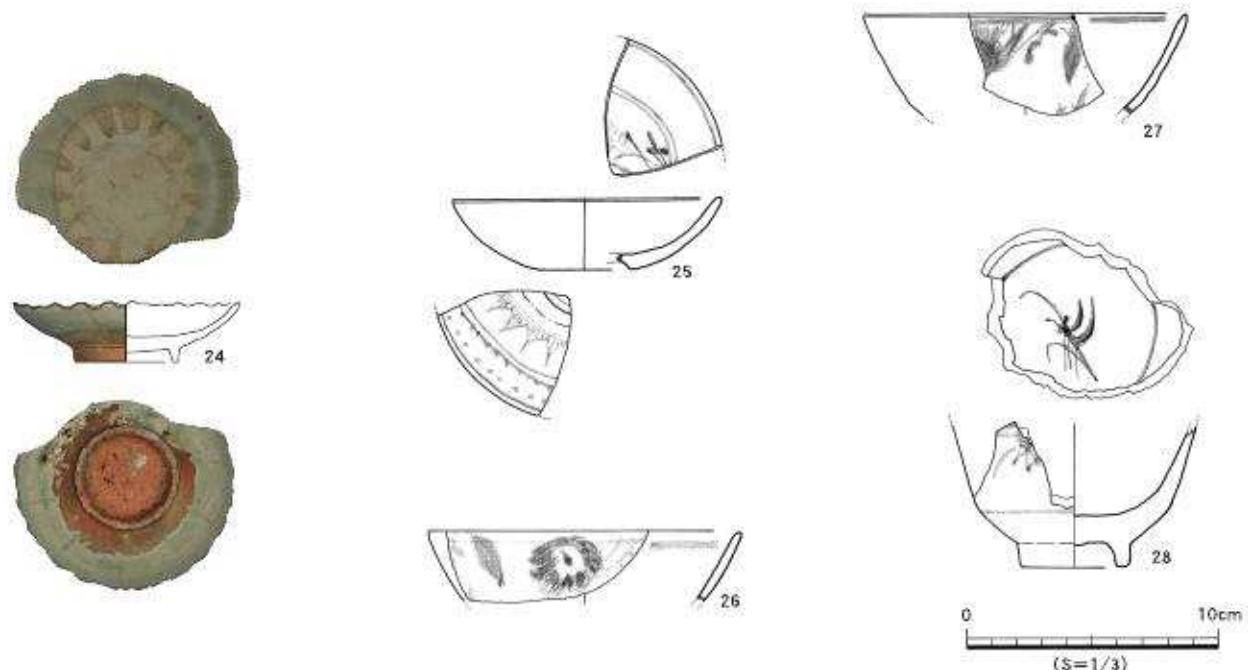
豊穴建物跡10号 (第425・426図)

F-42・43区で検出された。1.8m×1.7mの隅丸方形である。検出面から深さ約55cmである。直径が約10cm、深さが約10~30cmの柱穴が9基検出された。多量の遺構内遺物の帰属時期から近世の遺構であると思われる。

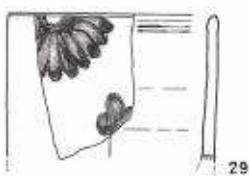
遺構内遺物

24は漳州窯系の青磁の模花皿である。25は景德鎮窯系の基筒底の皿である。26・27は漳州窯系の青花の碗である。28~31は肥前の染付碗である。28は見込みに蝶が描かれている。骨付に砂粒が付着している。29は筒型碗である。30は雁が描かれている。31は天目型の碗である。32は筆文の描かれた浅めの小鉢である。33・34は肥前の染付皿である。35は肥前陶器の器具手碗である。36は肥前陶器の銅緑釉掛流しの碗である。骨付には砂粒が付着している。37は17世紀前半の肥前の桶鉢である。底部は糸切り痕が見られる。

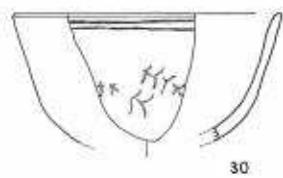
その他の出土遺物は、28と同一文様の碗が1点。32と同一文様の浅めの碗が3点。33と同一文様の皿が2点。34と同一文様の皿が1点出土している。さらに景德鎮窯系の青花の碗が2点、肥前染付の碗が1点、肥前染付の皿が2点出土している。



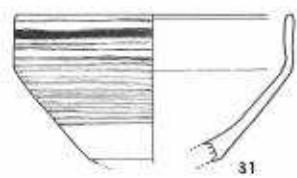
第425図 豊穴建物跡10号 出土遺物①



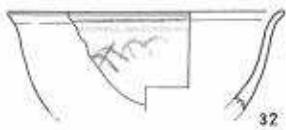
29



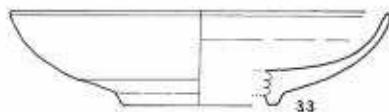
30



31



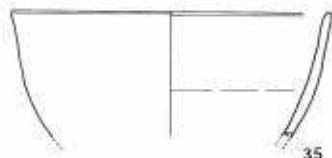
32



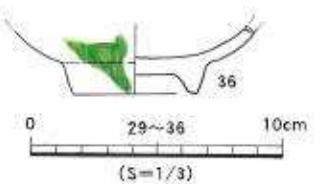
33



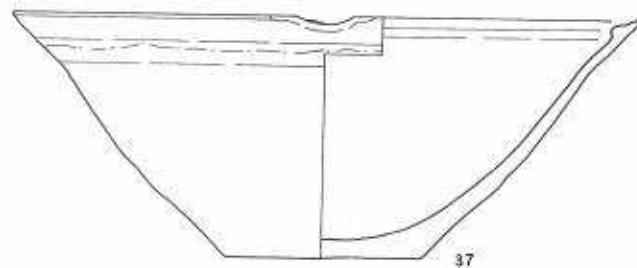
34



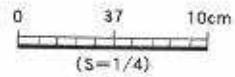
35



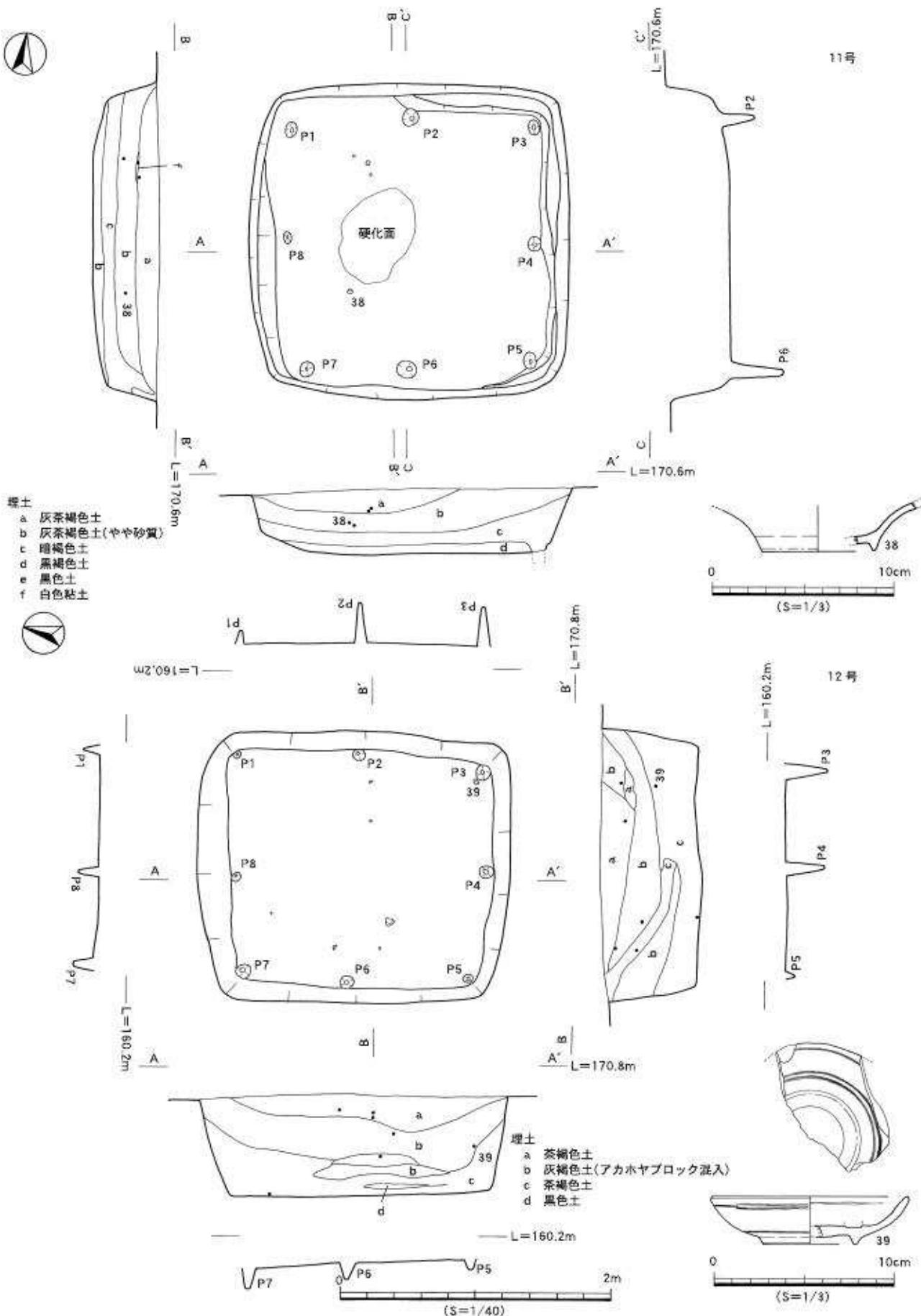
(S=1/3)



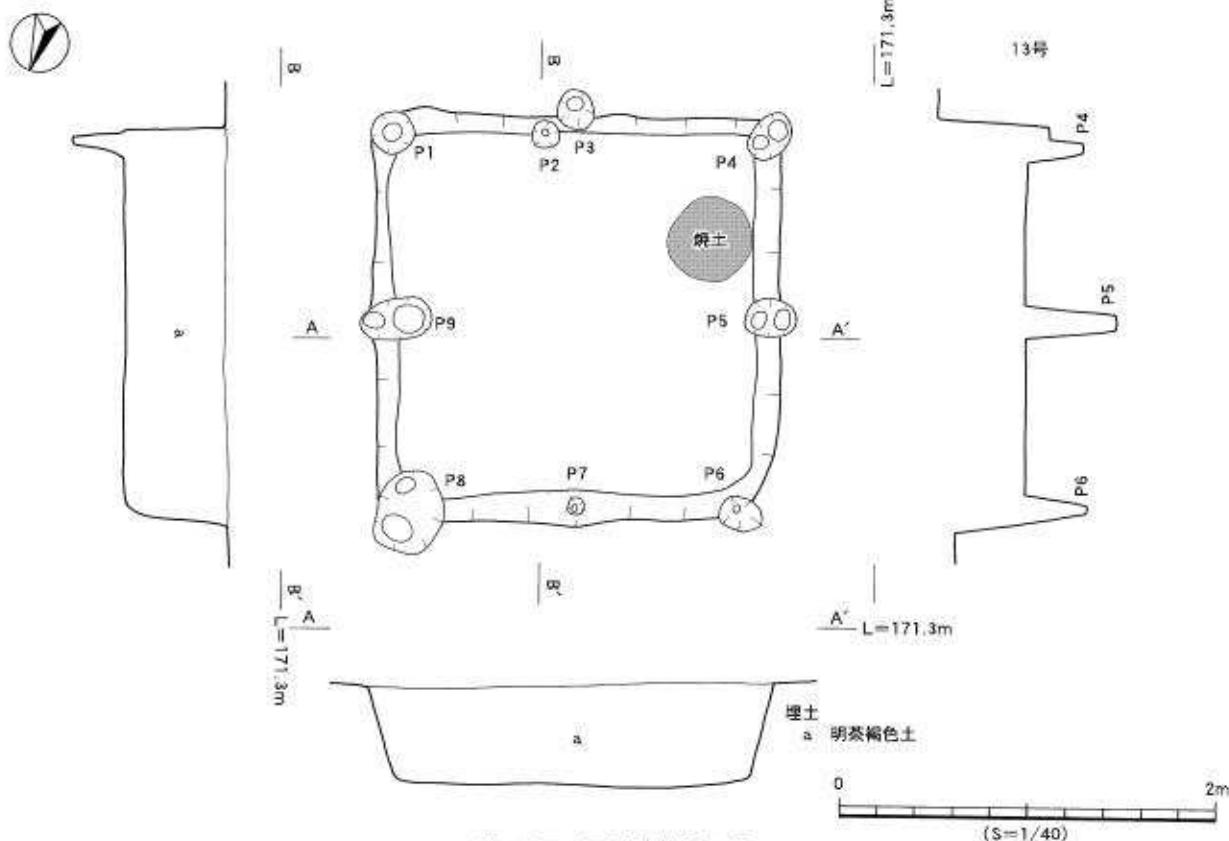
37



第426図 積穴建物跡10号 出土遺物②



第427図 竪穴建物跡11号 出土遺物・12号 出土遺物



第428図 竪穴建物跡13号

竪穴建物跡11号（第427図）

F-43区で検出された。2.4m×2.4mの隅丸方形である。検出面からの深さは約35cmである。直径が約10cm、深さは約30cmのクイ状の柱穴が壁側に沿って、8基検出された。竪穴部の床面はⅦ層のチョコ層であった。中央に硬化面が検出された。

遺構内遺物

38は景德鎮窯系の端反りの白磁皿である。その他の出土遺物は肥前の溝縁皿や白磁である。

竪穴建物跡12号（第427図）

F-44区で検出された。2.3m×2.0mの隅丸長方形である。検出面からの深さは約80cmである。直径が約10cm、深さが約10~30cmのクイ状の柱穴が壁側に沿って8基検出された。

遺構内遺物

39は漳洲窯系の青花の皿で、見込みには輪状の釉剥ぎが施され、高台内底は露胎である。その他の出土遺物は、薩摩産の苗代川系の胴部が数点出土している。

竪穴建物跡13号（第428図）

G-48区で検出された。2.2m×2.2mの隅丸方形である。竪穴部の壁極から直径約20~30cm、深さ約10~30cmの柱穴が13基検出された。竪穴部南側で焼土が検出された。遺構内遺物は鉄滓が出土している。

③ 建物状遺構（第429図・第430図）

平面形状や埋土の堆積状況が竪穴建物跡等とは、異なる3軒を建物状遺構として掲載する。

建物状遺構1号（第429図）

G-30区で検出された。8.1m×3.2mの大型の建物跡である。検出面からの深さは約40~60cmである。遺構の南側部分に緩やかに下った土坑状のものがある。埋土状況から切り合ひが認められず、建物の一部と判断したものの土坑21が近くにあるので、時期差のある土坑の可能性もある。直径が約20cm、深さが約20~50cmの柱穴と思われるビットが8基検出された。

遺構内遺物

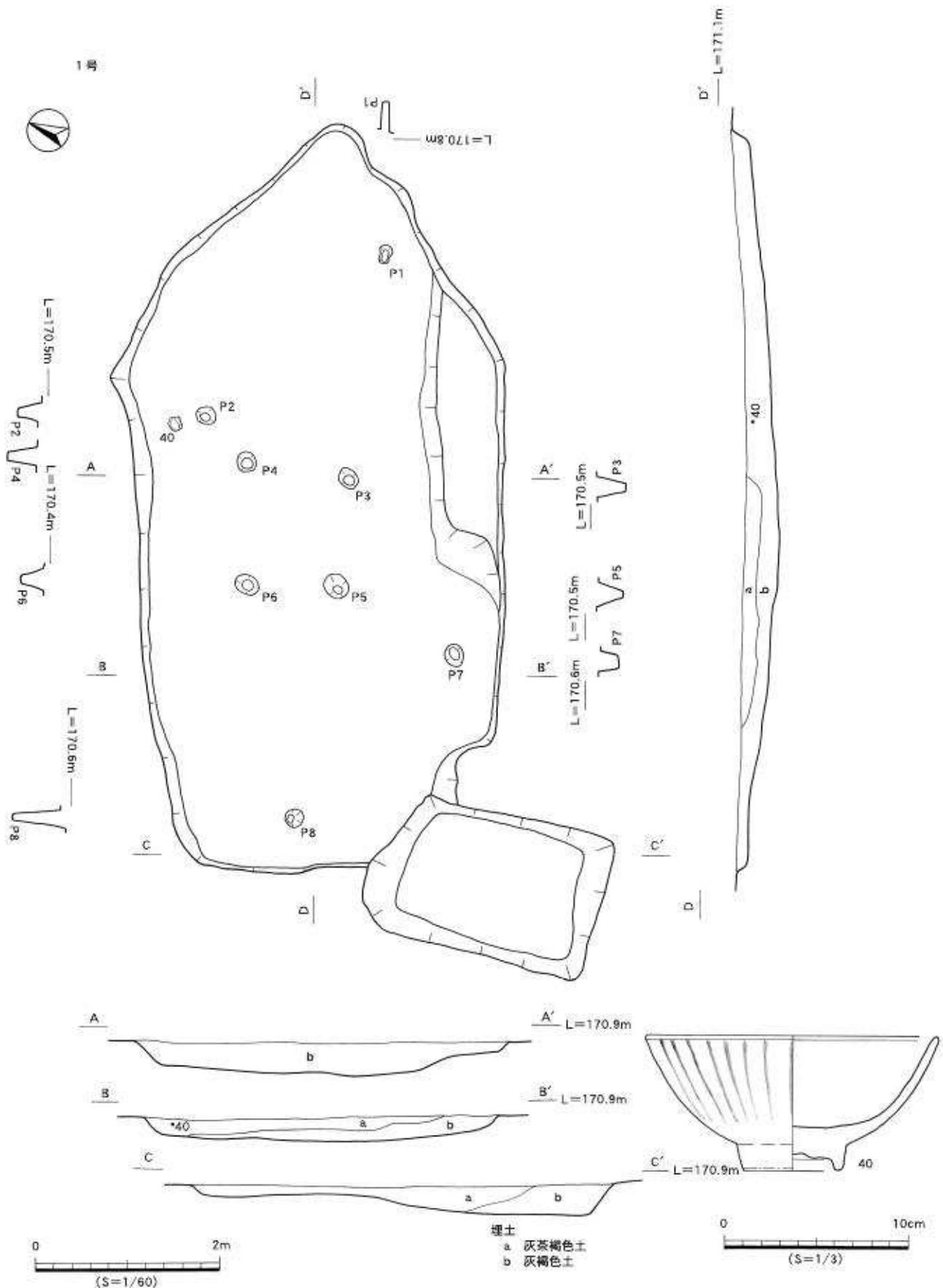
40は龍泉窯系の15世紀後半から16世紀前半の青磁碗である。その他の遺物は、古墳時代のものと思われるものが多かった。

建物状遺構2号（第430図）

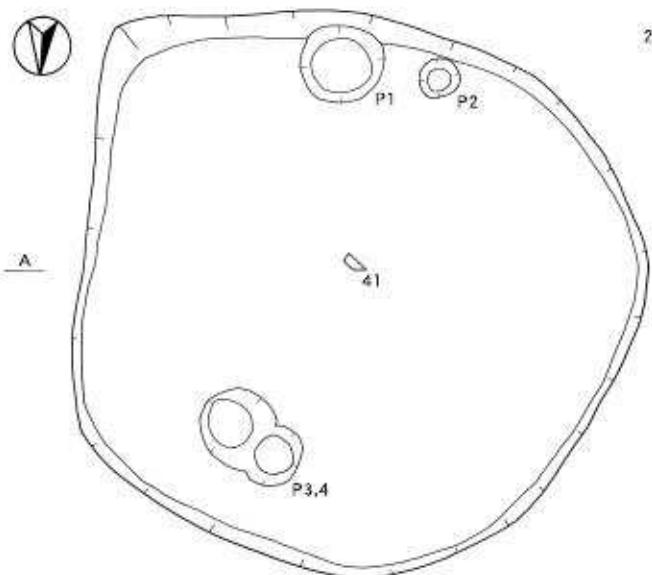
G-H-37・38区で検出された、3.3m×3.0mの円形である。検出面からの深さは約20cmである。直径約15~30cm、深さが約50cmの柱穴と思われるビットが4基検出された。

遺構内遺物

41は薩摩産の龍門司系山元窯から出土した、銅緑釉掛け碗の1点のみである。



第429図 建物状遺構 1号 出土遺物



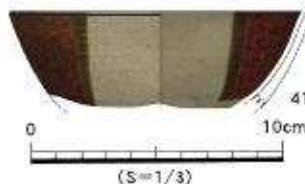
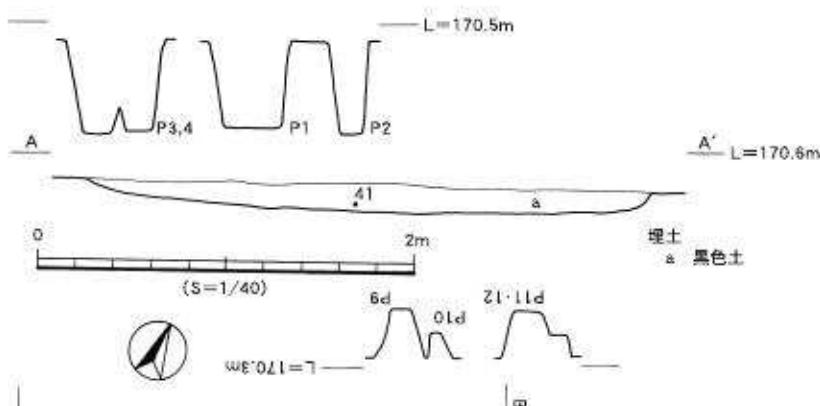
2号

建物状遺構 3号（第430図）

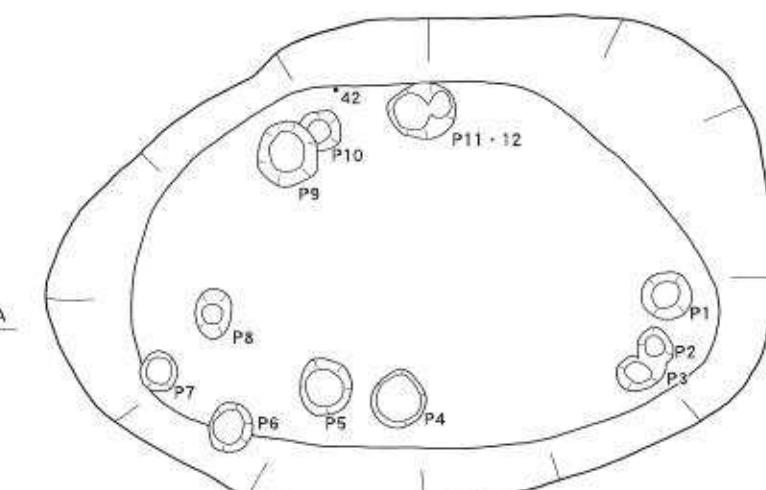
建物状遺構 2号に隣接する、G-37・38区で検出された。5.8m×3.9mの円形である。遺構内からは古墳時代の遺物が多量に出土したもののは硬面は検出されなかった。埋土の土色及び堆積状況や周辺の遺構検出状況、また、床面近くで出土した鉄滓等から、中・近世の建物跡と判断した。検出面からの深さは約20cmである。直径が約20~40cm、深さが約20~60cm柱穴と思われるピットが12基検出された。

遺構内遺物

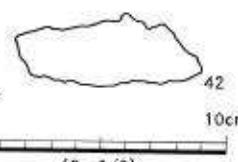
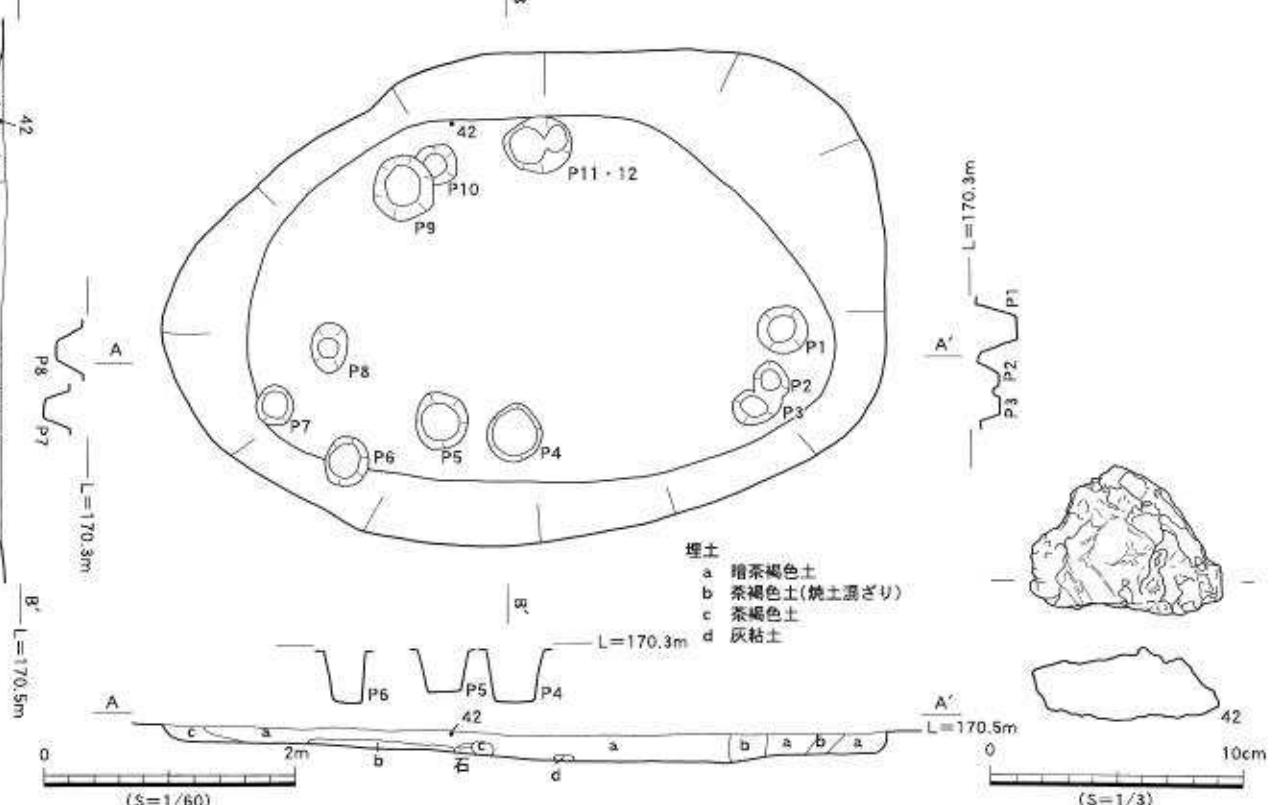
42は、鉄滓である。大きさは7.6cm×5.5cmで重さは149.6gである。



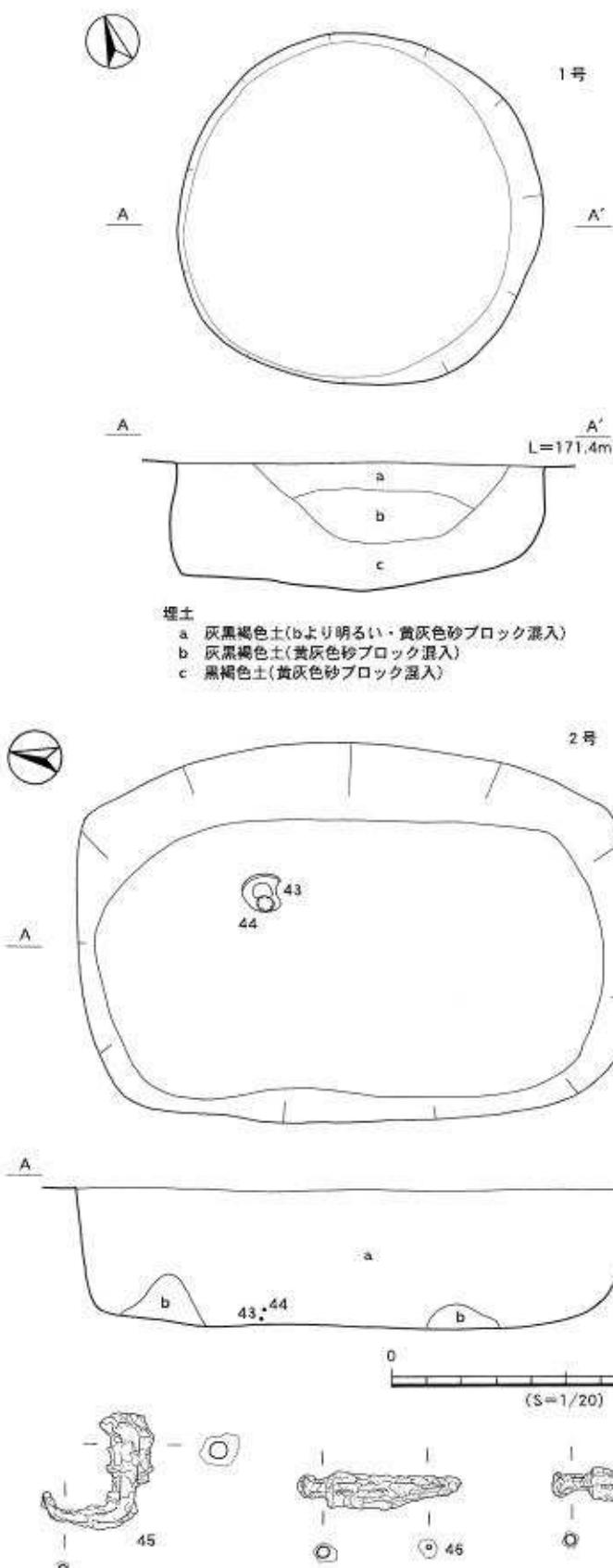
3号



埋土
a 増茶褐色土
b 茶褐色土(燒土混ざり)
c 茶褐色土
d 灰粘土



第430図 積穴建物跡 2号 出土遺物・3号 出土遺物



第431図 土坑1号・2号 出土遺物

④ 土坑（第431図～第438図）

中世・近世の時代と思われる土坑をまとめて掲載する。L-11区からD-42区までの広範囲で出土した。K-23区～M-23区と、L-27区～L-29区にまとまりが見られる。埋土の状況や出土遺物から多くは墓と思われる。また、H-34区やI-35区で、桶状の遺物が埋設された土坑も検出された。

土坑1号（第431図）

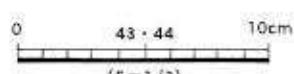
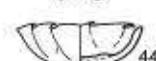
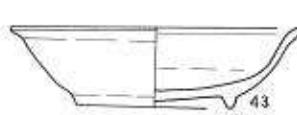
L-11区で検出された。大きさは1.1m×1.0mの円形である。検出面からの深さは35cmであった。周囲に、中世・近世の遺構や遺物は検出されていないが、埋土の土色及び堆積状況から中・近世の土坑と判断した。

土坑2号（第431図）

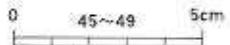
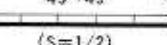
F-15・16区で検出された。大きさは1.7m×1.1mの隅丸長方形である。検出面から深さ40cmで白磁の皿と花弁状の口縁を持つ肥前系と思われる小形の皿が入れ子の状態で出土した。また、釘が35本出土した。釘と副葬品と考えられる遺物から、中世末の土坑墓と思われる。

遺構内遺物

43は景德鎮窯系の白磁の皿である。44は肥前産と思われる。口唇が花弁状である。長石に溶かした釉薬が小皿の内側底部に白く付着している。45～49は釘である。釘には、打ち込んだと思われる木片が一部付着している。その他、図化していないが釘が30本出土している。



(S=1/3)



(S=1/2)

土坑 3号（第432図）

K-23区で検出された。大きさ $0.8m \times 0.8m$ の円形である。検出面からの深さは、約5cmである。遺物は出土していない。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑 4号（第432図）

K-23区で検出された。大きさ $0.9m \times 0.9m$ の円形である。検出面からの深さは約15cmである。遺物は古墳時代の土器が出土していたが、形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑 5号（第432図）

K-23区で検出された。大きさ $0.8m \times 0.7m$ の円形である。検出面からの深さは約20cmである。古墳時代の土器が出土したが、形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑 6号（第432図）

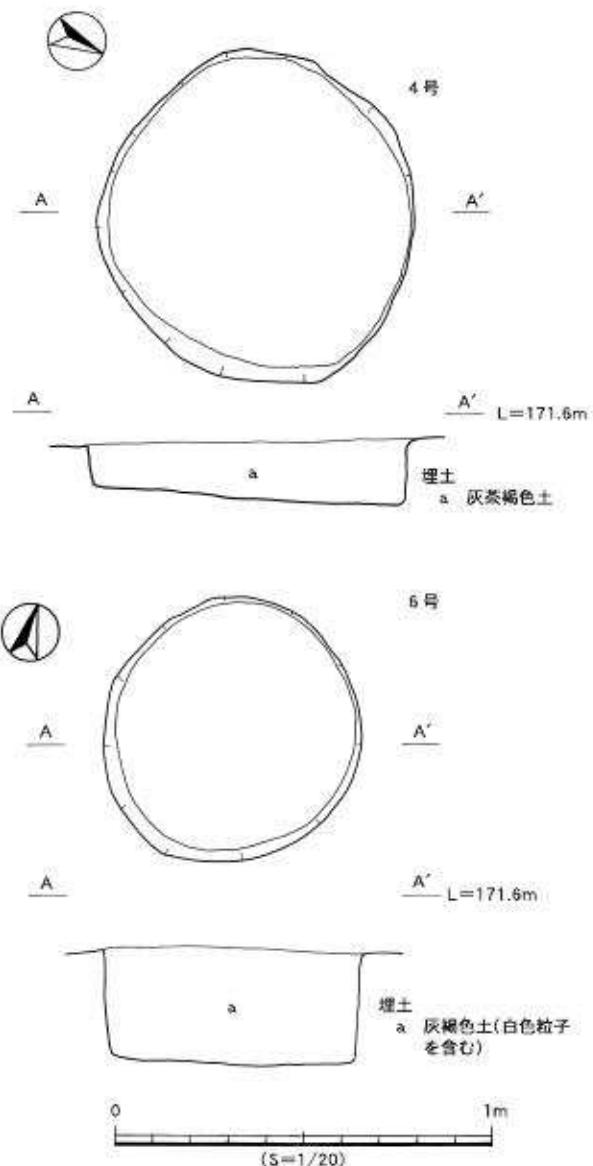
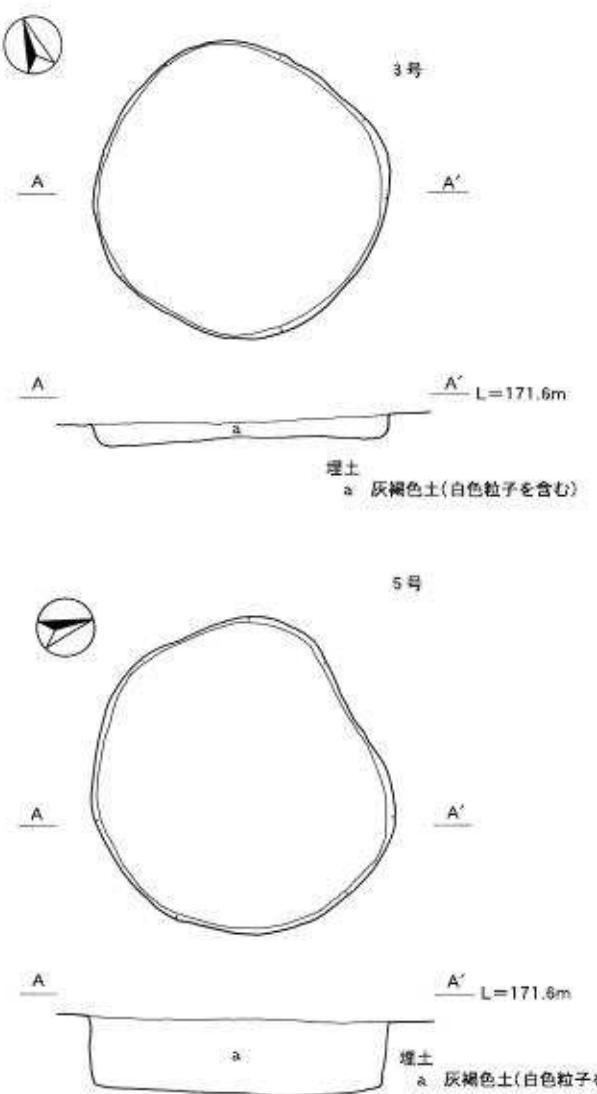
K-24区で検出された。大きさ $0.7m \times 0.7m$ の円形である。検出面からの深さは約30cmである。遺物は古墳時代の土器と薩摩焼の擂鉢の底部が出土したが、形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑 7号（第433図）

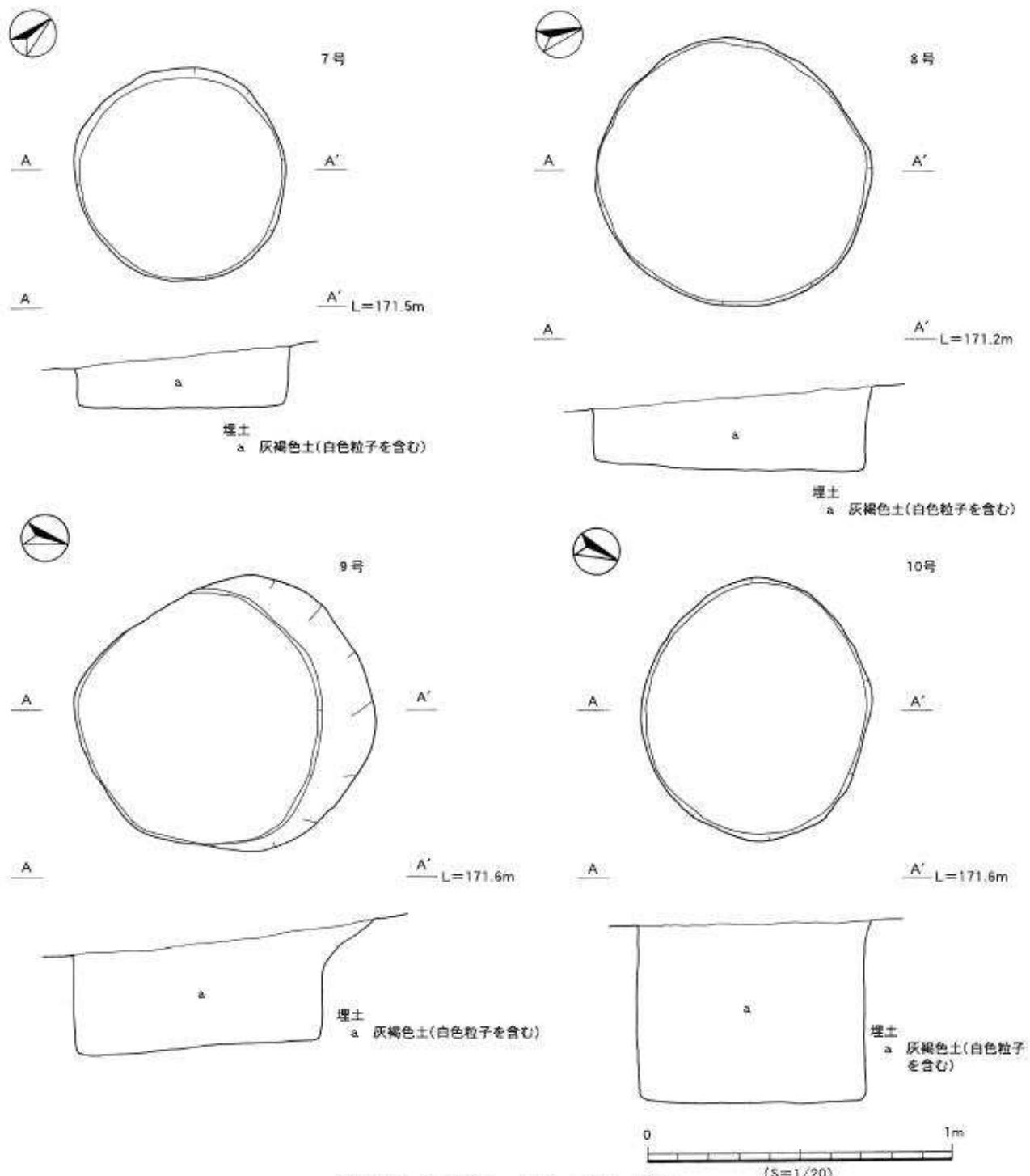
L-23区で検出された。大きさ $0.7m \times 0.7m$ の円形である。検出面からの深さは約15cmである。遺物は出土していないが、形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑 8号（第433図）

L-23区で検出された。大きさ $0.9m \times 0.9m$ の円形である。検出面からの深さは約25cmである。遺物は釘が1点出土している。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。



第432図 土坑 3号・4号・5号・6号



第433図 土坑7号・8号・9号・10号

土坑9号（第433図）

L・M-23区で検出された。大きさ $1.0\text{m} \times 0.9\text{m}$ の円形である。検出面からの深さは約35cmである。遺物は出土していないが、形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑10号（第433図）

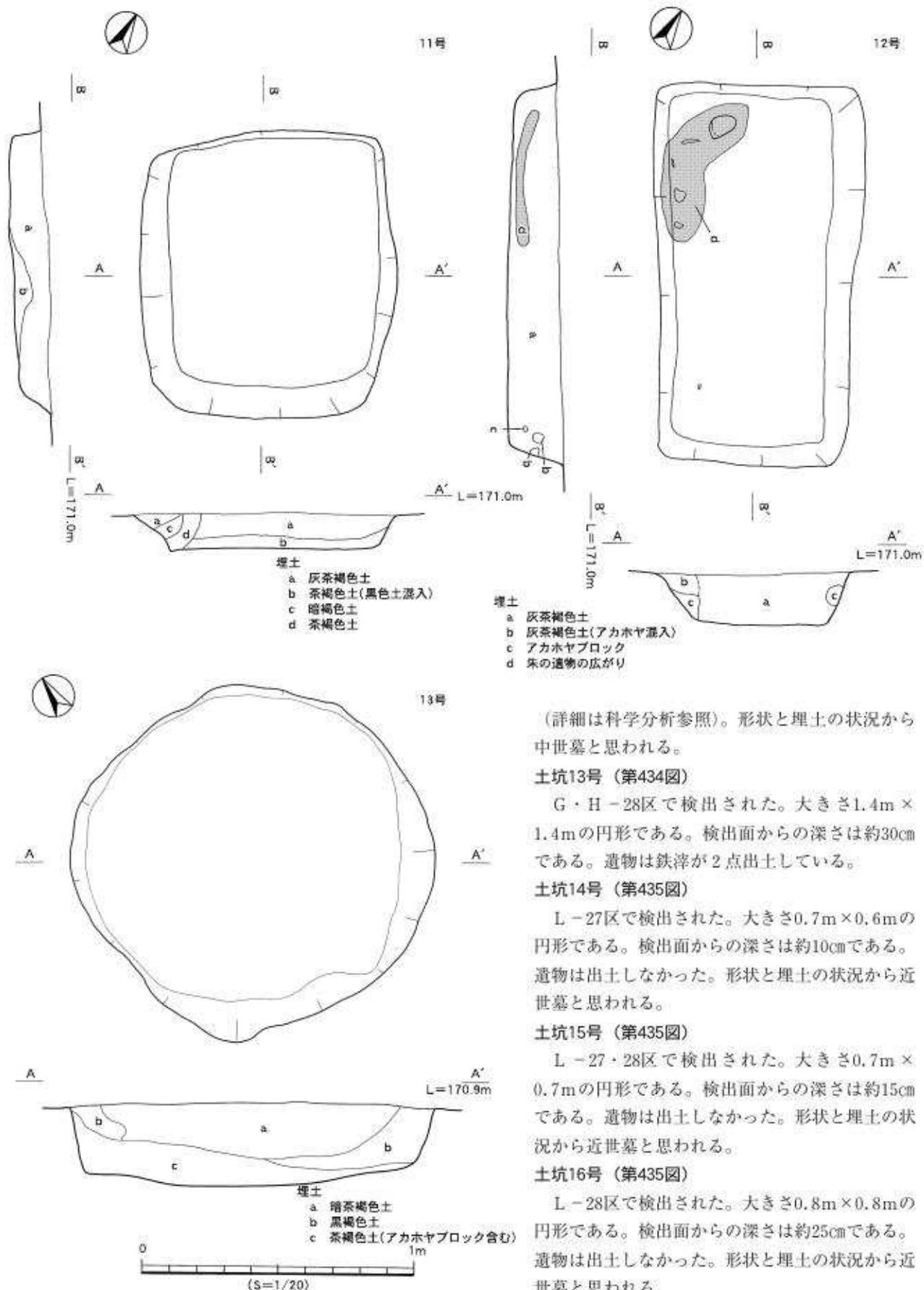
M-23区で検出された。大きさ $0.9\text{m} \times 0.8\text{m}$ の円形である。検出面からの深さは約55cmである。遺物は出土していないが、形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑11号（第434図）

F-24区で検出された。大きさ $1.1\text{m} \times 1.0\text{m}$ の隅丸方形である。検出面からの深さは約15cmである。遺物は出土していないが、土坑12号に隣接することや、形状と埋土の状況から中世墓と思われる。

土坑12号（第434図）

F-24区で検出された。大きさ $1.4\text{m} \times 0.7\text{m}$ の隅丸方形である。検出面からの深さは約18cmである。遺物は朱色の広がりが見られる土壤と薄型の木片が出土している



第434図 土坑11号・12号・13号

(詳細は科学分析参照)。形状と埋土の状況から中世墓と思われる。

土坑13号(第434図)

G・H-28区で検出された。大きさ1.4m×1.4mの円形である。検出面からの深さは約30cmである。遺物は鉄滓が2点出土している。

土坑14号(第435図)

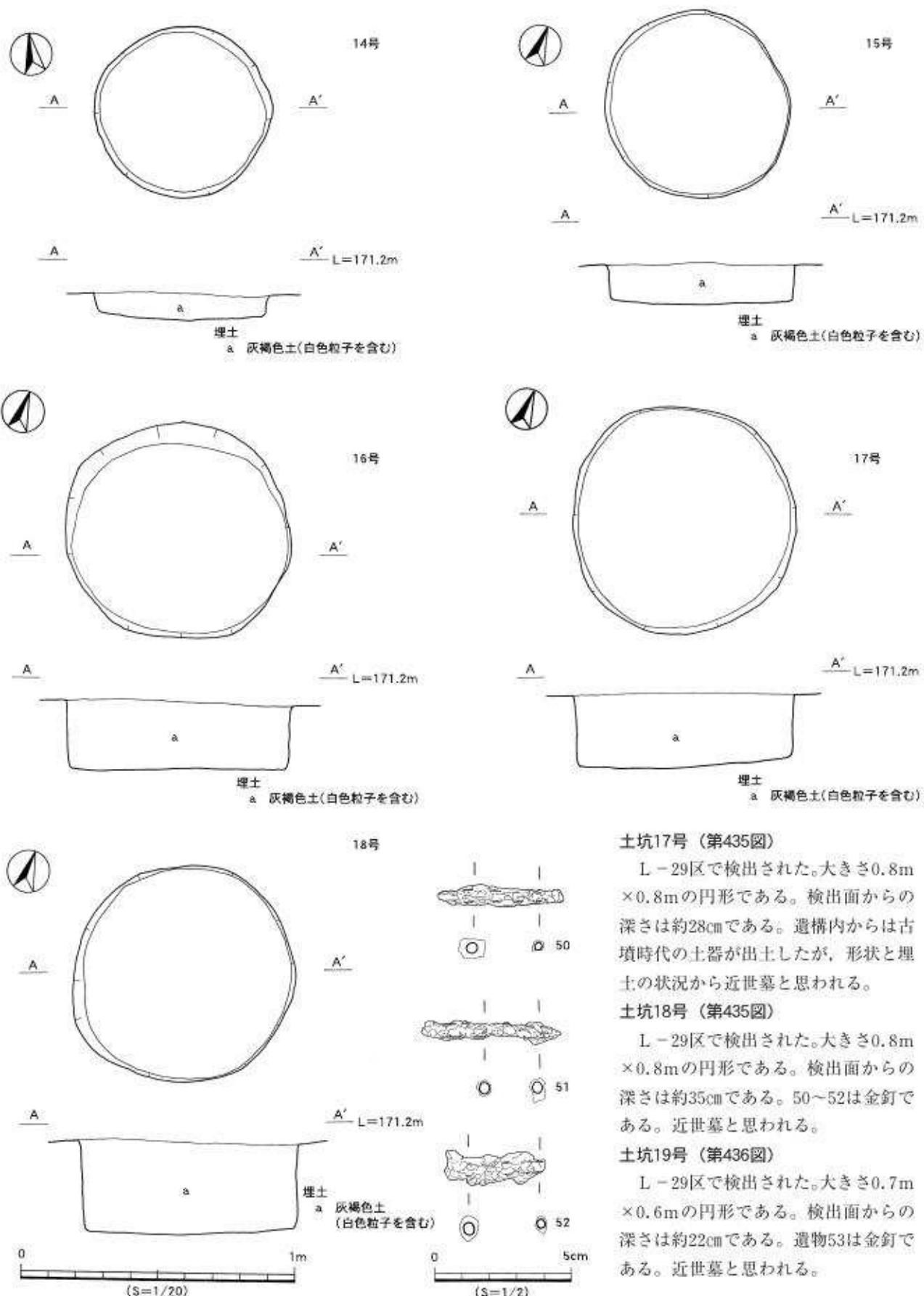
L-27区で検出された。大きさ0.7m×0.6mの円形である。検出面からの深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑15号(第435図)

L-27・28区で検出された。大きさ0.7m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約15cmである。遺物は出土しなかった。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑16号(第435図)

L-28区で検出された。大きさ0.8m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約25cmである。遺物は出土しなかった。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。



第435図 土坑14号・15号・16号・17号・18号 出土遺物

土坑17号（第435図）

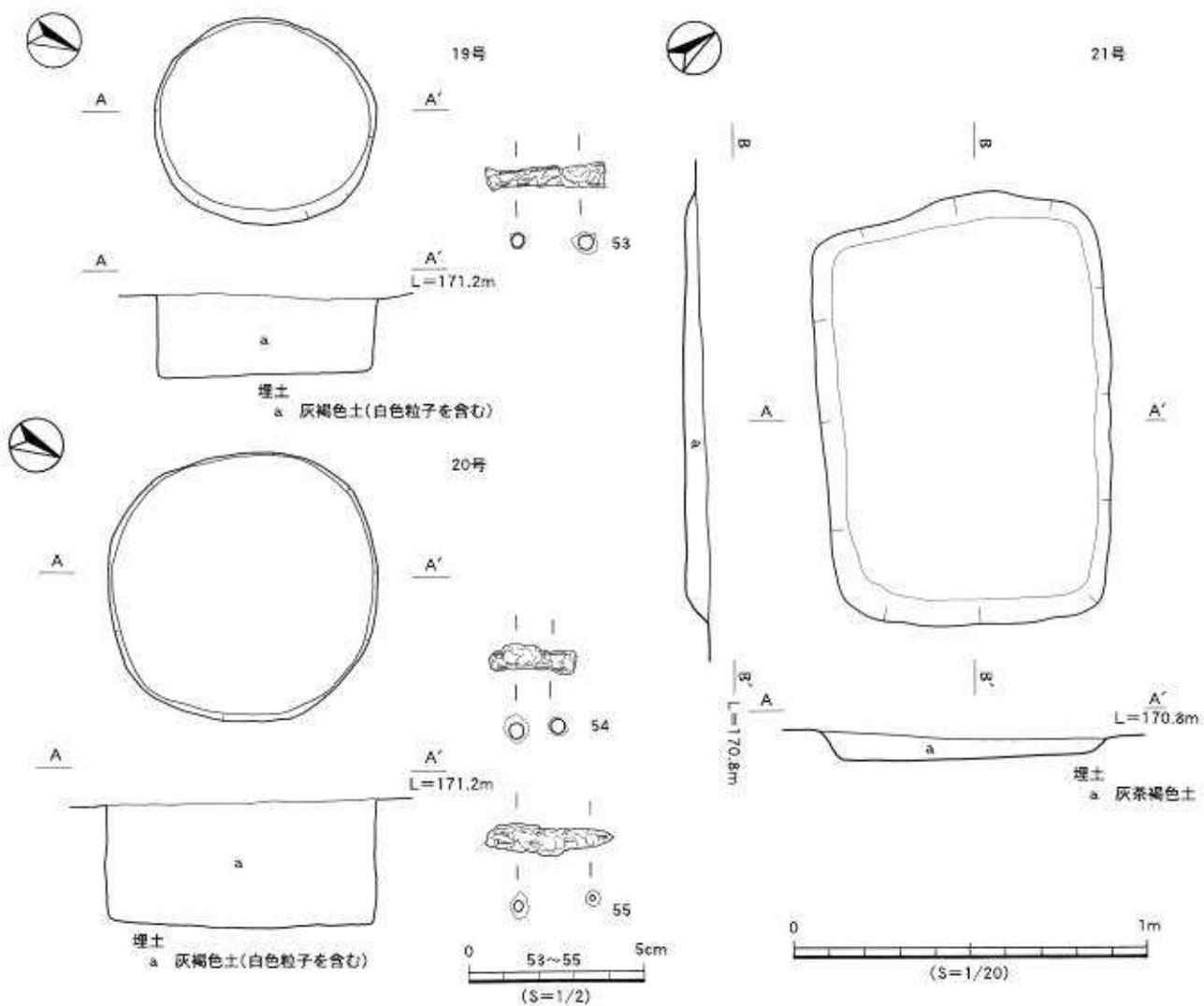
L-29区で検出された。大きさ0.8m × 0.8mの円形である。検出面からの深さは約28cmである。遺構内からは古墳時代の土器が出土したが、形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑18号（第435図）

L-29区で検出された。大きさ0.8m × 0.8mの円形である。検出面からの深さは約35cmである。50~52は金釘である。近世墓と思われる。

土坑19号（第436図）

L-29区で検出された。大きさ0.7m × 0.6mの円形である。検出面からの深さは約22cmである。遺物53は金釘である。近世墓と思われる。



第436図 土坑19号 出土遺物・20号 出土遺物・21号

土坑20号（第436図）

L-29区で検出された。大きさ0.8m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約34cmである。遺物は54・55の金釘が出土した。近世墓と思われる。

土坑21号（第436図）

G-30区で検出された。大きさ1.3m×0.8mの方形である。検出面からの深さは約10cmである。遺物は出土しなかった。

土坑22号（第437図）

H-30区で検出された。大きさ1.8m×1.6mの円形である。検出面からの深さは約17cmである。遺物は出土しなかった。

土坑23号（第437図）

H-32区で検出された。大きさ1.5m×0.9mの円形である。検出面からの深さは約13cmである。近世の掘立柱建物跡の柱穴に切られている。遺物は高台付きの土師器が出土しているので古代の可能性もある。

土坑24号（第438図）

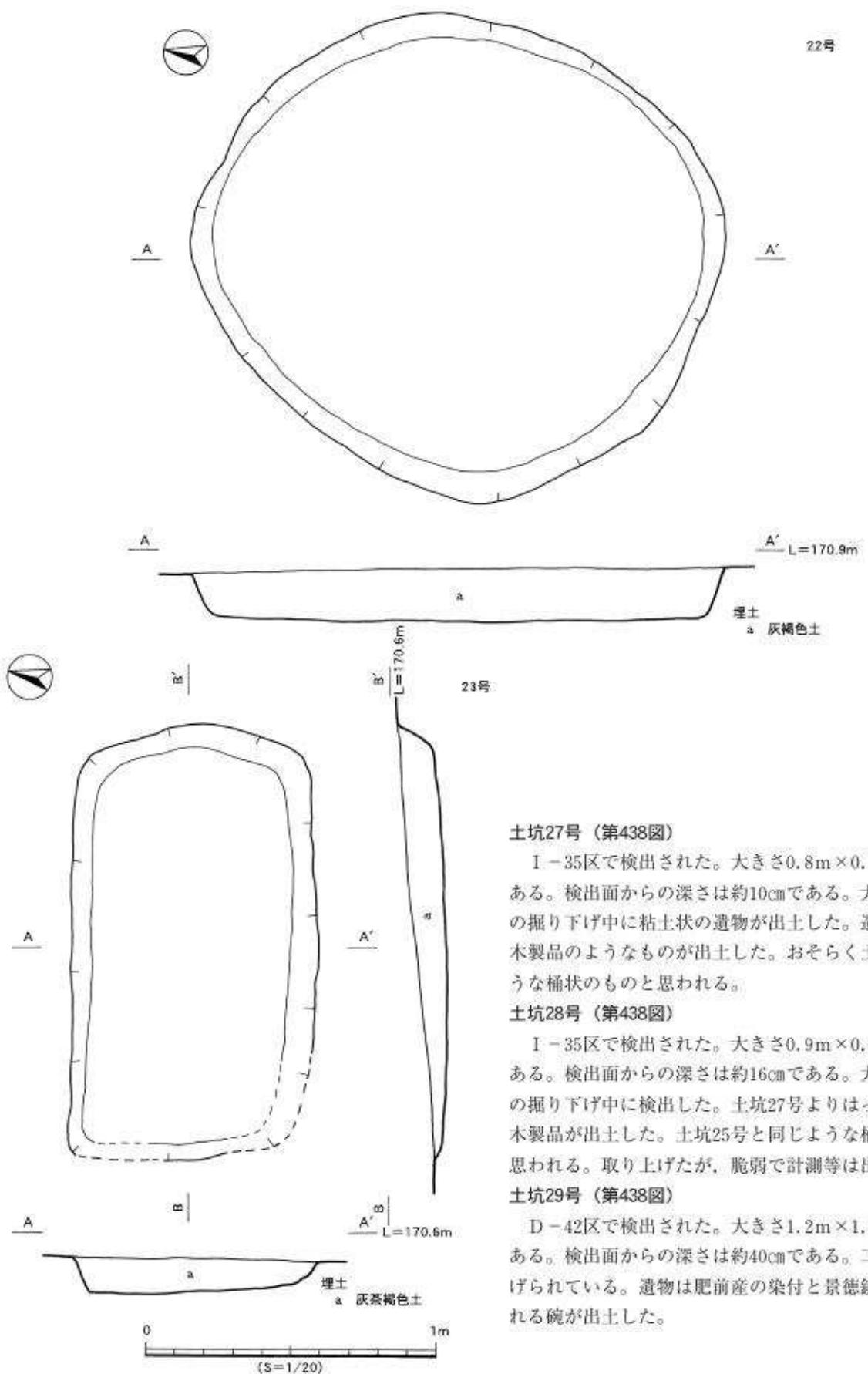
H-34区で検出された。大きさ1.2m×1.1mの円形である。検出面からの深さは約20cmである。砂質状の埋土中に土器片が出土した。

土坑25号（第438図）

H-34区で検出された。大きさ0.8m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約20cmである。木製品が出土したもの、脆弱で取り上げはできなかった。板状の遺物の上にも板があり、間に石や陶器片が挟まっていた。おそらく桶が埋設されたと思われる。大型土坑2号に隣接し、また、土坑24号・26号に挟まれていることから関係性があるものと思われる。

土坑26号（第438図）

H-34・35区で検出された。大きさ1.0m×0.9mの円形である。検出面からの深さは約13cmである。焼土や灰白色の粘土状のものが検出されたので炉状遺構の性格が強いが、土坑24号・25号と隣接して検出したので関係性から土坑と判断した。



土坑27号（第438図）

I - 35区で検出された。大きさ $0.8m \times 0.7m$ の円形である。検出面からの深さは約10cmである。大型土坑4号の掘り下げ中に粘土状の遺物が出土した。遺構内からは、木製品のようなものが出土した。おそらく土坑25号のような桶状のものと思われる。

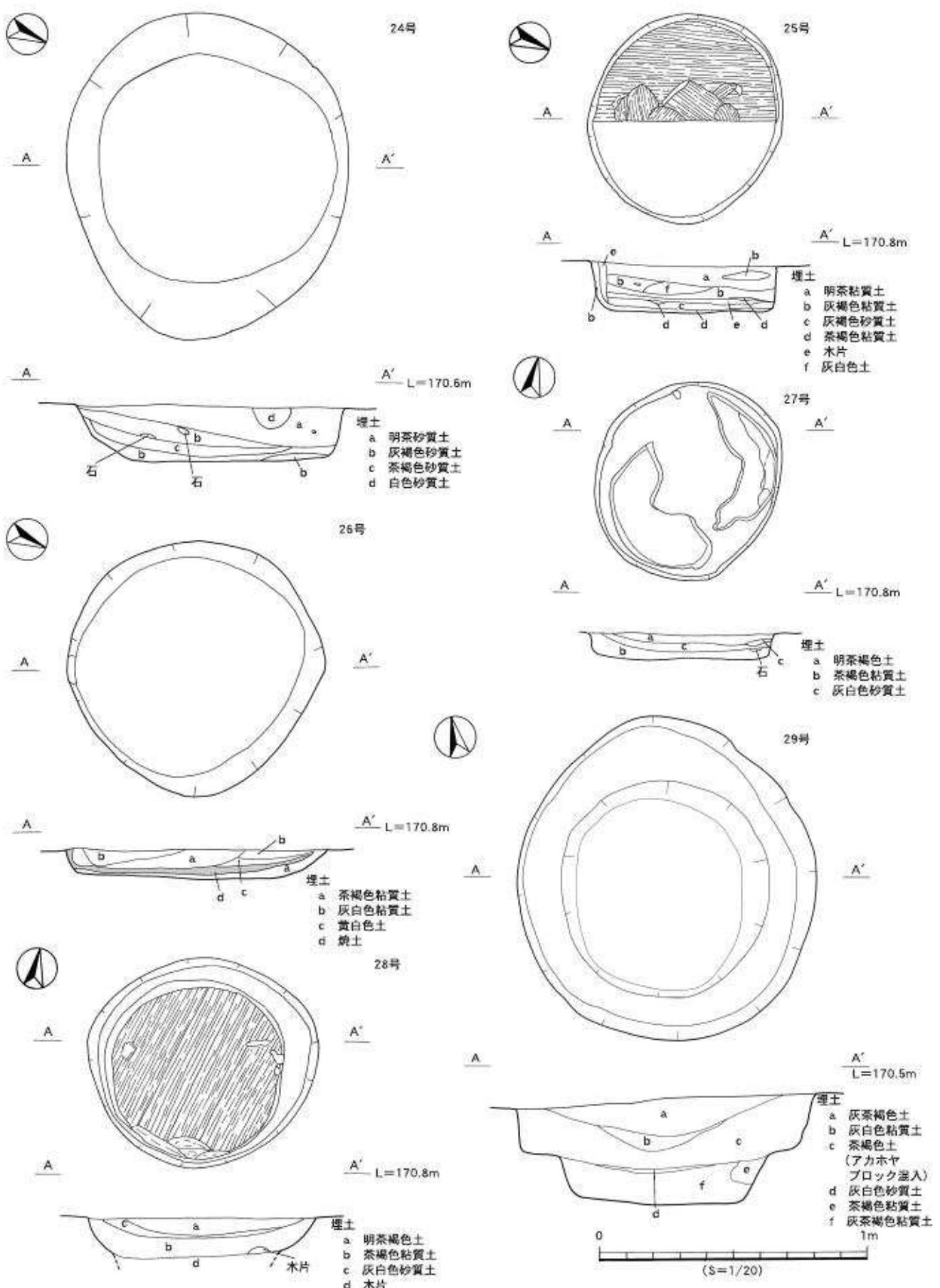
土坑28号（第438図）

I - 35区で検出された。大きさ $0.9m \times 0.8m$ の円形である。検出面からの深さは約16cmである。大型土坑4号の掘り下げ中に検出した。土坑27号よりはっきりとした木製品が出土した。土坑25号と同じような桶状のものと思われる。取り上げたが、脆弱で計測等は出来なかった。

土坑29号（第438図）

D - 42区で検出された。大きさ $1.2m \times 1.1m$ の円形である。検出面からの深さは約40cmである。二段に掘り下げられている。遺物は肥前産の染付と景德鎮窯系と思われる碗が出土した。

第437図 土坑22号・23号



第438図 土坑24号・25号・26号・27号・28号・29号

⑤ 大型土坑（第439図～第453図）

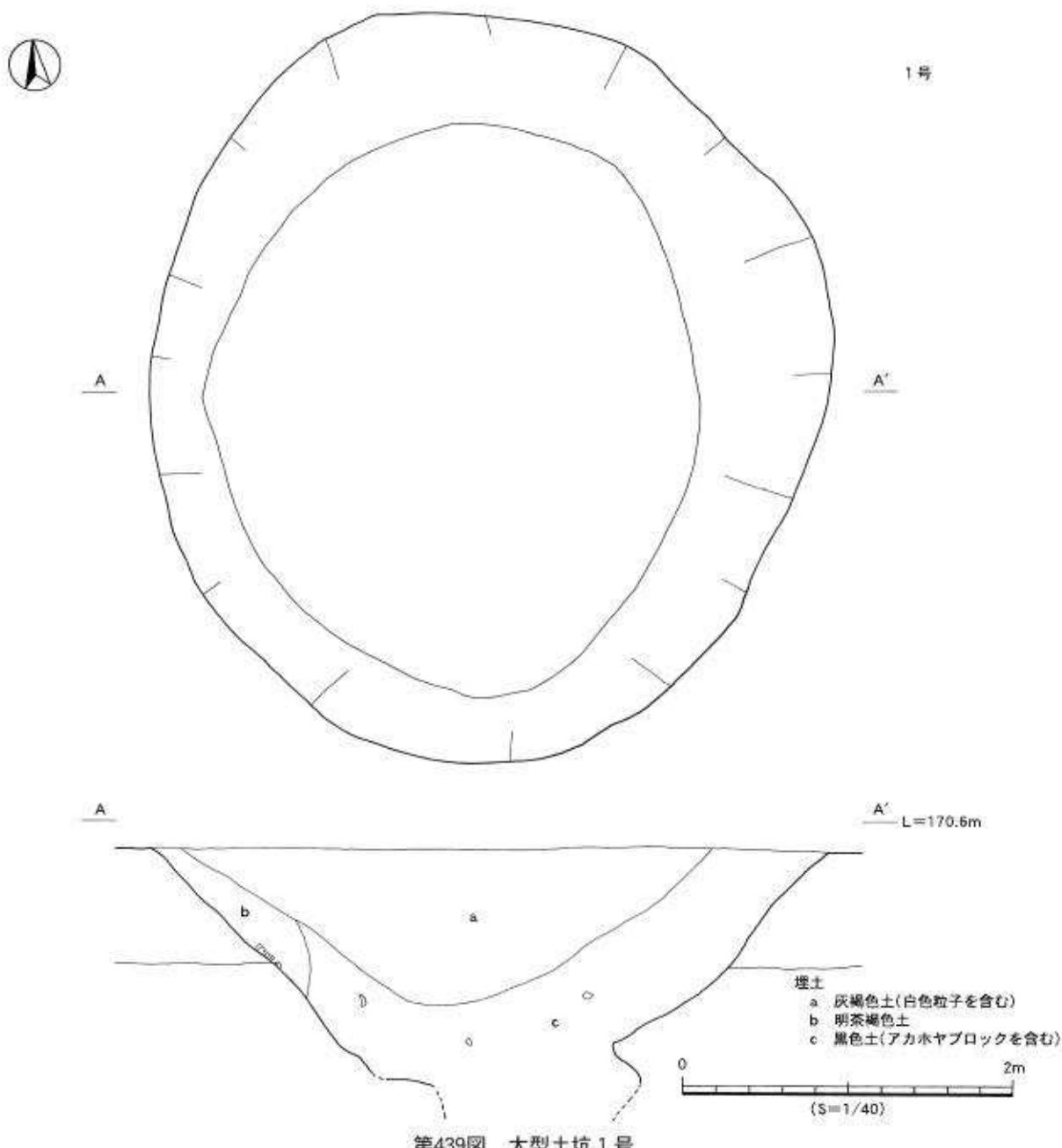
大型土坑は、F～J-33～37区を中心に検出された。掘り下げ時、湧水や崩落により、調査を打ち切った土坑もあった。周辺に溝状遺構や炉状遺構も多いことから鍛冶に関係するものかと思われたが、断定することは出来なかった。遺構内遺物の出土状況から中世末から近世初めの時期と思われるものが多い。

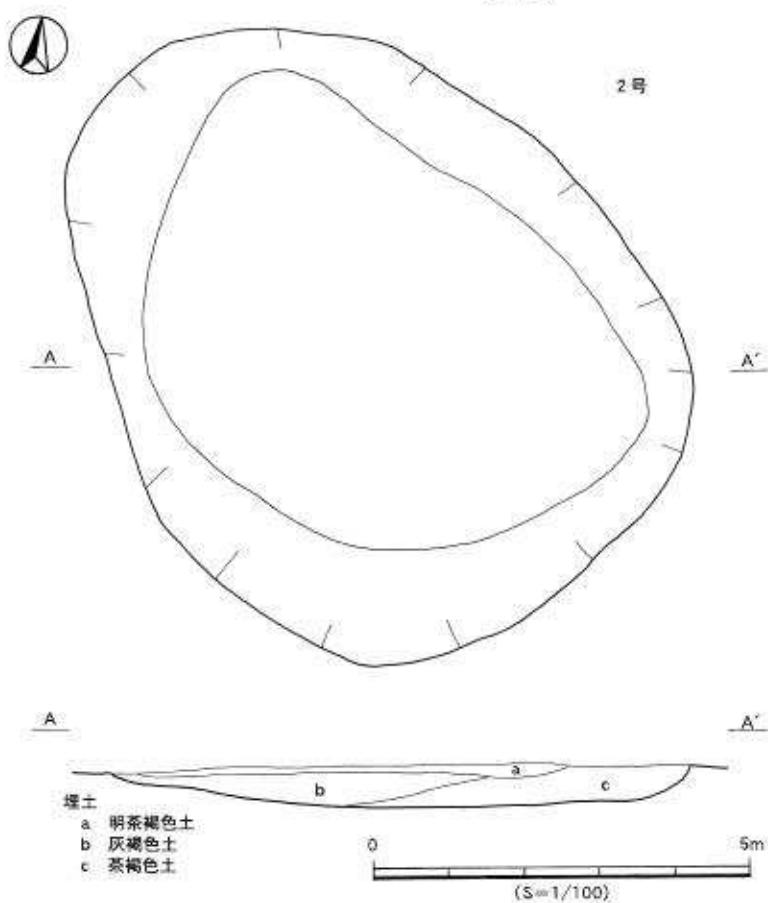
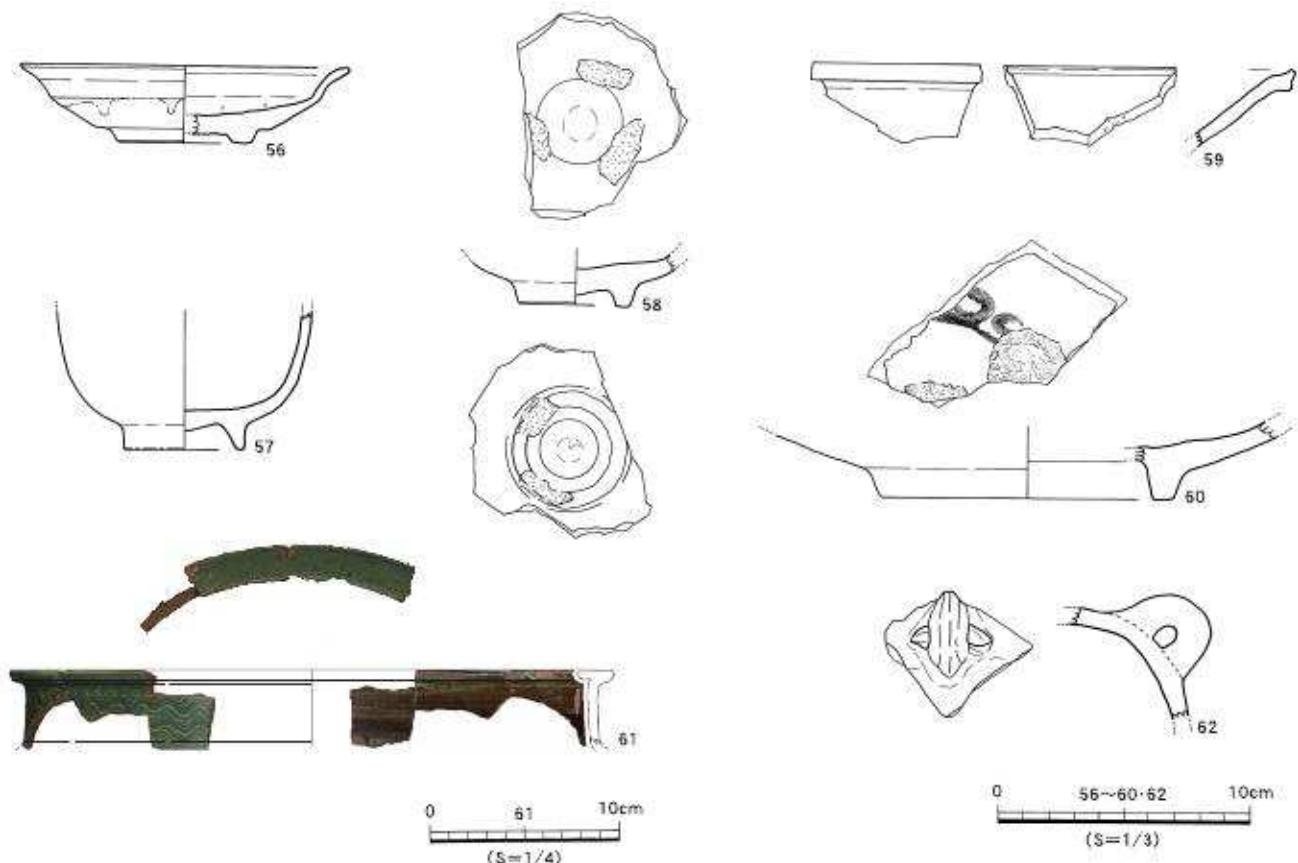
大型土坑 1号（第439図・第440図）

F・G-33・34区で検出された。大きさは4.5m×4.1mで約1m掘り下げたところで、湧水により、完掘は出来なかった。溝状遺構1に隣接する。遺物は17世紀のものが多く、近世の井戸の役割をした遺構と思われる。

遺構内遺物

56は、漳洲窯系の白磁の皿である。輪状の釉剥ぎで高台腰部より露胎である。焼成による赤化が露胎部に見られる。57は、肥前の白磁の碗である。疊付には初穀が付着している。58は肥前の砂目の碗である。砂目痕が見込みと疊付に3か所ずつある。59、60は肥前の陶器の皿である。60は二彩手の砂胎土目である。外面は露胎である。61は肥前の二彩手の甕である。外面は銅緑釉で内面は無釉の掛分けである。62は茶釜の耳の部分である。他の出土遺物は漳洲窯系の青花碗が2点、肥前産の青磁碗が1点、染付の瓶が1点、薩摩産の甕の胴部が2点出土していた。また、鉄滓が3点、輪の羽口が1点出土している。





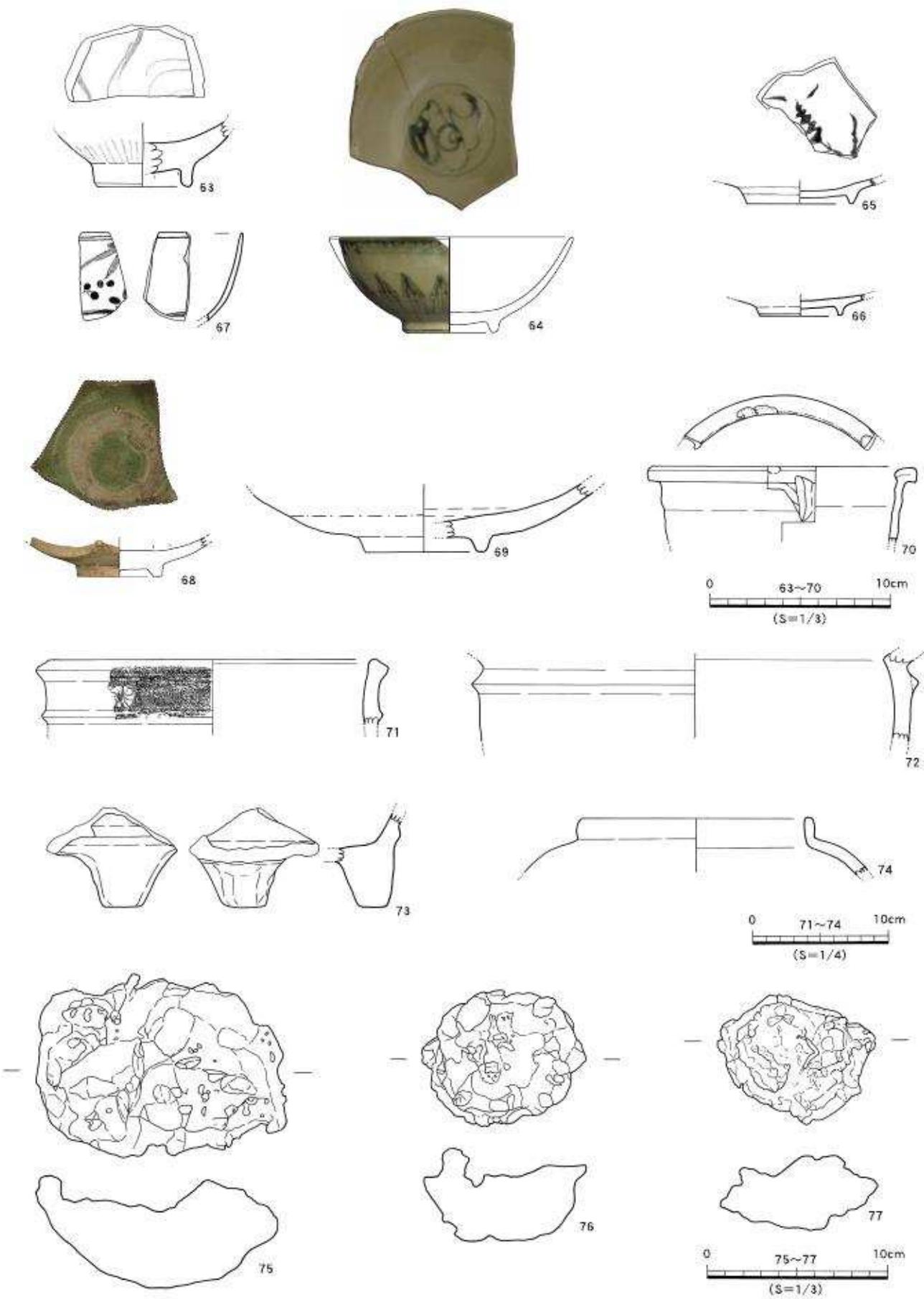
第440図 大型土坑1号出土遺物・2号

大型土坑2号(第440図・第441図)

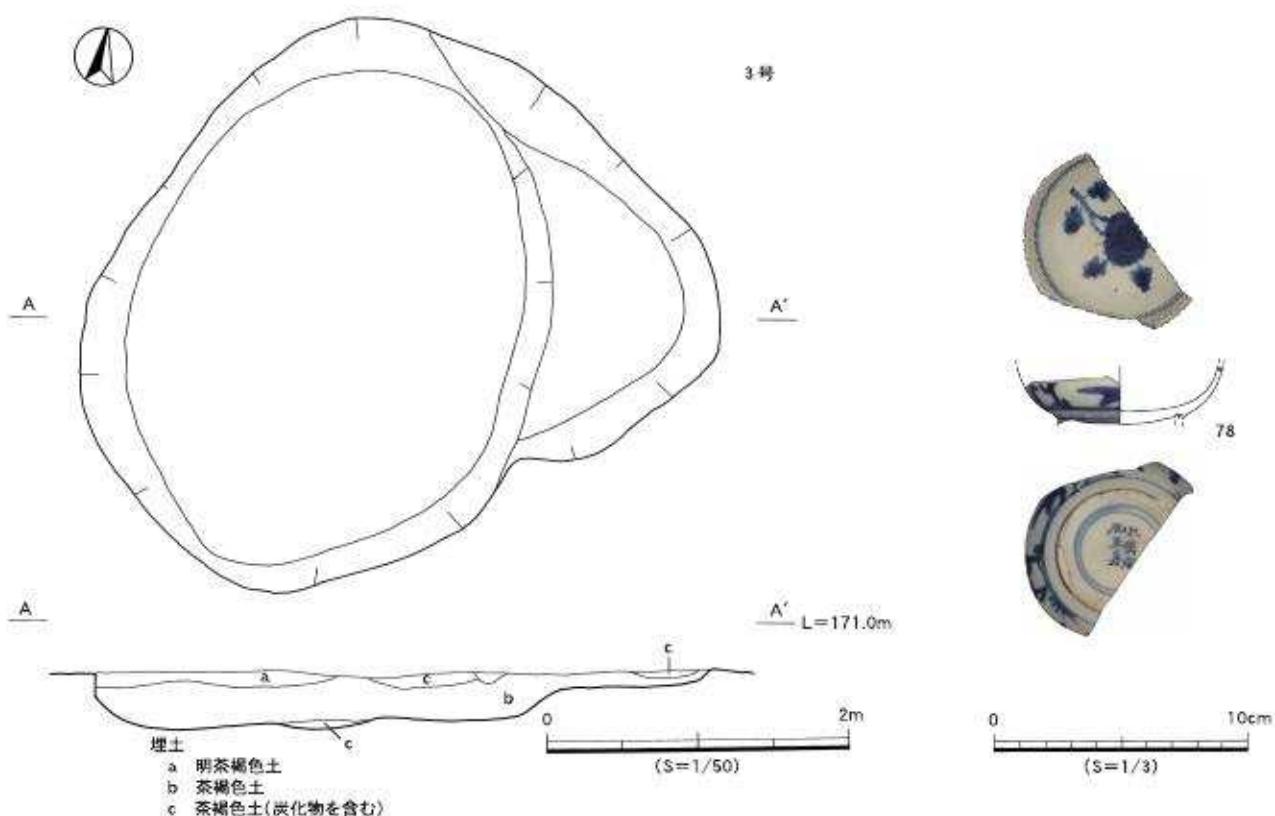
G・H-34・35区で検出された。大きさは9m×7mで、検出面からの深さは、約50cmである。鉄滓が18点と繩の羽口が2点と出土しているので、周囲にある炉状遺構との関連が考えられる。遺物は16世紀から17世紀のものが多い。

遺構内遺物

63は龍泉窯系の連弁が描かれた青磁の椀で高台内面が露胎である。64は漳洲窯系の見込みに巻き貝が描かれた青花の碗である。高台内底は露胎である。65は漳洲窯系の皿である。見込みに砂目がついている。66は肥前産の菊花型型打ちの青磁の皿である。骨付に粉殻が付着している。67は肥前産の染付の碗である。68は銅緑釉を掛けた蛇ノ目釉剥ぎの皿である。69は肥前産の胎土目の大皿である。70は薩摩産の苗代川系の片口である。貝目の痕が見られる。薄型であることから串木野窯の可能性がある。71~73は瓦質の火鉢



第441図 大型土坑2号 出土遺物



第442図 大型土坑3号 出土遺物

である。74は茶窯の口縁部である。75～77は鉄滓である。その他の出土遺物は、青磁碗が4点、皿が1点、景德鎮窯系の青花皿が2点。中国産と思われる陶器の小壺が1点。薩摩産系の陶器の胴部が11点。茶釜が1点、鉄滓が18点(2,328g)出土している。

大型土坑3号(第442図)

I・J-34・35区で検出された。大きさは4.0m×3.6mで、検出面からの深さは約40cmである。断面形状はステップ状になっている。隣接する大型土坑2号及び4号よりも大きさは小さく鉄滓等は出土していない。遺構内から出土した遺物の量が少なく時期判断は難しいが、図化した景德鎮窯の碗やその他の遺物から中世末の土坑であると思われる。

遺構内遺物

78は景德鎮窯産の碗である。疊付内底には「大明成化年製」の文字が見られる。年代は1590～1630年である。その他の出土遺物は、景德鎮窯産の青花碗が1点。漳州

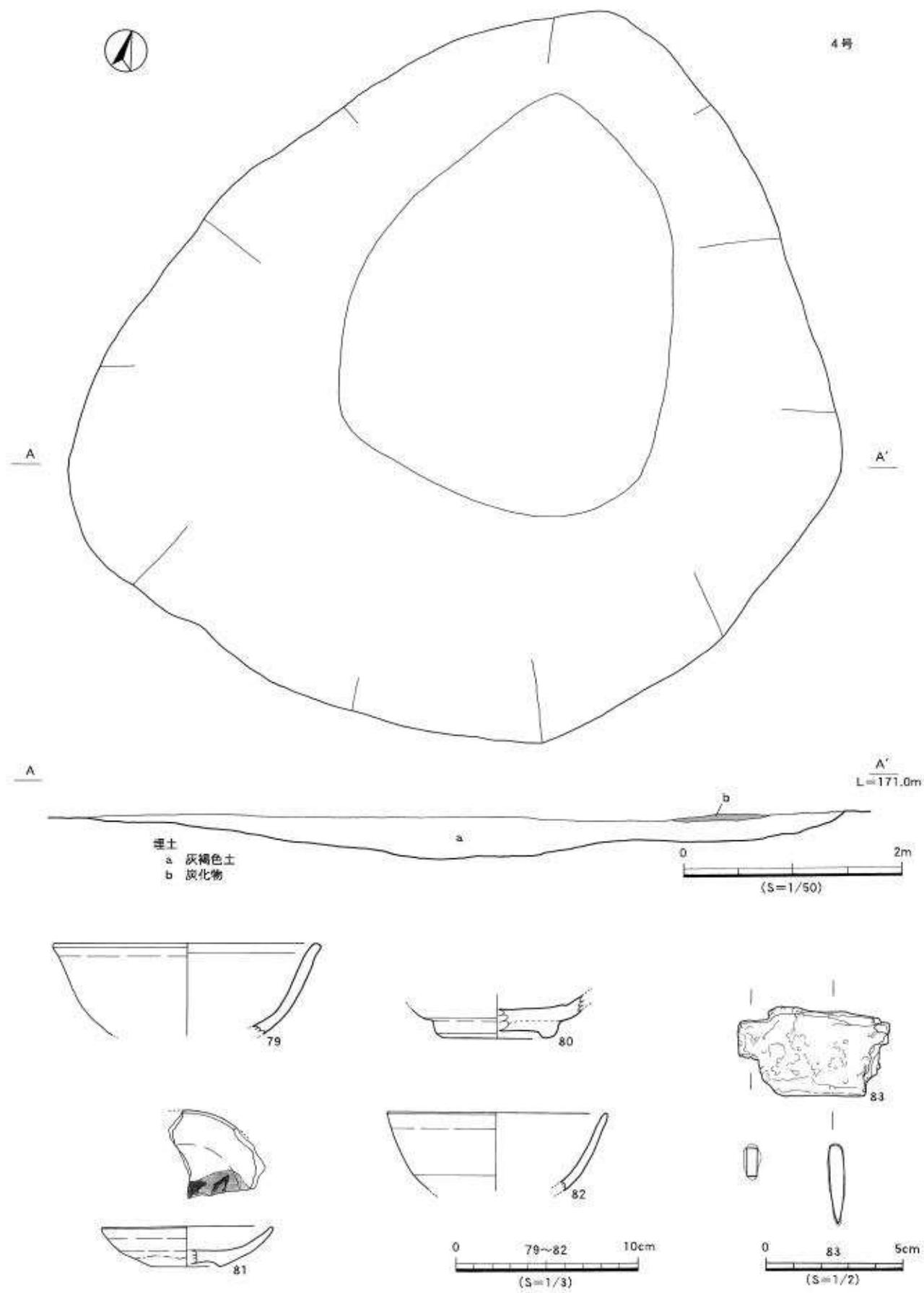
窯系の青花皿が1点。肥前産の染付碗が1点、陶器の皿が1点出土している。

大型土坑4号(第443図)

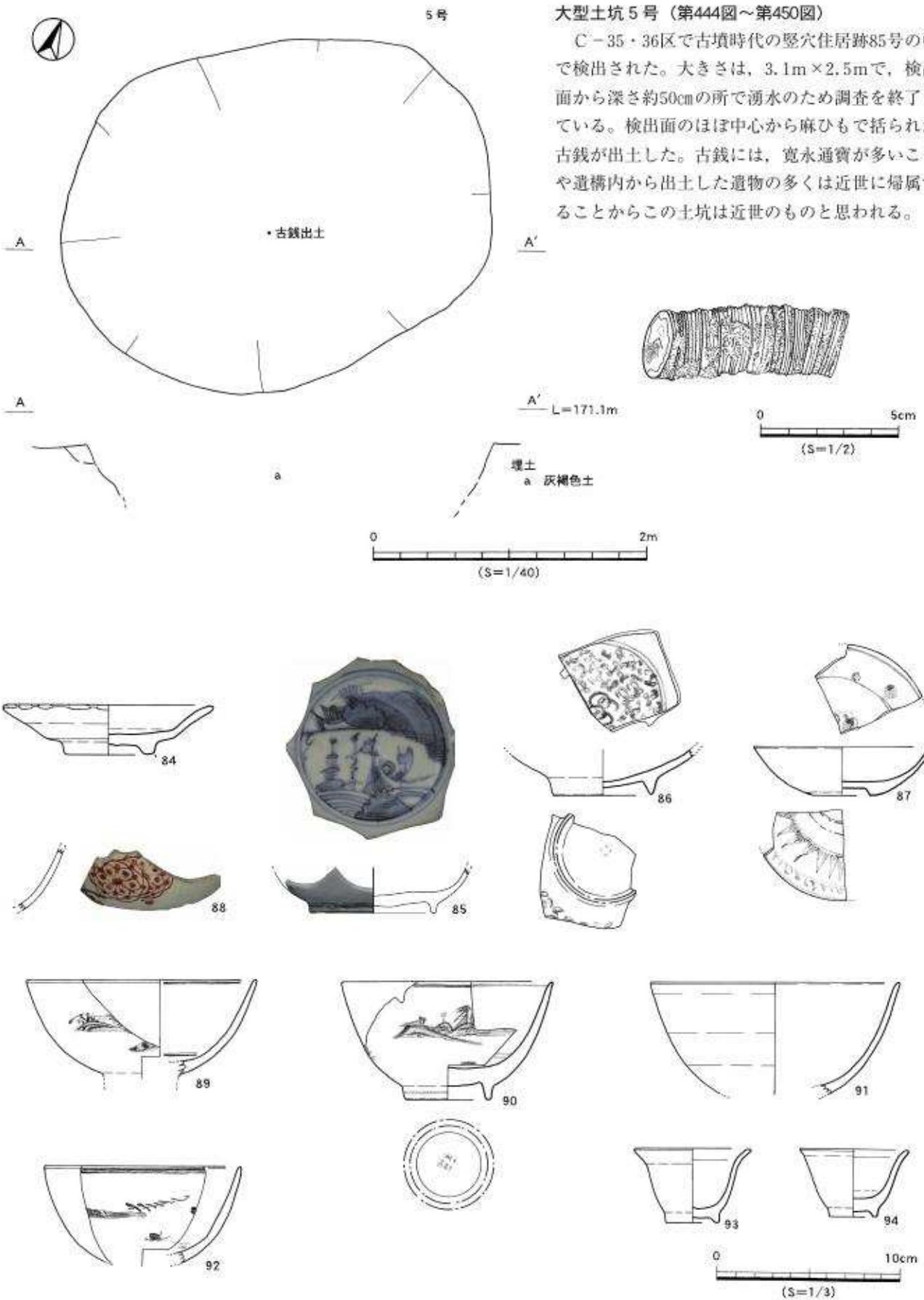
I・J-34・35区で検出された。大きさは6.5m×6.7mで、検出面からの深さは約40cmである。上面には炭化物を含んだ層が見られたが、全体的に灰白色の埋土である。遺構内から出土した遺物から近世の土坑と思われるが遺物の時期差が大きい。土坑27・28号に切られて検出されているので、二つの土坑よりは、古い時期である。

遺構内遺物

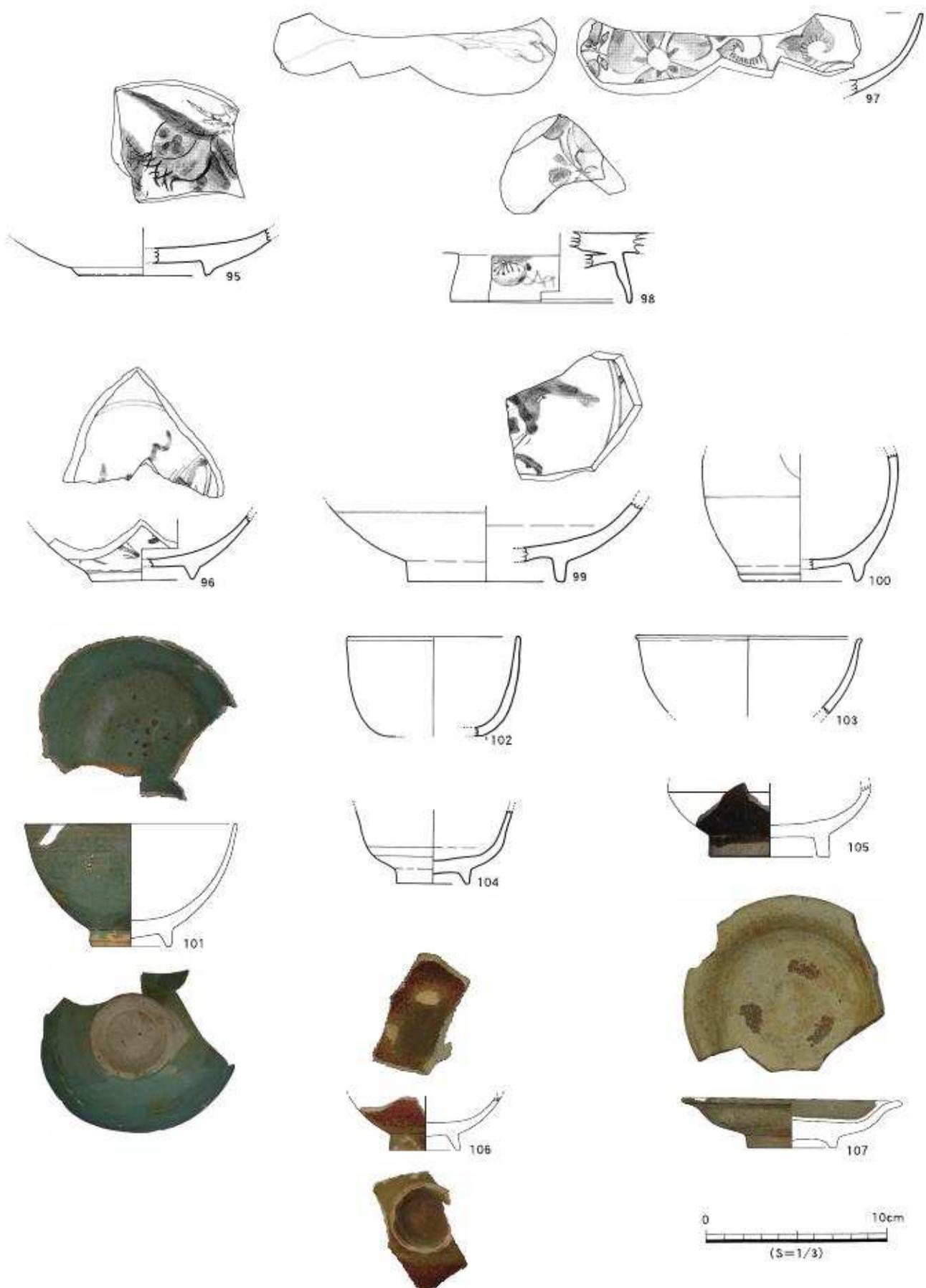
遺物は、全体的に少なかった。79は龍泉窯系の青磁の碗である。80は龍泉窯系の青磁の皿である。疊付につなぎ目が見られる。81は漳洲窯系の16世紀後半の皿である。焼成が不良である。82は九州産と思われる黒釉の碗である。83は鉄製品で刀子と思われる。また、その他の出土遺物は輪の羽口が1点と鉄滓が5点出土している。



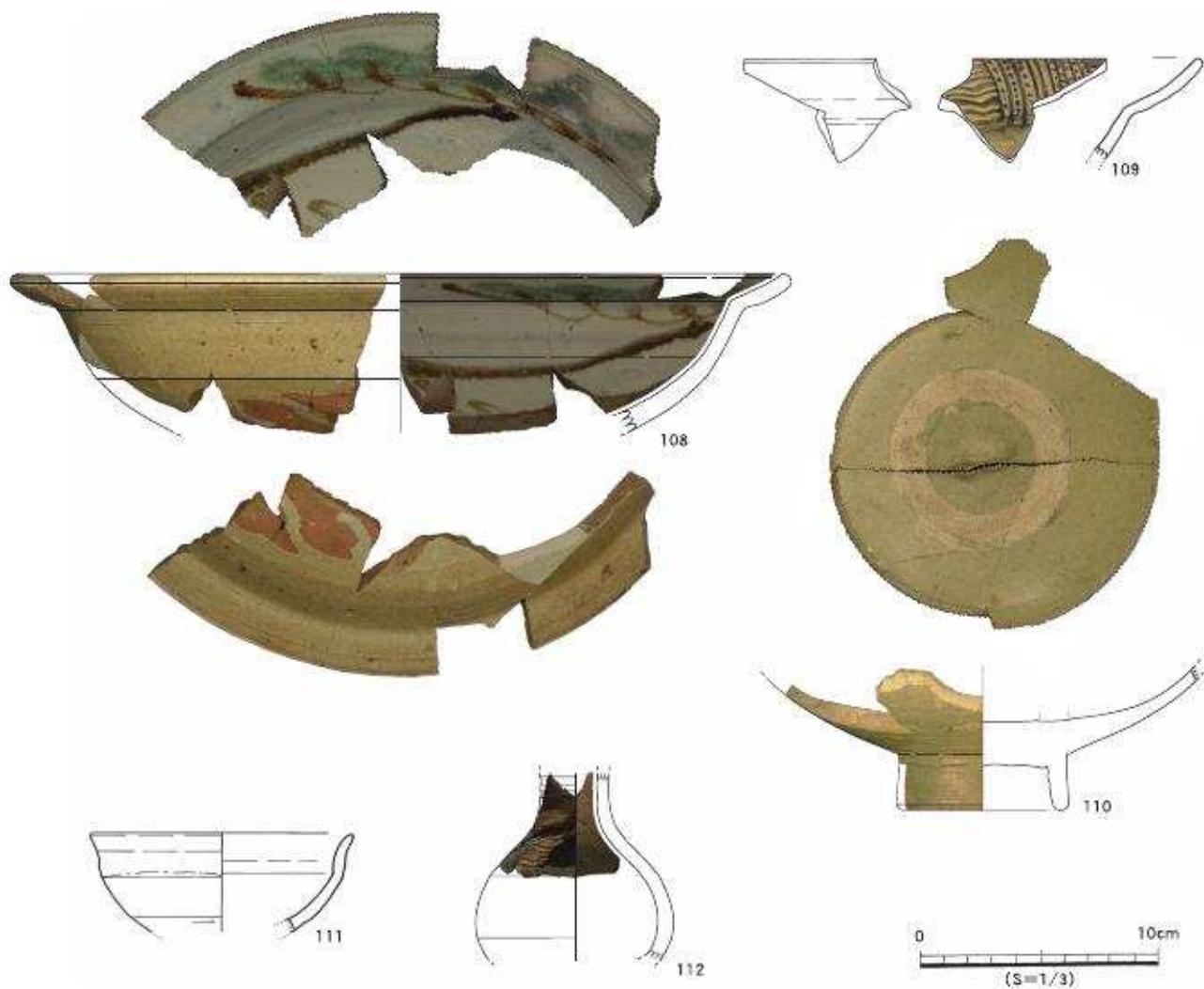
第443図 大型土坑4号 出土遺物



第444図 大型土坑 5号 出土遺物①



第445図 大型土坑5号 出土遺物②

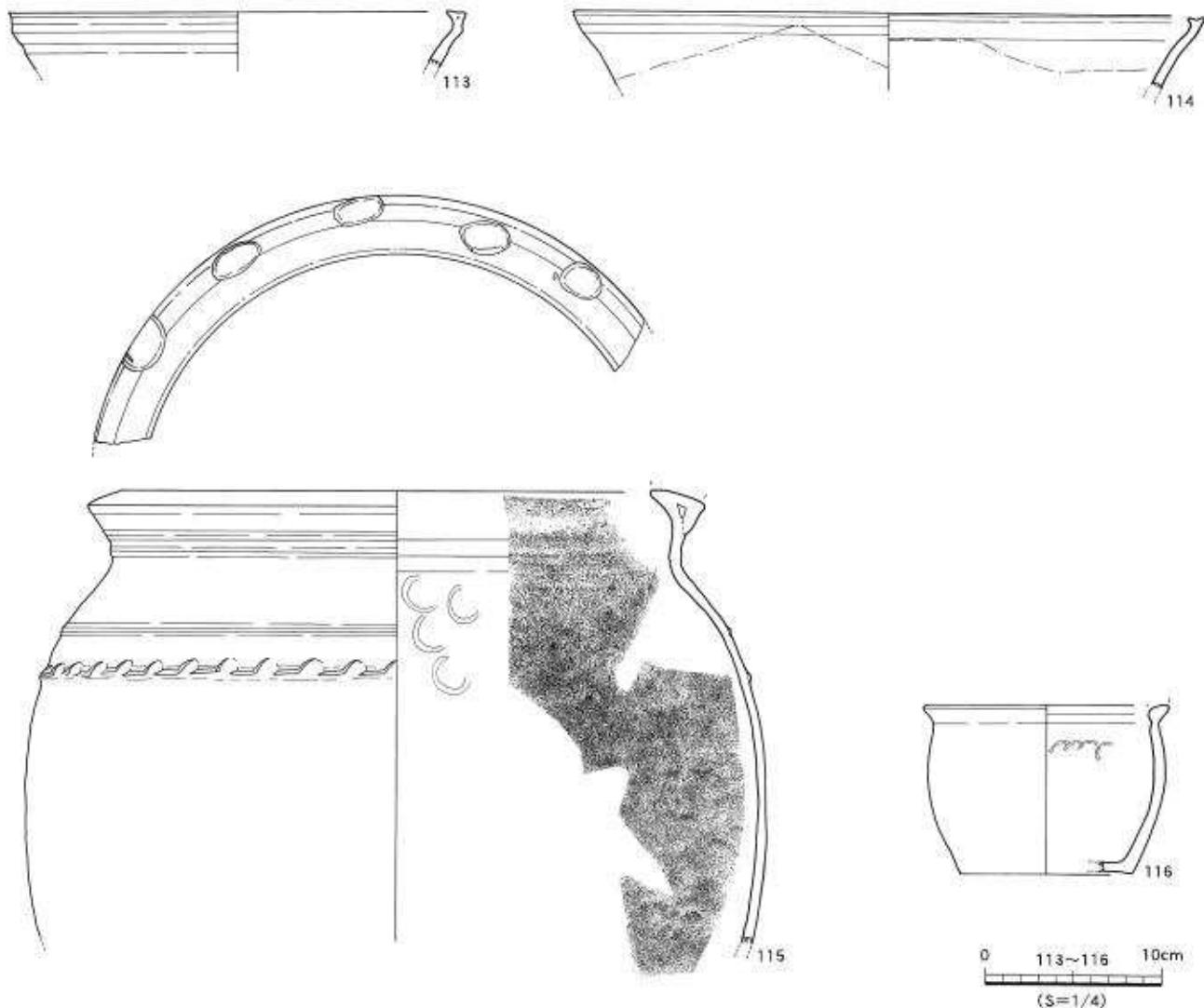


第446図 大型土坑5号 出土遺物③

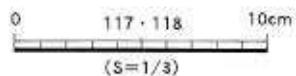
遺構内遺物

84は漳洲窯系の青磁の稜花皿である。見込みと高台内底は露胎である。85は漳洲窯系の青花皿である。疊付には羽模が付着している。86は景德鎮窯系の連子皿である。87は葵口底の皿である。88は肥前産の赤絵碗である。梅文が描かれ、線は黒、紫を使用し、黄色も見られる。89～92は肥前産の碗である。90は高台内底に「福」の字が見られる。焼成不良である。91は肥前白磁の高麗茶碗である。93・94は肥前産の白磁の小杯である。95～98は肥前産の染付である。95はザクロが描かれている。96は龍が描かれた荒磁文の碗、又は鉢である。97は肥前産の染付で台付皿の皿部である。98は台の部分が2段に分かれている。また台部は、ブドウ状の蔓草が描かれている。97と98は同一個体である。99は肥前の鉢で高台内底が露胎である。100は肥前産徳利の底部である。底部には砂粒が付着し、被熱のため赤化している。101～104は肥前陶器の碗である。103は口唇部が外反する、銅緑釉の碗

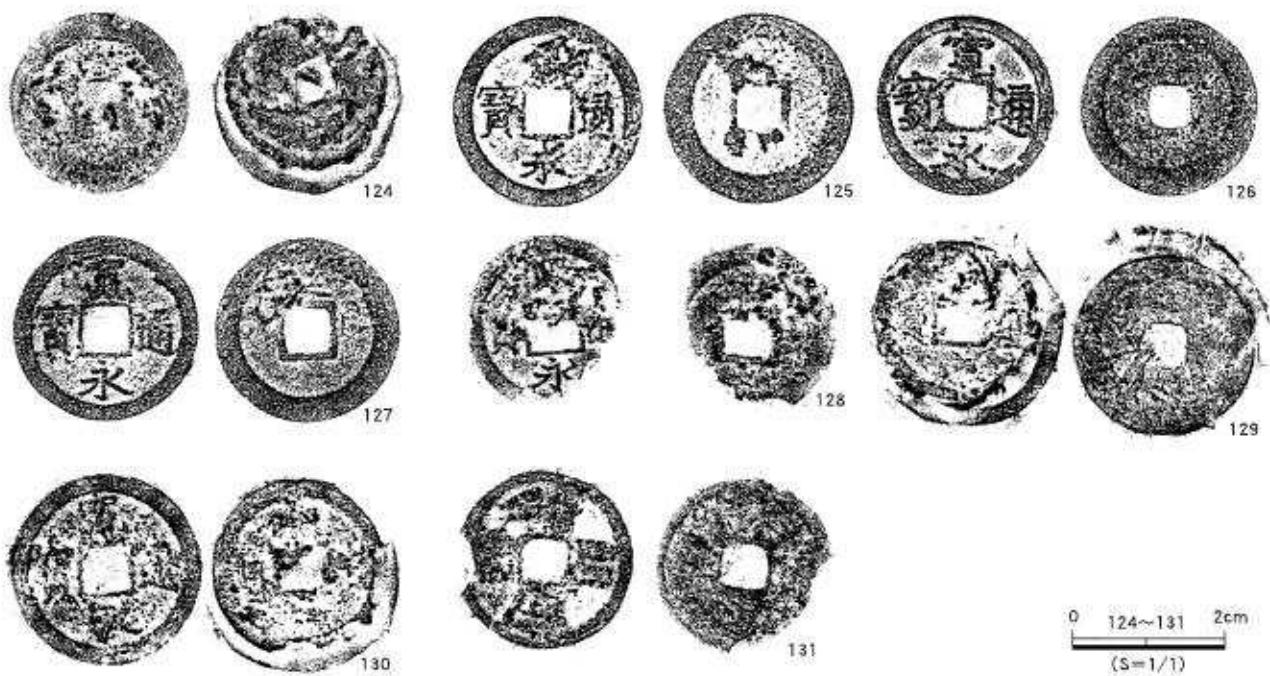
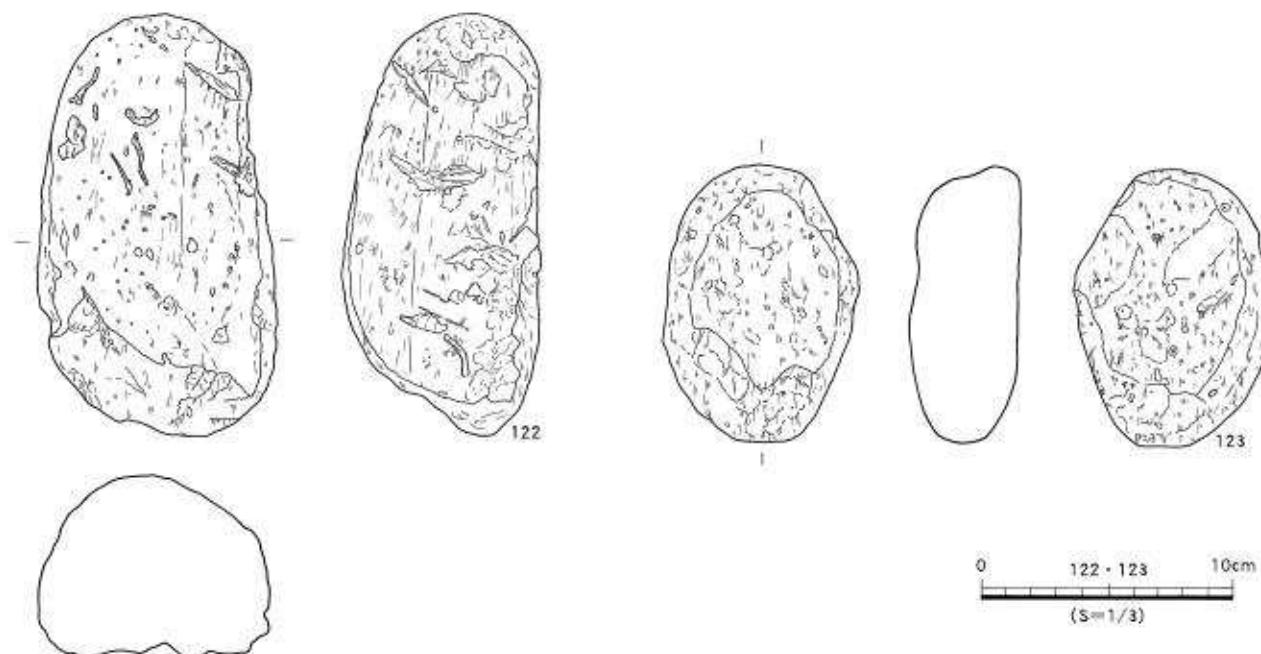
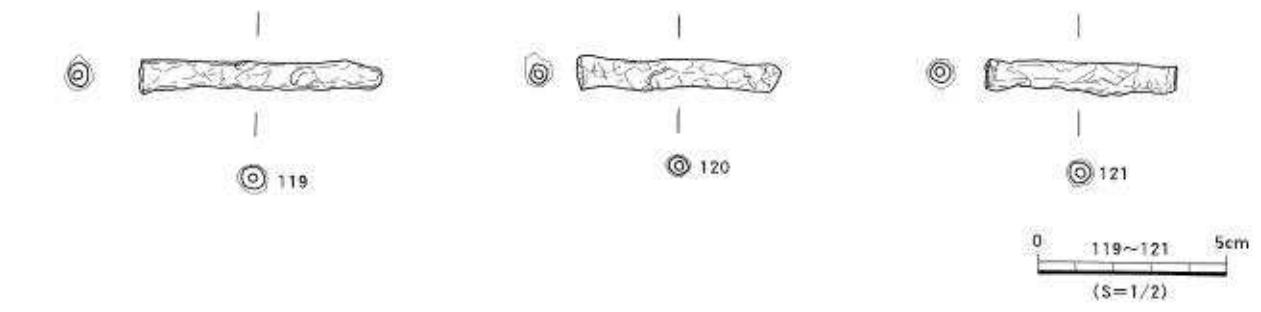
である。104は高台腰部がわずかに直行する。105は薩摩産と思われる。橈輪痕がわずかに残り、高台腰部から内湾する碗である。106は薩摩産の龍門司系山元窯の胎土目碗である。焼成不良である。107は肥前産の胎土目段階の砂目皿である。108は肥前産の二彩手の大皿である。内面に松が描かれている。109は肥前産の二彩手の大皿である。110は薩摩産の龍門司系と思われる台付皿である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。111は肥前産の陶器の鉢である。112は肥前の二彩手の徳利である。113と114は肥前の擂鉢で113が時期は古い。115は薩摩産の苗代川系堂平窯の甕である。口縁部は外折れで口唇部には貝目の痕が見られる。内面には同心円状の敵痕が見られる。116は小型の壺である。口唇部以外全釉であるが、内面には敵痕が見られる。117は薩摩産の龍門司系山元窯の灯明皿である。底部は橈輪回転による糸切りが見られる。また、見込み、外底面には胎止め痕が3箇所見られる。118は薩摩産の龍門司系窯の仏飯器である。皿部の見込みは蛇



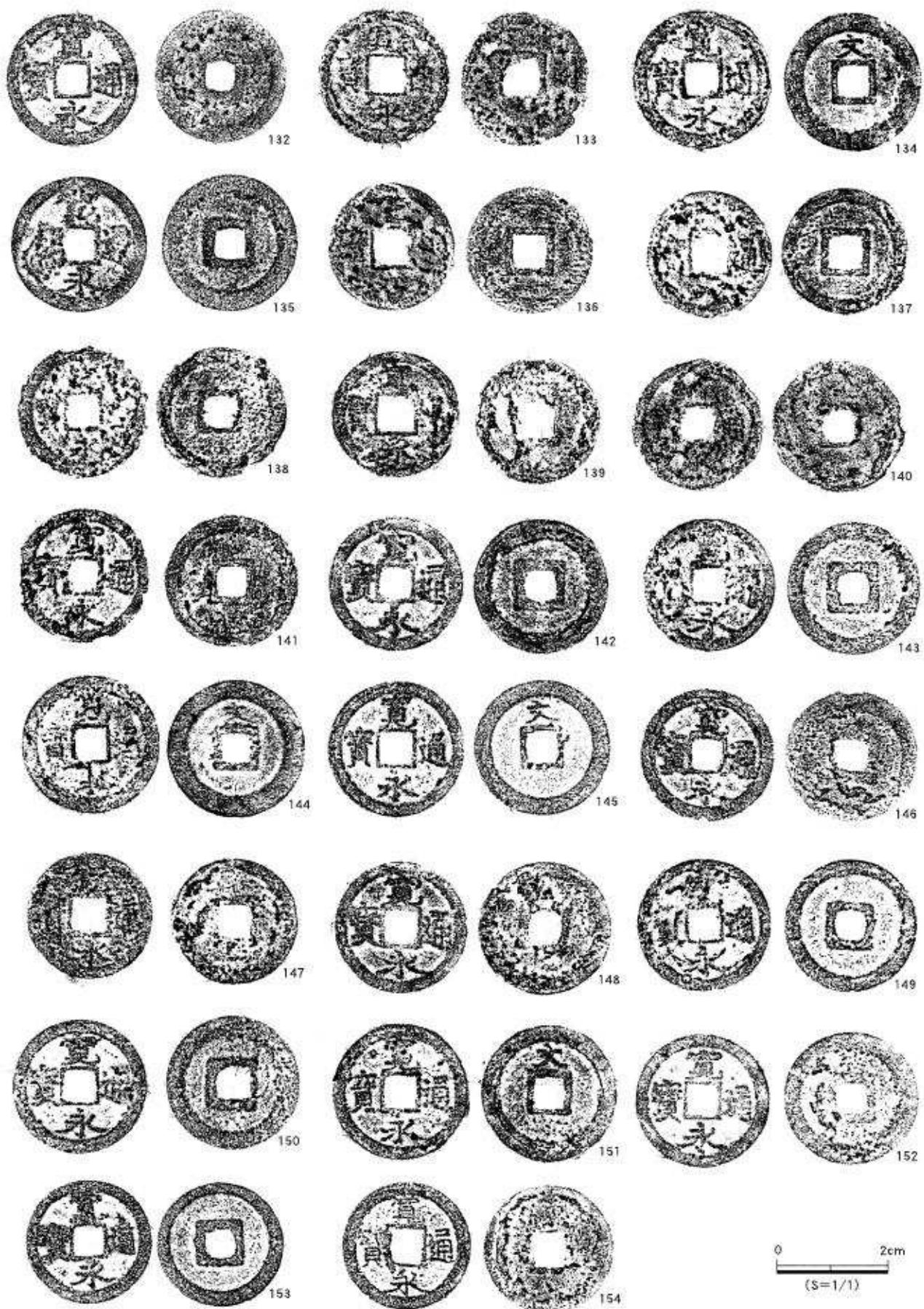
ノ目釉剥ぎで台部は内底まで無釉である。119～121は釘である。122と123は軽石製品である。122は切り込みが數カ所見られる。124～176までは古銭である。124～131は麻状のひもで括ってなかったもの、132～176は麻状のひもで括ってあったものである。一部、2枚に重なった状態のものもある。ほとんどが寛永通寶で「文」の文字の入ったものが134、144、145、151である。131の朝鮮通寶、164の嘉祐通寶が出土している。その他の出土遺物は、青磁の棱花皿1点、白磁小杯1点、漳洲窯系青花碗が2点、肥前産染付が6点、肥前産陶器皿が5点、薩摩産陶器が4点、鉄滓が14点(1,620g)出土した。



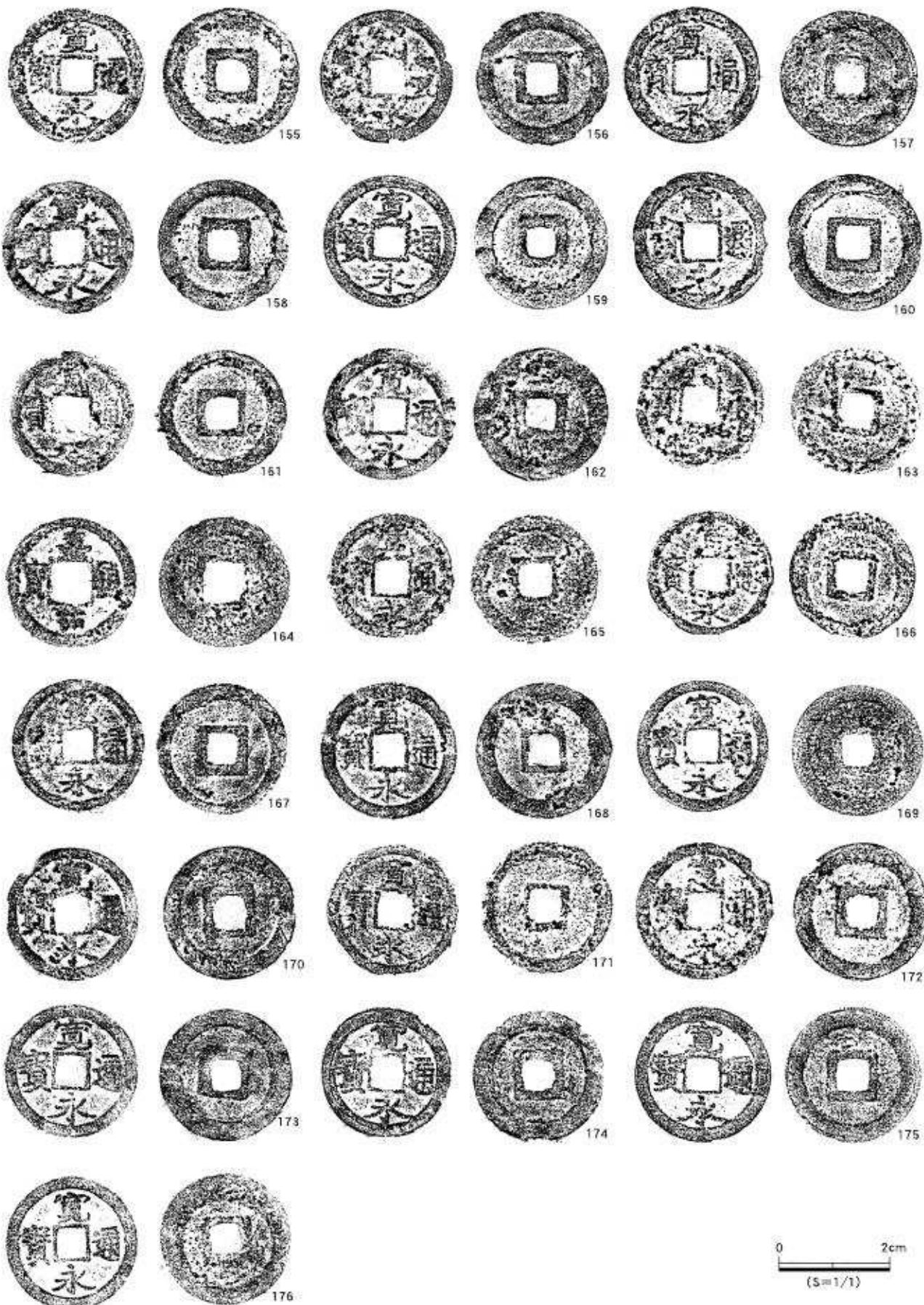
第447図 大型土坑5号 出土遺物④



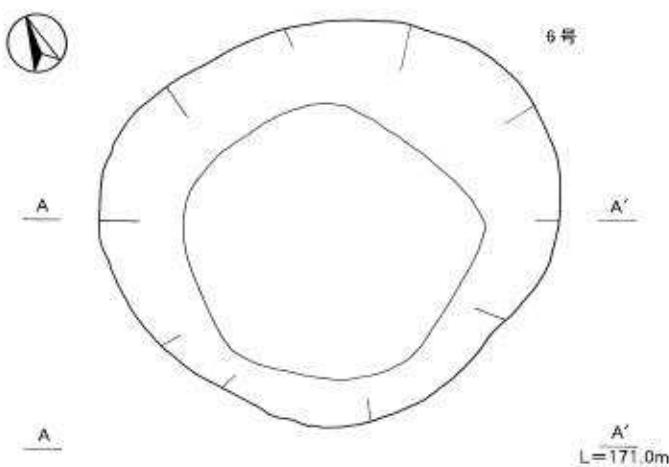
第448図 大型土坑5号 出土遺物⑤



第449図 大型土坑5号 出土遺物⑥



第450図 大型土坑5号 出土遺物⑦

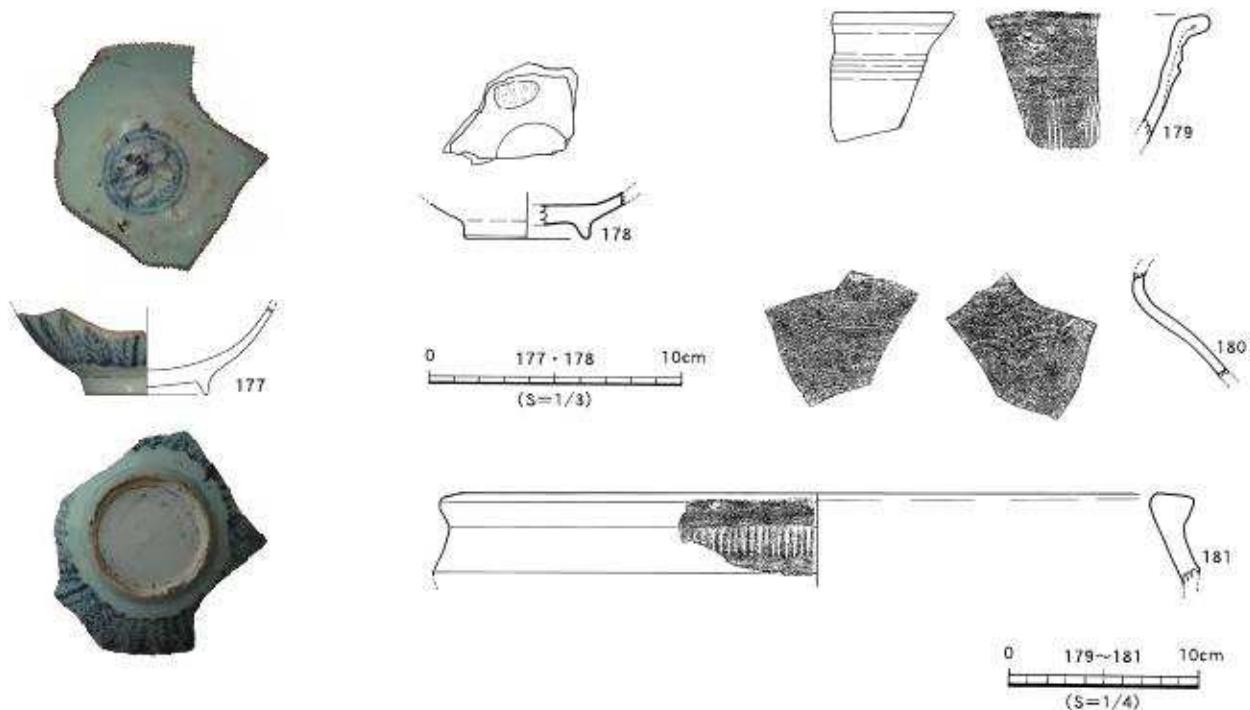
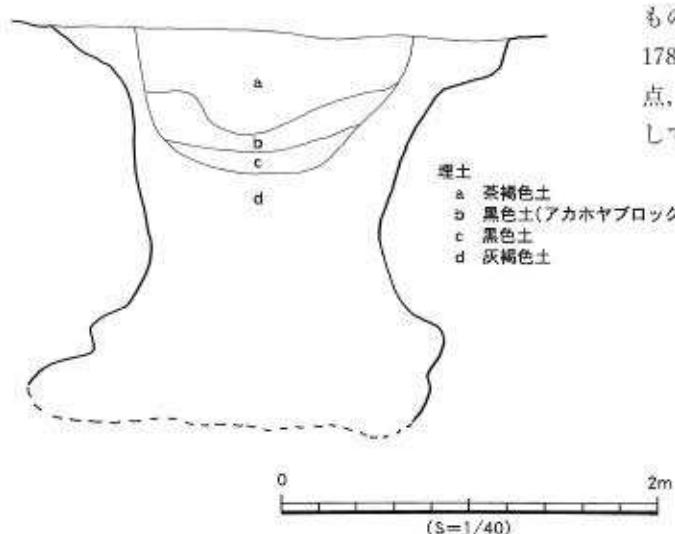


大型土坑 6 号（第451図）

G-36・37区で検出された、古墳時代の竪穴住居跡84号を切っている。大きさは2.4m×2.1m、検出面から深さ1.5mで湧水により調査を終了した。断面形状が下面に広がるフラスコ状を呈することから、素堀の井戸の可能性がある。

遺構内遺物

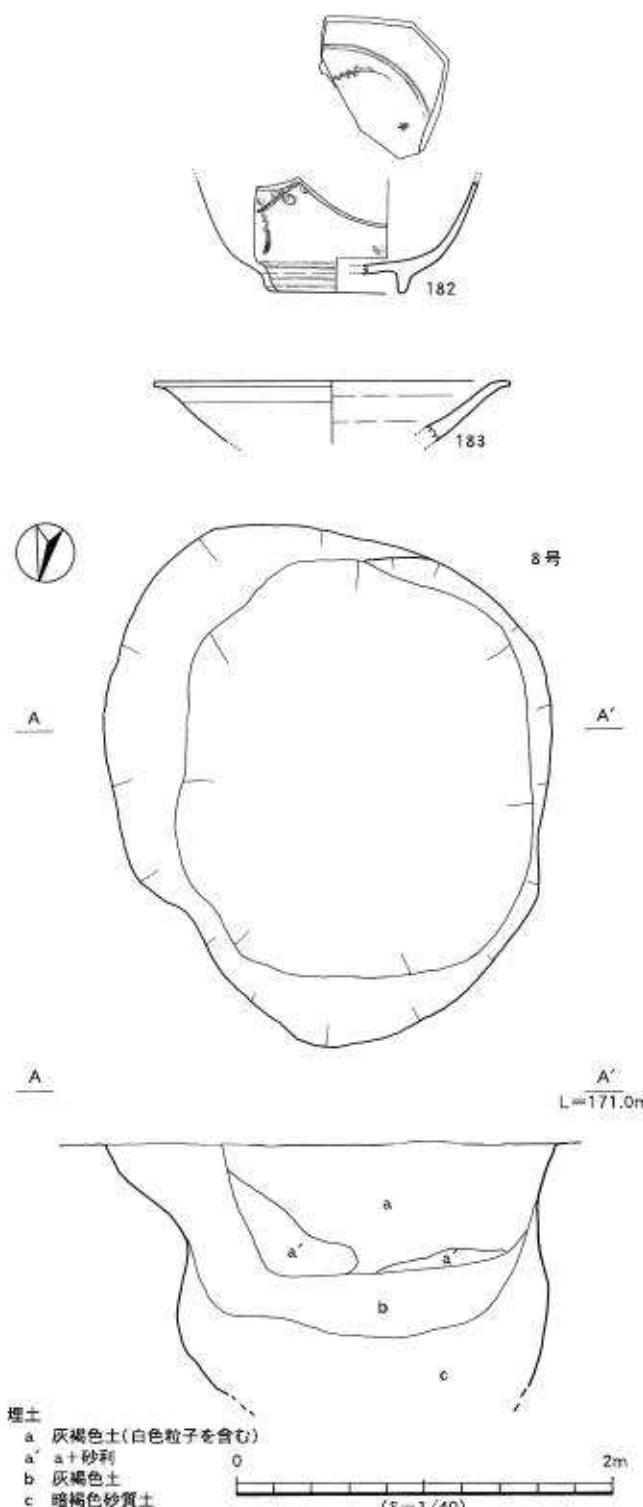
177は景德鎮窯系の碗である。見込みには蓮の花が描かれている。178は薩摩産の龍門司系山元窯と思われる陶器の碗である。179は薩摩産の苗代川系の擂鉢である。口唇部にかけて外折れである。180は壺の頸部である。同心円状の皺痕が残る。181は瓦質土器の火鉢である。その他の出土遺物は、漳州窯系の14世紀末から15世紀のものと思われる青磁の碗が1点、肥前白磁の小杯が1点、178と同一個体と思われる薩摩産の苗代川系壺の胴部5点、擂鉢5点、瓦質土器の擂鉢が4点、火鉢が1点出土している。



第451図 大型土坑 6 号 出土遺物

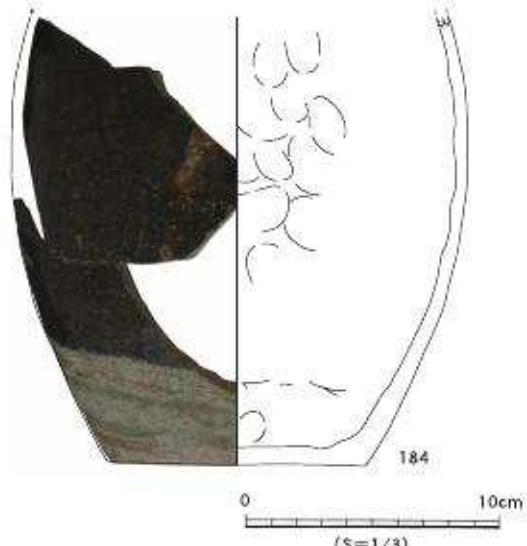
大型土坑7号

G-37区で検出された。大きさは、1.4m×1.4mであった。半裁し、掘り下げている途中、湧水のため崩落したので調査を終了した。下面がフラスコ状に広がるもので、素堀の井戸の可能性がある。近世の遺構と判断できる。



遺構内遺物（第452図）

182は景德鎮窯系の青花碗である。183は17世紀前半の肥前産の皿である。184は肥前産の大型の壺である。敲き成形で作られ、内面に同心円状の当て具痕が残る。その他の遺物は、肥前産の染付碗が2点、薩摩産陶器の胴部が2点、瓦質土器の擂鉢が1点出土した。

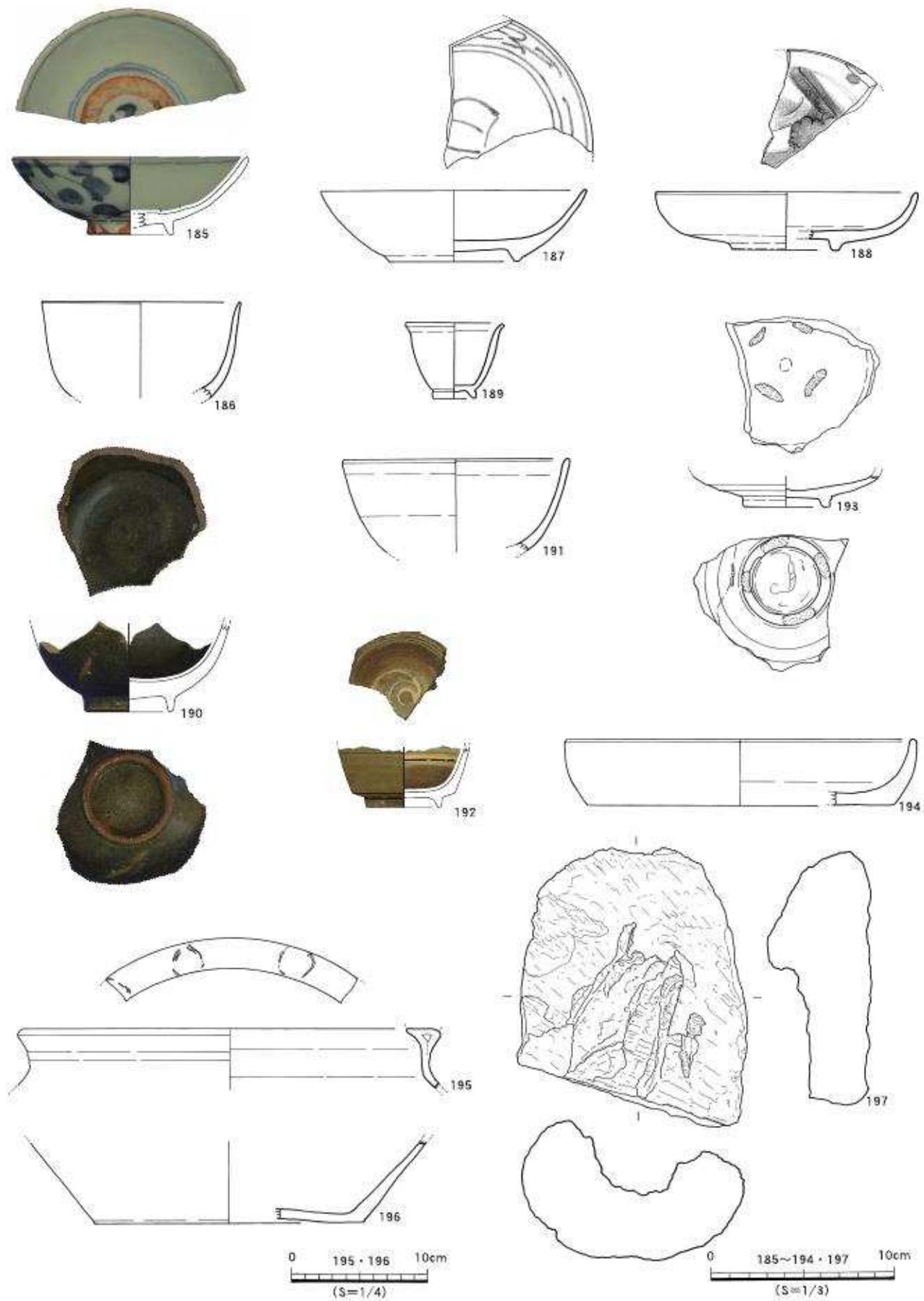


大型土坑8号（第452図・第453図）

E-41区で検出された。大きさは2.8m×2.4mである。検出面から、深さ約1.3mで湧水により調査を終了した。遺構内遺物

185は漳洲窯系の青花の皿である輪状の釉剥ぎと高台内面は露胎で焼成により赤化している。見込みには「正」の字が書かれている。186は肥前産の白磁の碗である。187・188は肥前産の染付皿である。187は日ノ字鳳凰文の皿である。189は肥前産の白磁の小杯である。190は肥前産の銅緑釉陶器の碗である。191は焼成不良の薩摩焼と思われる碗である。192は肥前産の陶器の小碗で白化粧土による刷毛目がある。向付である。193は肥前産の砂目の溝縁皿である。高台腰部から内底は露胎である。194は土師質土器の焰格である。195は薩摩産の苗代川系堂平窯の甕である。口唇部から外折れである。196は壺の底部である。197は軽石製品である。中央に凹みをもつ。凹みの端部に抉ったような痕跡が見られる。また下部は、鋭利なもので切断されている。鍛冶炉に関係するもの可能性はある。その他の遺物としては、青花の碗が2点、肥前産の染付碗が1点、肥前産の陶器が碗、皿それぞれ1点、薩摩産の擂鉢、甕の胴部が1点ずつ出土している。

第452図 大型土坑7号 出土遺物・8号

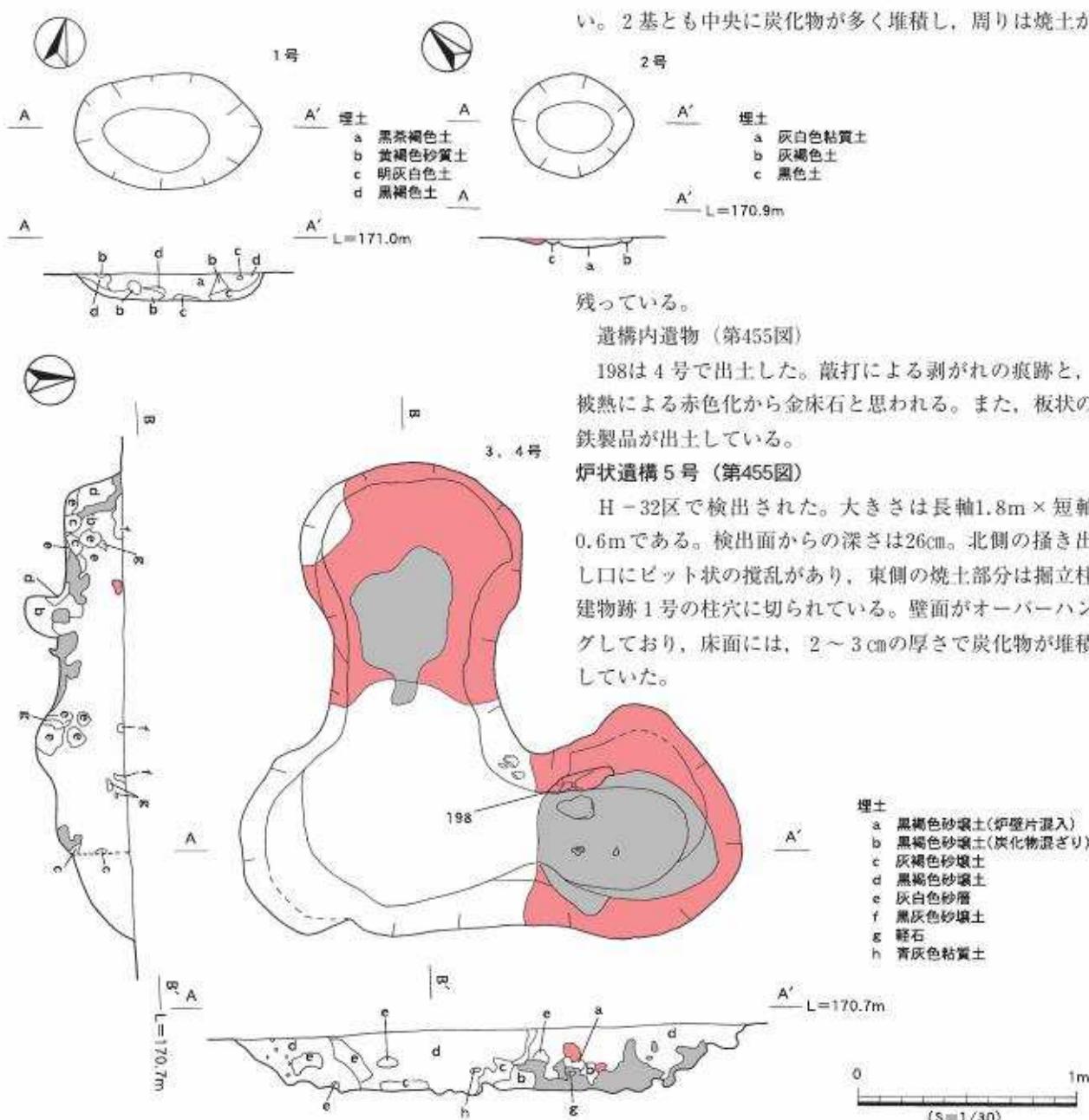


第453図 大型土坑8号 出土遺物

⑥ 炉状遺構（第454図～第457図）

炉状遺構は、H-11からG・H-38区まで広範囲で検出された。ほとんどのものが上部が削平され、基礎部が残るのみである。溝状遺構と大型土坑が多く検出された32～38区に検出されたものが、5号～19号である。周囲にあるピット群から屋内炉も考えられたのだが、掘立柱建物内で検出された炉状遺構12号以外は屋内炉であると判断することは出来なかった。また、埋土から粒状滓が検出され鍛冶炉と思われるもの、焼き出しのあるカマドと思われるもの、焼き出しの無いもの等数種類が検出された。まとめて報告する。

炉状遺構1号（第454図）



第454図 炉状遺構1号・2号・3号・4号

H-11区で検出された。大きさは長軸0.9m×短軸0.5mで、深さは0.12mである。上面がほとんど削平されている。埋土は炭化物を含む砂質土が上面にあり、下面に灰白色の灰状の塊が見られた。

炉状遺構2号（第454図）

H-11区で検出された。大きさは長軸0.6m×短軸0.5mで、検出面からの深さが5cmと浅く上面は削平されている。1号と同じく焼き出し口は見られないが、焼土と灰白色粘質土が堆積していた。

炉状遺構3号・4号（第454図）

H-11・12区で検出された。大きさは長軸2.3m×短軸2.2mで深さは約30cmである。4号の焼き出し口が3号を切って構築されていることから、3号の方が時期は古い。2基とも中央に炭化物が多く堆積し、周りは焼土が

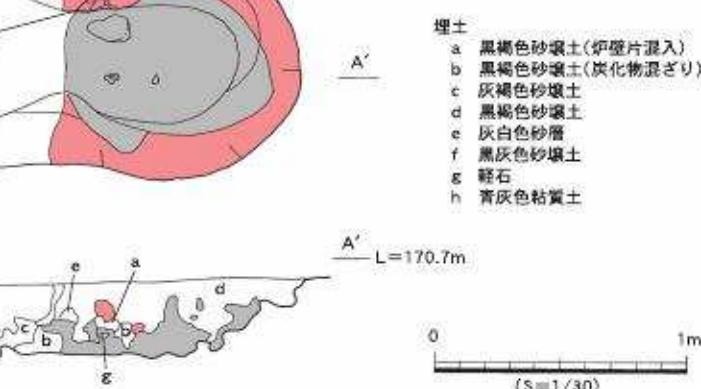
残っている。

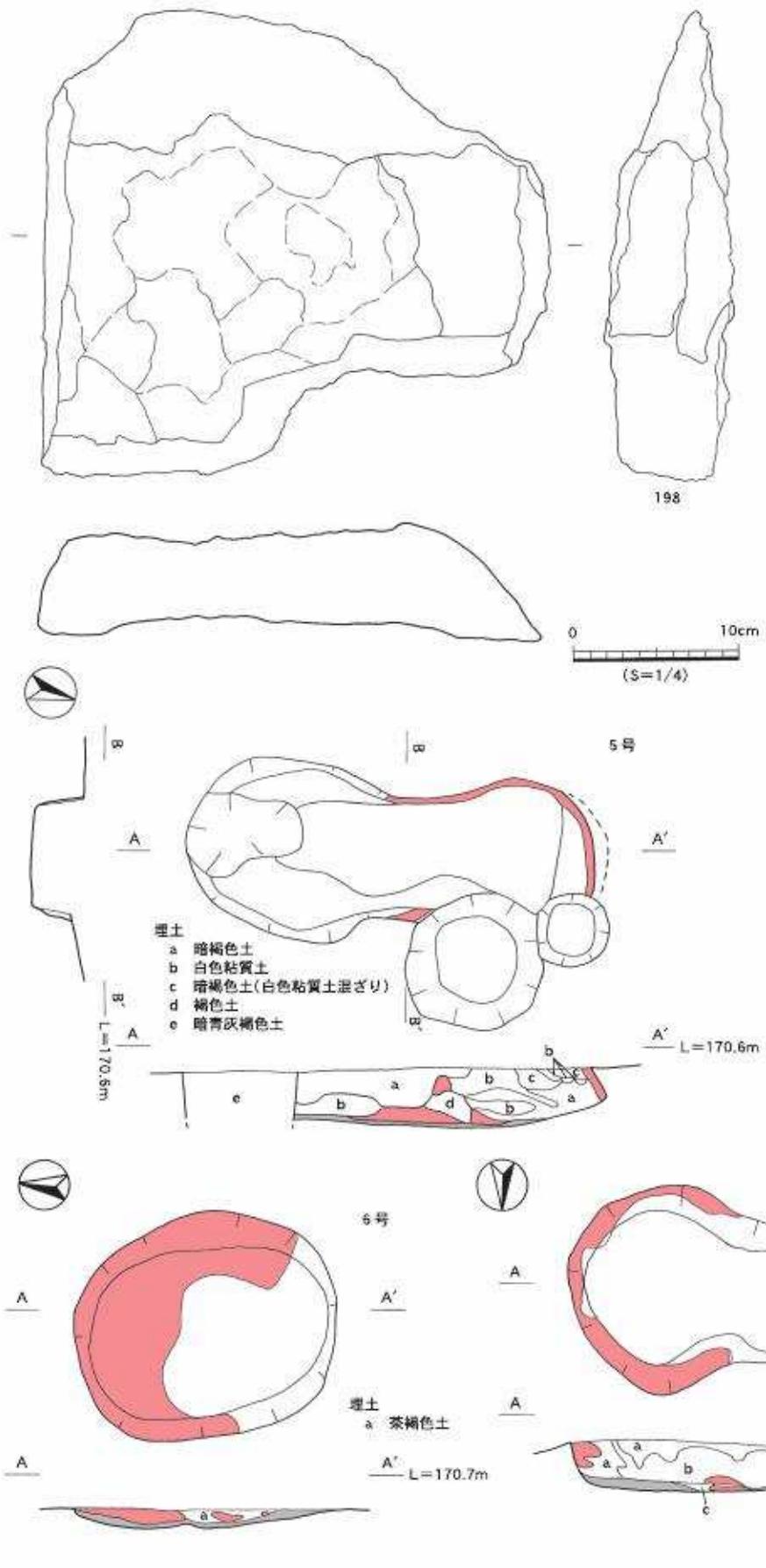
遺構内遺物（第455図）

198は4号で出土した。敲打による剥がれの痕跡と、被熱による赤色化から金床石と思われる。また、板状の鉄製品が出土している。

炉状遺構5号（第455図）

H-32区で検出された。大きさは長軸1.8m×短軸0.6mである。検出面からの深さは26cm。北側の焼き出し口にピット状の搅乱があり、東側の焼土部分は掘立柱建物跡1号の柱穴に切られている。壁面がオーバーハングしており、床面には、2～3cmの厚さで炭化物が堆積していた。





第455図 炉状遺構4号出土遺物・5号・6号・7号

炉状遺構6号 (第455図)

I - 32区で検出された。大きさは長軸1.2m×短軸1.0mである。検出面からの深さは約7cm。円形状のものである。焼土域が全体に広がっている。

炉状遺構7号 (第455図)

I - 33区で検出された。大きさは長軸2.0m×短軸1.0mである。検出面からの深さ15cm。炉壁の焼土部分が一部残っている。また、床面から炭化物が約4cm堆積している。

炉状遺構8号 (第456図)

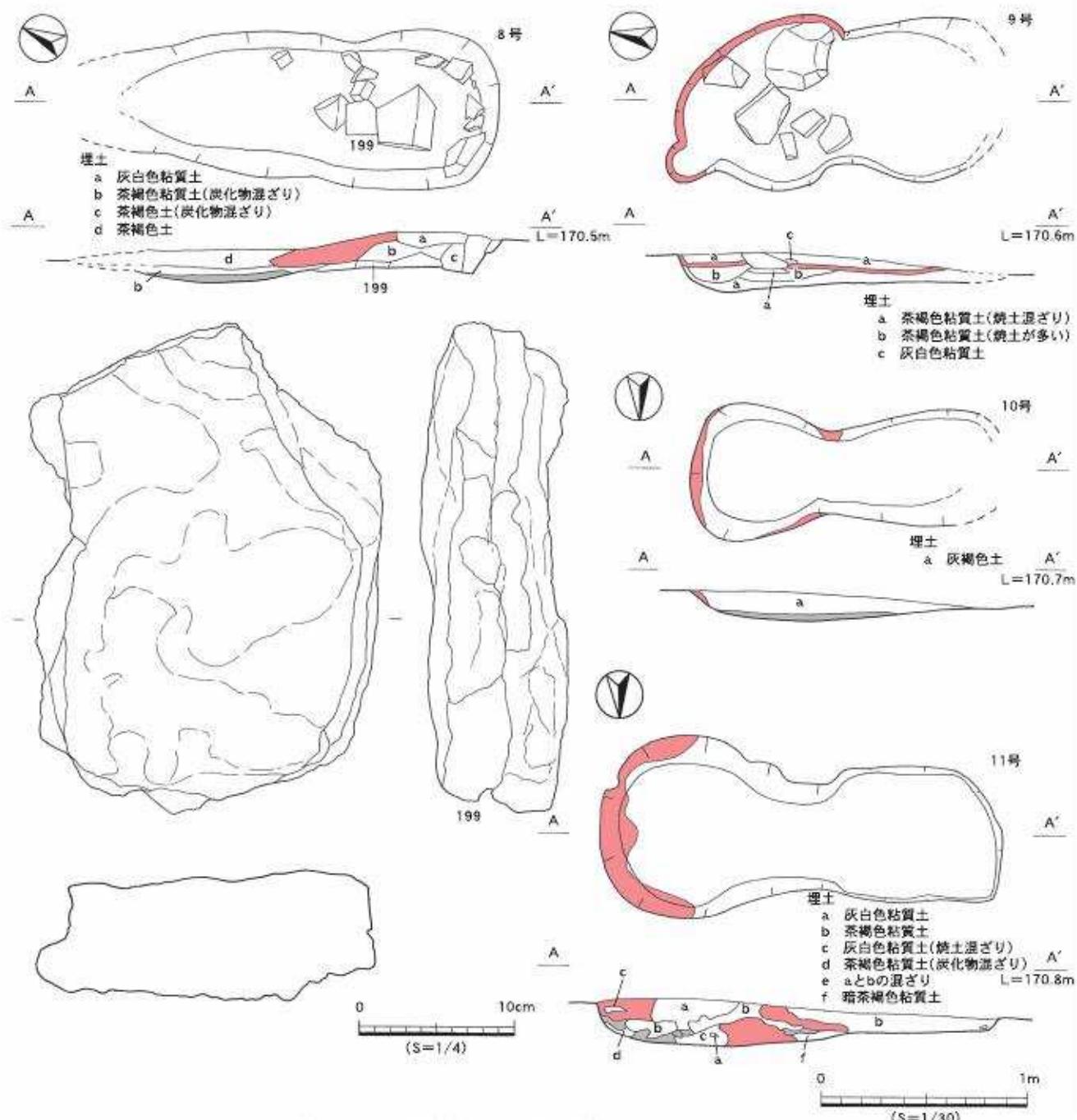
G - 33区で検出された。大きさは長軸2.2m×短軸0.8mである。検出面からの深さは約15cm。炉壁が石で囲まれており、周りの石は、被熱による赤化が著しい。炉壁の石と石の間は粘土により充填されている。炭化物を含んだ茶粘質土を掘り下げると床面から金床石が出土した。また、掻き出し口の床面から炭化物が約3cm堆積している。

遺構内遺物

199は床面から出土した金床石である。敲打による剥がれが全体に見られる。

炉状遺構9号 (第456図)

G - 34区で検出された。大きさは、長軸1.6m×短軸0.8mである。検出面からの深さは約15cm。被熱の見られない大型の礫6点が燃焼部から出土した。礫の上面には焼土や炭化物の混在した堆積が見られた。この状況は廃棄の際に投入された堆積を示すものと判断できた。



第456図 炉状遺構8号 出土遺物 9号・10号・11号

炉状遺構10号（第456図）

D-36区で検出された。大きさは長軸1.5m×短軸0.6mである。検出面からの深さは約14cm。燃焼部の赤化が著しく見られる。床面から2cmは炭化物が堆積している。

炉状遺構11号（第456図）

H-36・37区で検出された。大きさは長軸2.0m×短軸0.9mである。検出面からの深さは約22cm。燃焼部の炉壁が赤化している。

炉状遺構12号（第457図）

H-37区で検出された。大きさは長軸0.8m×短軸0.6mである。検出面からの深さは約16cm。炉壁と床面

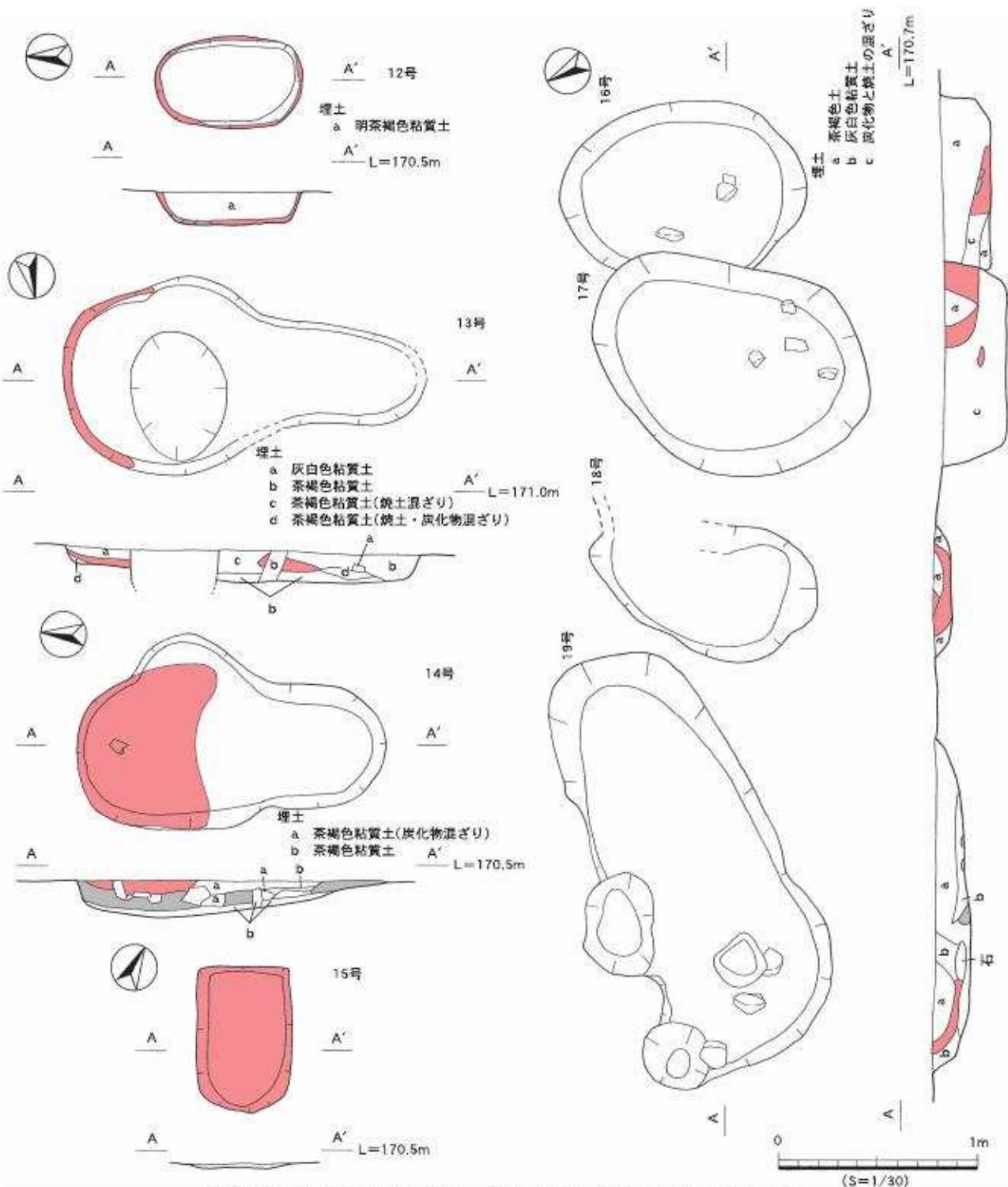
から焼土域が検出された。掘立柱建物跡6号内で検出され、掻き出し口は見られないでの、いろいろの可能性がある。

炉状遺構13号（第457図）

G・H-37区で検出された。大きさは長軸1.9m×短軸1.0mである。検出面からの深さは約15cm。燃焼部の炉壁と床面が焼土化しているが中央をピットに切られている。

炉状遺構14号（第457図）

H-38区で検出された。大きさは長軸1.6m×短軸1.0mである。検出面からの深さは約13cm。検出面から3cm掘り下げたところに石が入っていた。燃焼部が焼土



第457図 炉状遺構12号・13号・14号・15号・16号・17号・18号・19号

化している。床面から10cmは炭化物が堆積している。

炉状遺構15号（第457図）

G-38区で検出された。大きさは長軸0.7m×短軸0.5mである。検出面からの深さは約2cm。燃焼部である赤化した部分のみ残存しており、詳細は不明である。

炉状遺構16・17号（第457図）

I-37区で検出された。16号は長軸1.2m×短軸0.9mで、17号は長軸1.4m×1.1mである。検出面からの深さは約30cm。17号が16号を切った形で出土している。

炉状遺構18号（第457図）

I-37区で検出された。大きさは長軸1.2m×短軸0.7mである。検出面からの深さは約5cm。炭化物が多い。

炉状遺構19号（第457図）

H・I-37区で検出された。大きさは長軸2.2m×短軸0.8mで検出面からの深さは約20cm。燃焼部は赤化し、炭化物も多い。出土した碟とこの遺構との関係は不明である。

⑦ 溝状遺構（第458図～第465図）

E～G-33～35区で検出された溝状遺構1号とD～K-34～37区で検出された溝状遺構2号・3号をまとめて報告する。2・3号は途中で合流し、東西に延びているため東側にある羽月川への排水溝の可能性がある。

溝状遺構1号（第459図）

E～G-33～35区で検出された。検出面からの深さは約30cm～約50cm。だんだん浅くなり、G-35区で消滅した。

溝状遺構2・3号（第459図）

D-34区で検出した時は、2号・3号とわかっていたが羽月川の方に向かっていくと2号と3号の2つが合流した。3号はF-35区とJ-36区で南側にのびていた。F-35区では次第に消滅し、J-36から南側にわかれたものは、I-37で大型の土坑が検出された。深さは約10cm～約60cmである。中心となる溝は遺跡を東西に横断する形である。

遺構内遺物

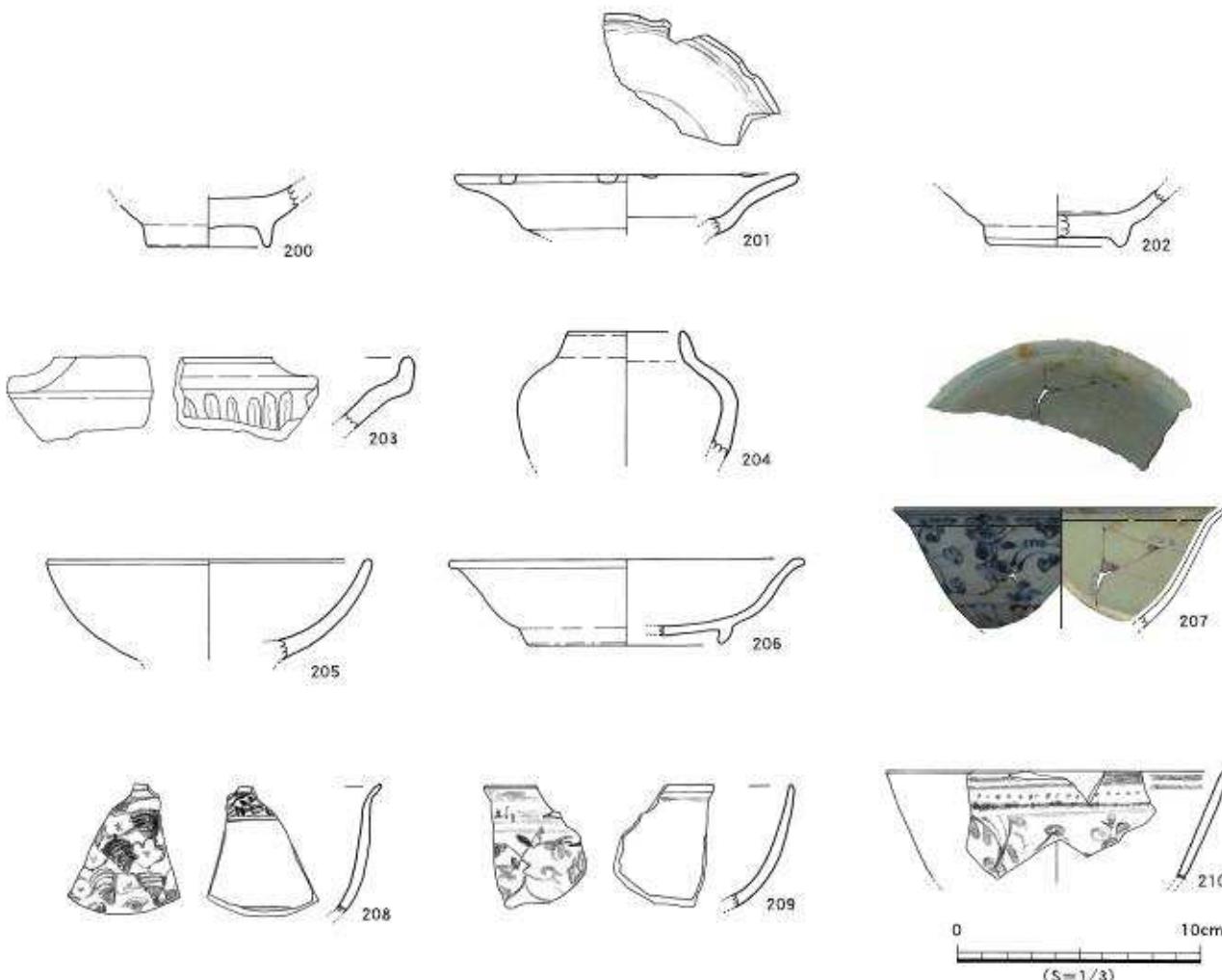
幅広い時代の遺物が出土したが、17世紀代の遺物が多かった。鞆の羽口や鉄滓の出土も多かったので、近接す

る炉状遺構との関係も考えられる。すべて、一括で取り上げてあるので、まとめて掲載する。

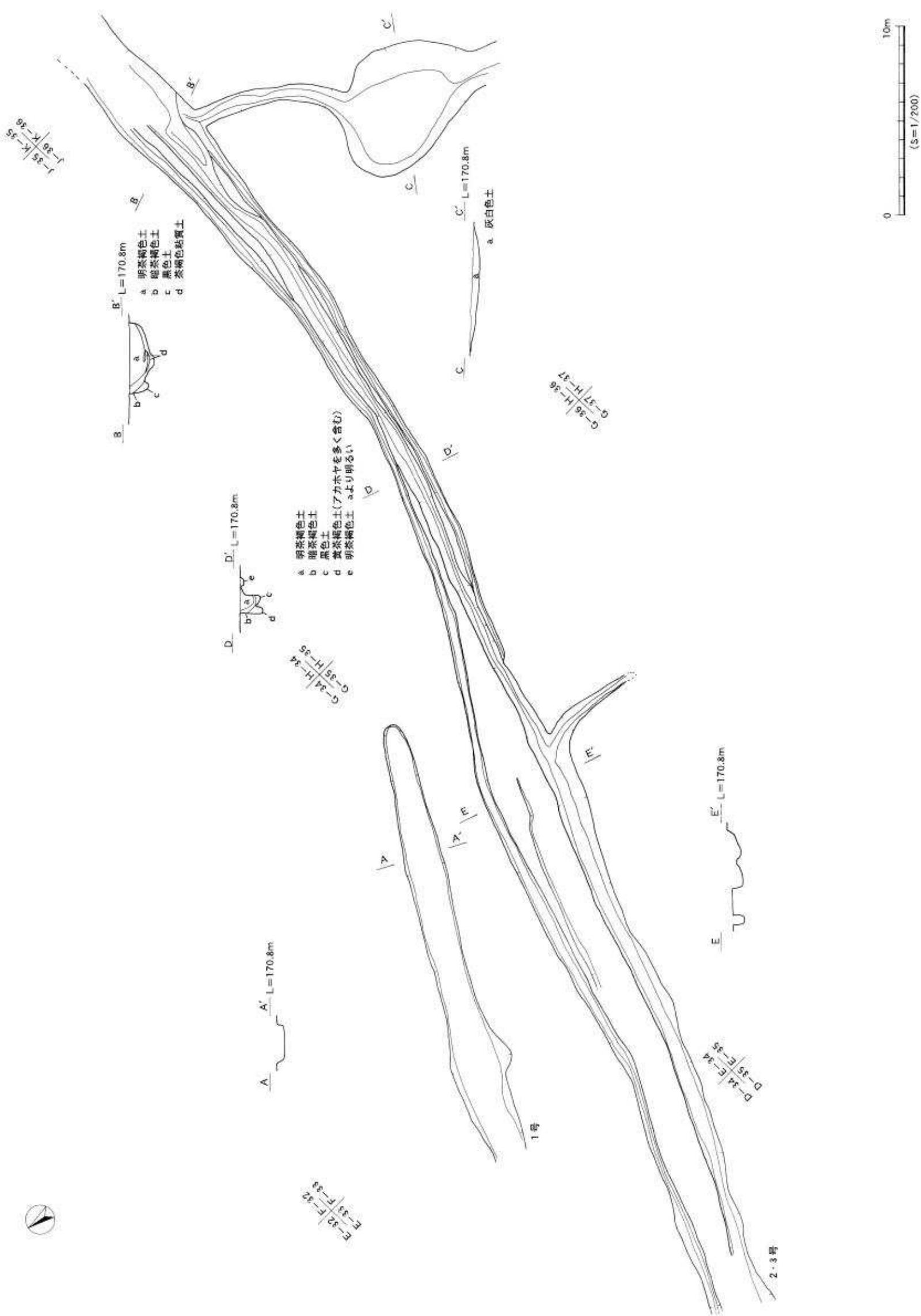
200～204は青磁である。200は龍泉窯系の楕の底部である。高台内底は露胎であるが疊付には一部釉薬が残っている。201～203は景德鎮窯系のものである。201は稜花皿である。202は稜花皿の底部である。高台内底は露胎であるが疊付には一部釉薬が残っている。203は盤である。204は中国南部のものと思われる小形の壺である。

205・206は白磁である。205は漳洲窯系の白磁の楕である。206は景德鎮窯系の皿である。

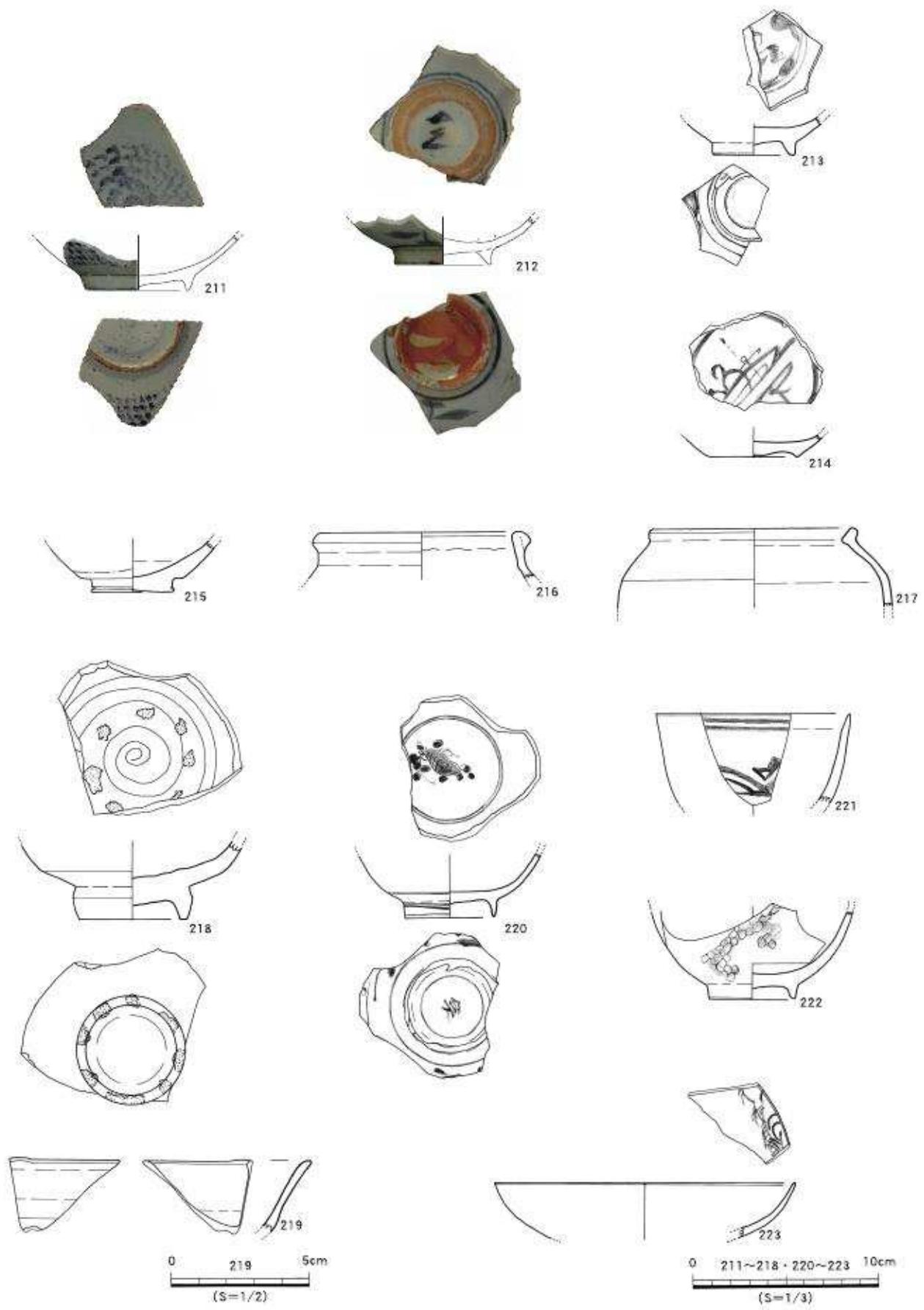
207～212は青花の碗である。207～211は景德鎮窯系である。207・208は端反りである。211は小花文が描かれている焼成不良の連子碗である。212～214は漳洲窯系である。212は輪状に釉剥ぎが施され、疊付に初殻が付着している。高台内底は露胎で焼成のため赤化している。213は、皿で高台内底は露胎である。214は葵筒底の皿である。高台内底は露胎である。見込みには「寿」の文字が描かれている。



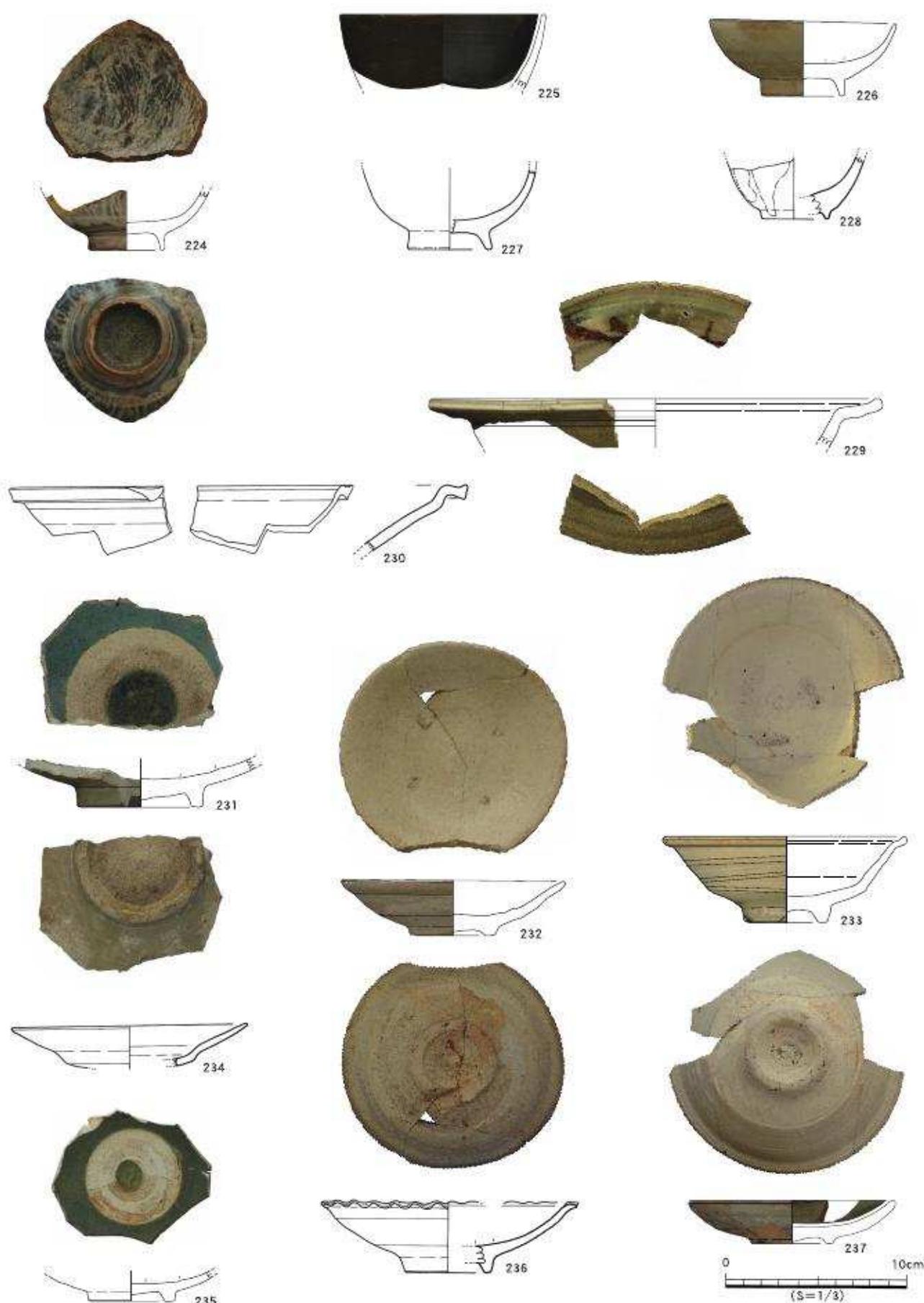
第458図 溝内出土遺物①



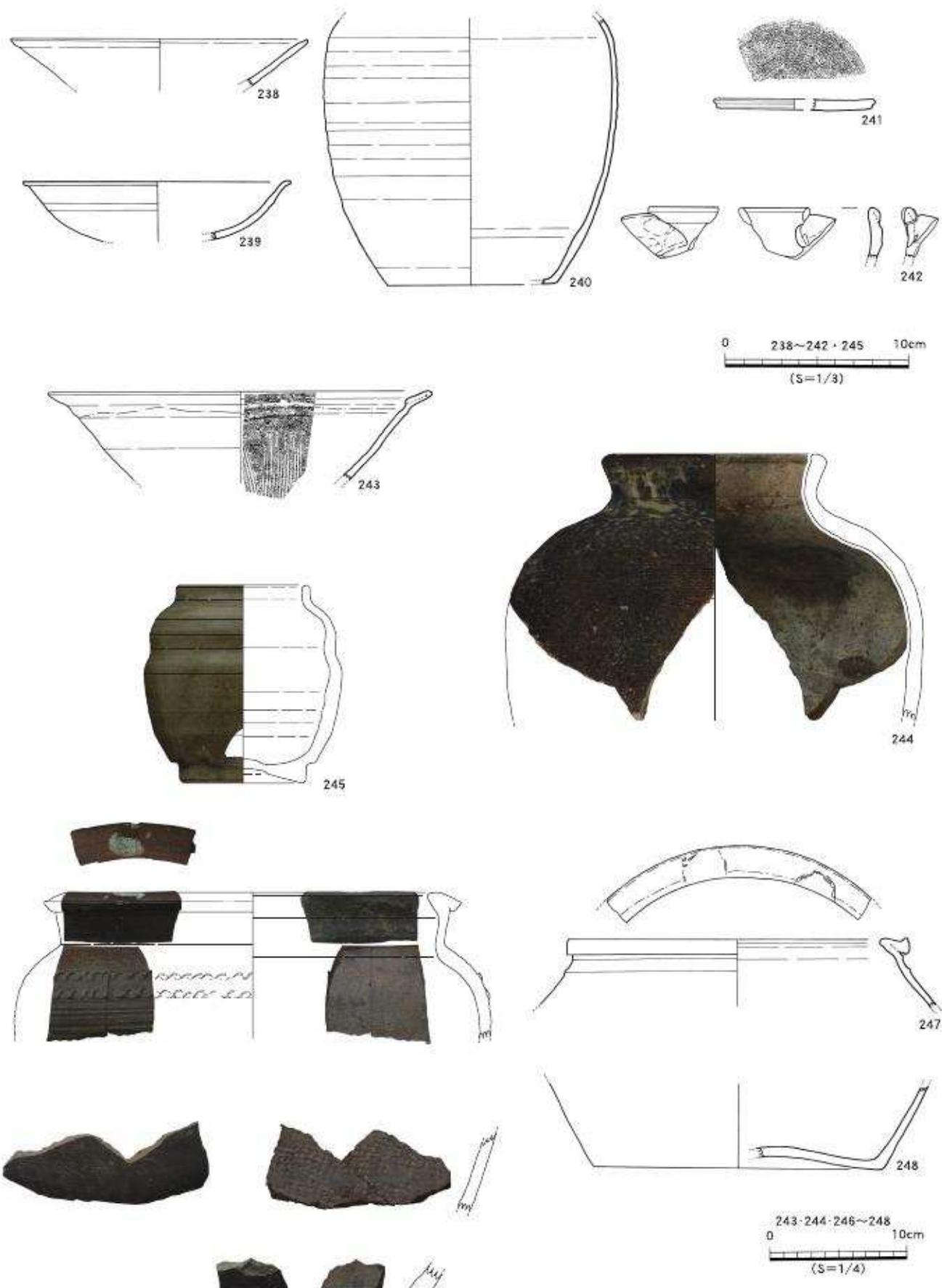
第459図 溝状造構 1号・2号・3号



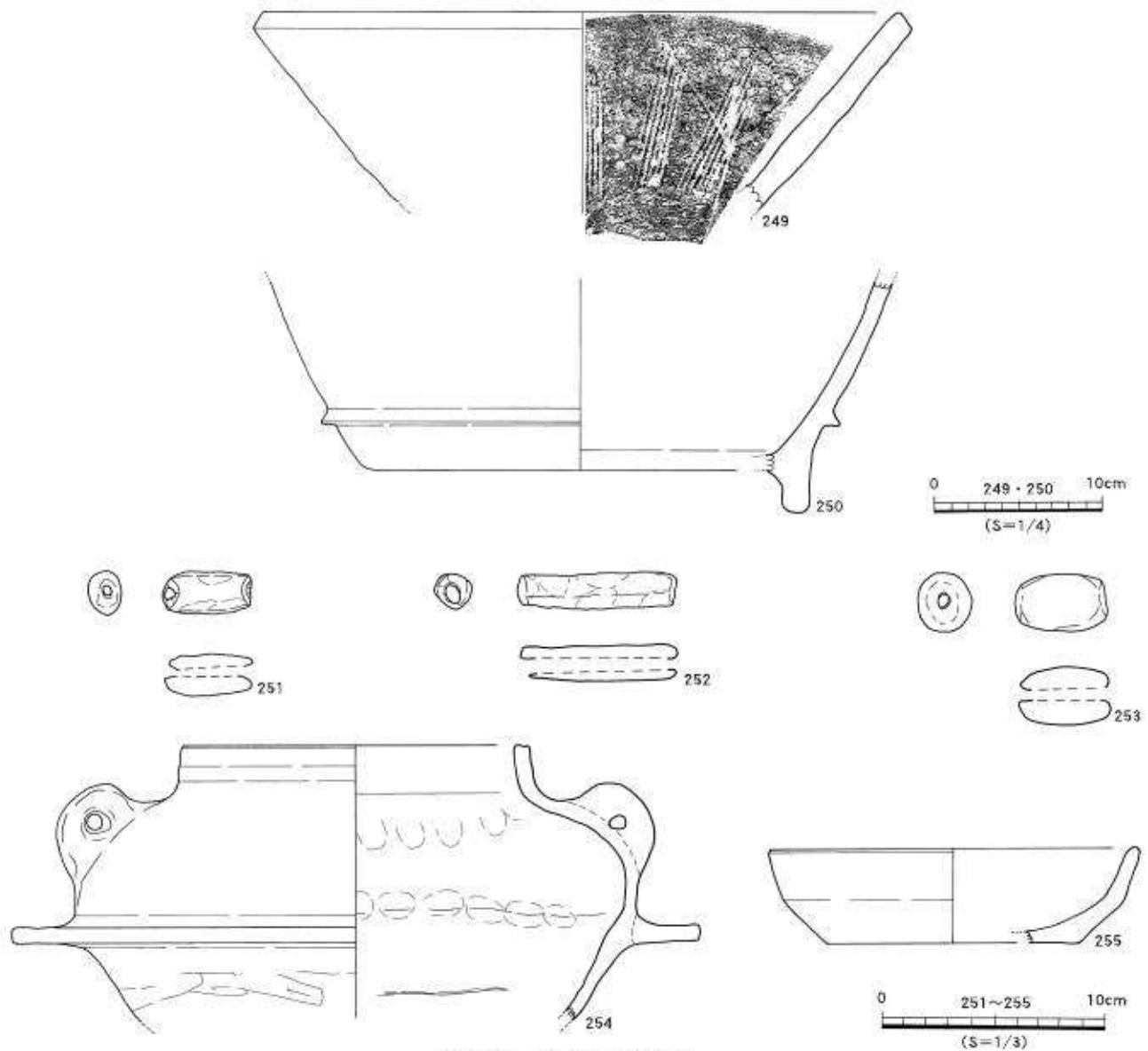
第460図 溝内出土遺物②



第461図 溝内出土遺物③



第462図 溝内出土遺物④



第463図 溝内出土遺物⑤

215～219は輸入陶器である。215は中国南部産と思われる天目型の碗の底部である。高台が平底で露胎である。216は中国産と思われる輸入陶器の壺である。焼成のため茶褐色に変色している。217は中国産の壺である。口唇をヘラで強く削られている。218は砂目の痕が疊付と見込みに残る朝鮮産の陶器の碗である。219は朝鮮産の皿である。

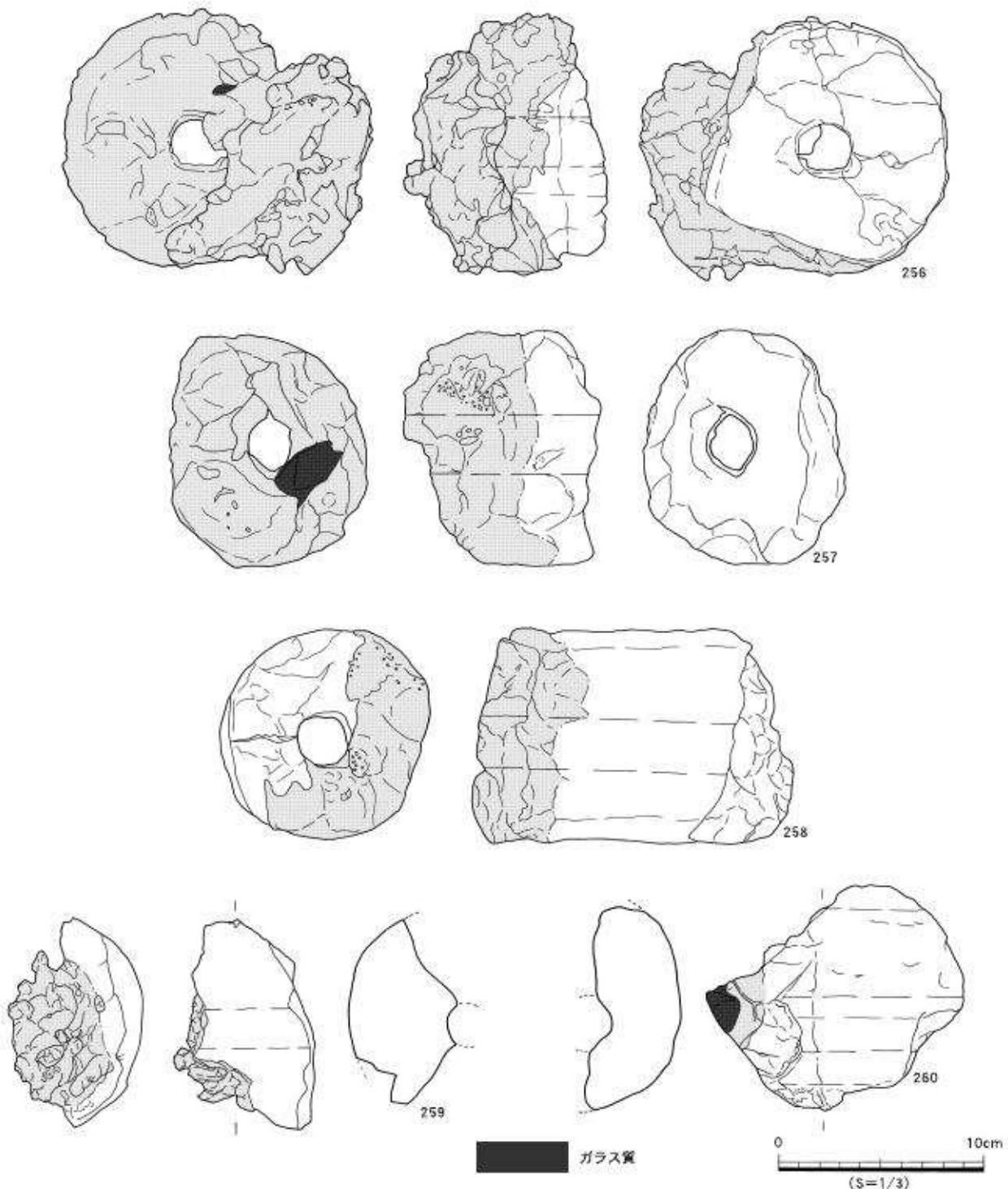
220～223は肥前産の磁器である。222はこんにゃく印判の碗である。223は胎土が黄白色であるが、染付の皿である。

224～228は肥前産又は薩摩産の陶器の碗である。224は肥前産の刷毛目の施された碗である。疊付の内面に砂が付着している。225は薩摩産の龍門司窯の碗である。226は赤色が塗られているが、発色がされていない。焼

成不良の碗である。肥前産と思われるが薩摩産の可能性もある。227は肥前産の呉器手碗である。228は肥前産の褐釉の碗である。

229～239は肥前産の皿である。229は二彩手の中皿で松が描かれている。230は口縁が外反する中皿である。231は蛇ノ目釉剥ぎで高台内底露胎の中皿である。233は溝縁皿である。236は肥前内野山窯産の稜花皿である。蛇ノ目釉剥ぎで疊付から高台内底は露胎である。

240は薩摩産の徳利である。粘土ひもでつないだ後に敲きを施した痕が見られる。薄型であることから、苗代川系串木野窯の可能性もある。241は肥前産の水差しの蓋である。242は薩摩産の苗代川系堂平窯の片口の注ぎ口である。243は肥前産の擂鉢である。244は備前産の壺である。245は肥前産の灰釉の小壺である。246は肥前産



第464図 溝内出土遺物⑥

の大甕である。内面に格子状の蔽目が見られる。247・248は薩摩産の苗代川系堂平窯産の壺の口縁部と甕の底部である。

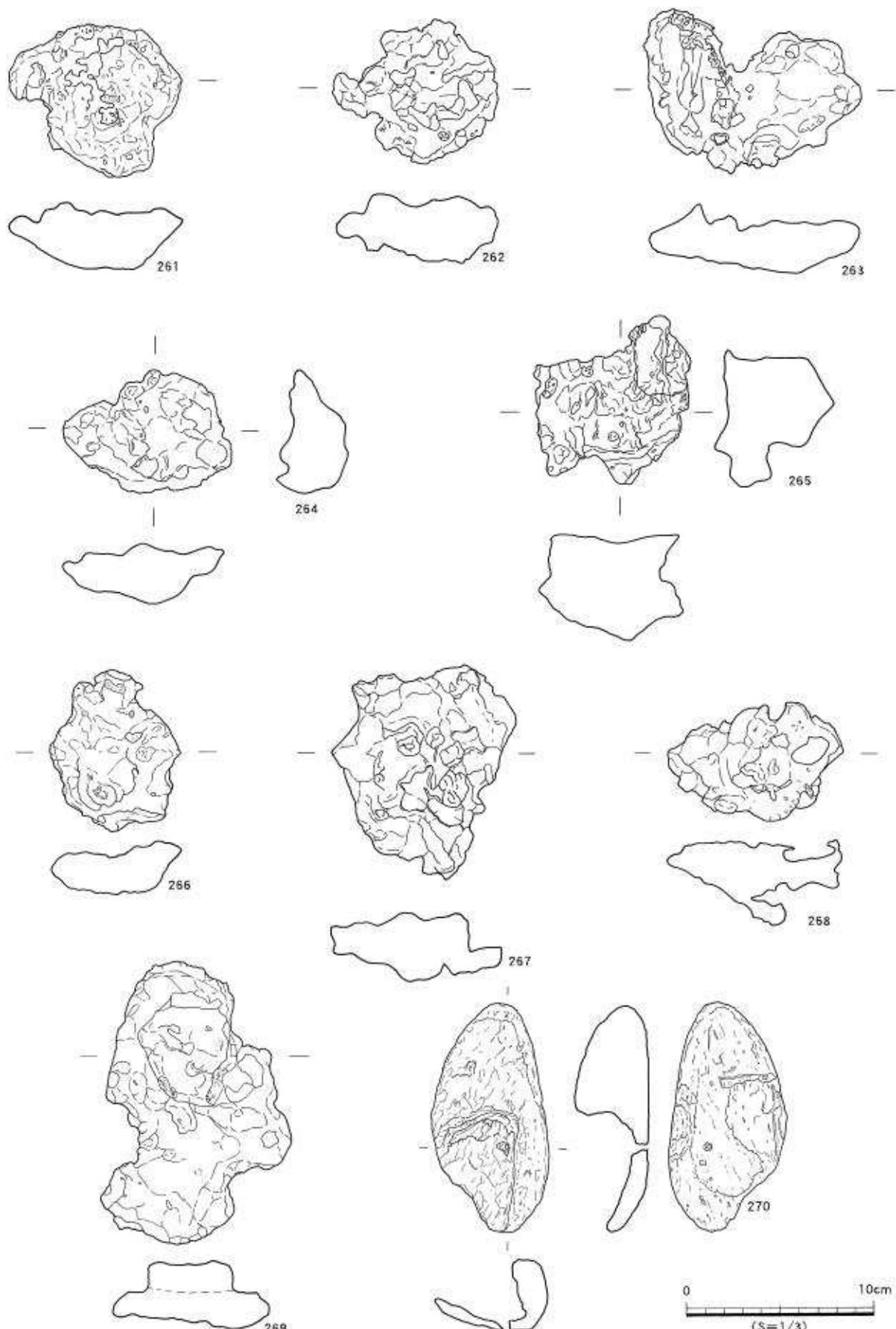
249は瓦質土器の擂鉢である。250は火鉢である。

251～253は土錘である。古代の可能性がある。254は土師質土器の茶釜である。内面をつないだ指押さえの痕が見られる。255は焙烙である。

256～260は鞴の羽口である。鉄滓が端部についている。257・260は一部ガラス質の部分が見られる。261～269は

鉄滓である。ほとんどのものが碗型滓である。270は軽石製品である、端部に抉りが見られ、中央に穿孔が施されている。

その他の出土遺物は、青磁の椀が5点、皿が4点、白磁の皿が4点、青花が13点、肥前産の染付が22点、陶器の碗が2点、皿が20点、擂鉢が12点、薩摩焼が21点、瓦質系土器の擂鉢が33点、鞴の羽口が105点、鉄滓が1651点(75,397g)出土している。

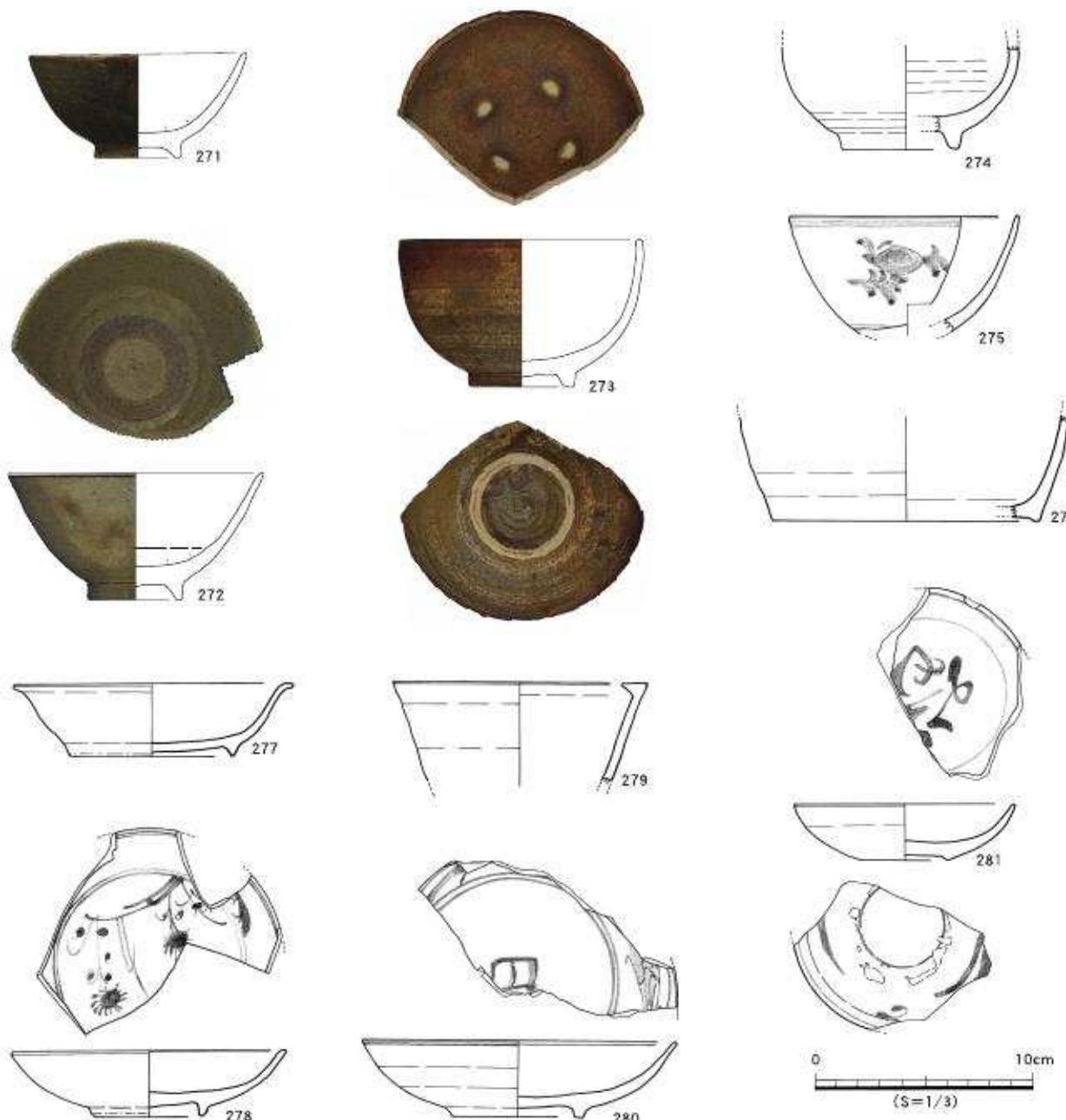


第465図 溝内出土遺物⑦

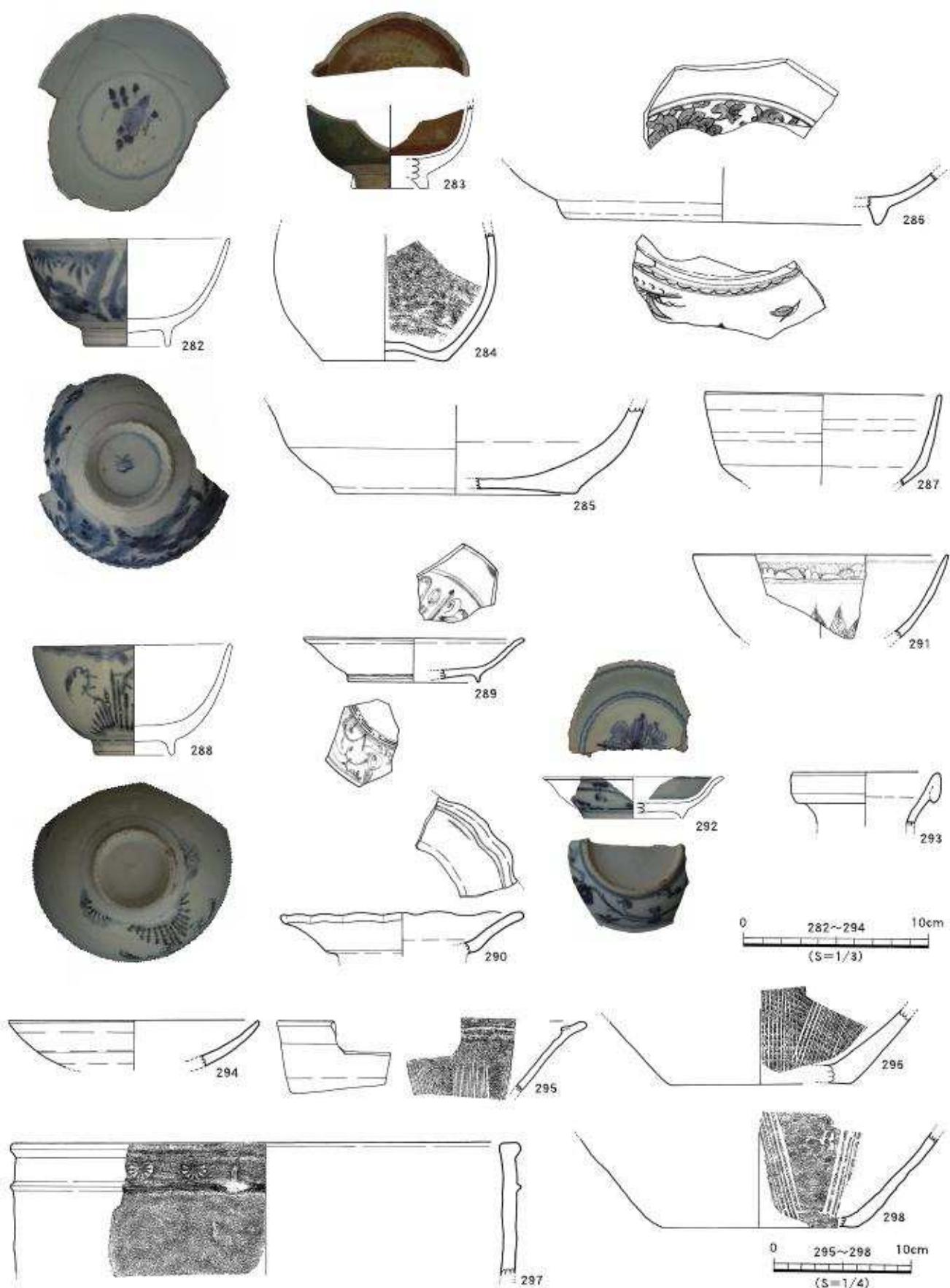
⑥ ピット内遺物 (第466図～第469図)

調査範囲内で多くの中世・近世のピットが検出された。調査時、ピットを埋土の色で、時代分けを行った。中世・近世に当たるピットは、赤茶色と灰白色の埋土であった。ピットの総数は4000基あまりで、その中から遺物が出土したピットは138基であった。古墳時代、古代と判断したピット内からも、中世・近世の遺物が出土したので、そのピットも中世・近世のピットとして取り扱って掲載している。遺物の多くが青花、肥前系陶磁器、薩摩産陶磁器であった。北側からつけたピット番号と縮尺を考慮して掲載しており、詳しい分類はされていない。ピット番号等の詳細については遺構配置図と観察表を参照されたい。

271・272は同一ピットから出土した。どちらも薩摩産の龍門司系の碗である。見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施されている。273・287・301・302は薩摩産の龍門司系山元窯の碗である。274は豊野系冷水窯の白薩摩の碗である。275・304は肥前産の染付碗である。276は薩摩産の苗代川系堂平窯の片口の底部である。277・305は景德鎮窯の白磁の皿である。278・280は肥前の染付皿である。279は肥前の香炉である。281は見込みに「福」の字が書かれた碁笥皿である。底部には初穀が付着している。282は薄手の高台をもつ碗である。283・299は肥前内野山窯の碗である。284は薩摩産の苗代川系の徳利である。串木野窯の可能性もある285は土師質土器の焙烙である。286は景德鎮窯系の青花の皿である。高台内底は無釉で



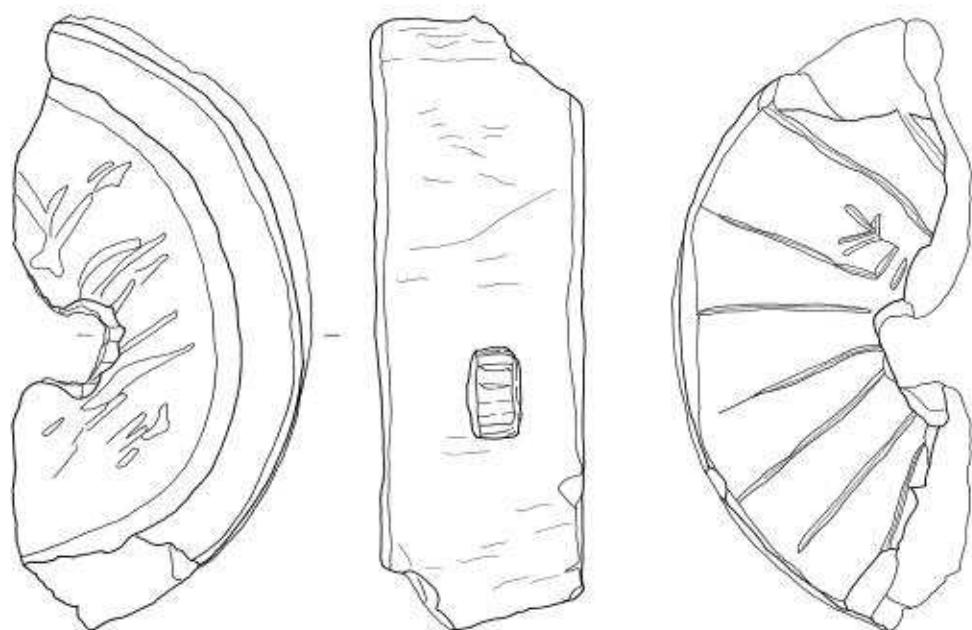
第466図 ピット内遺物①



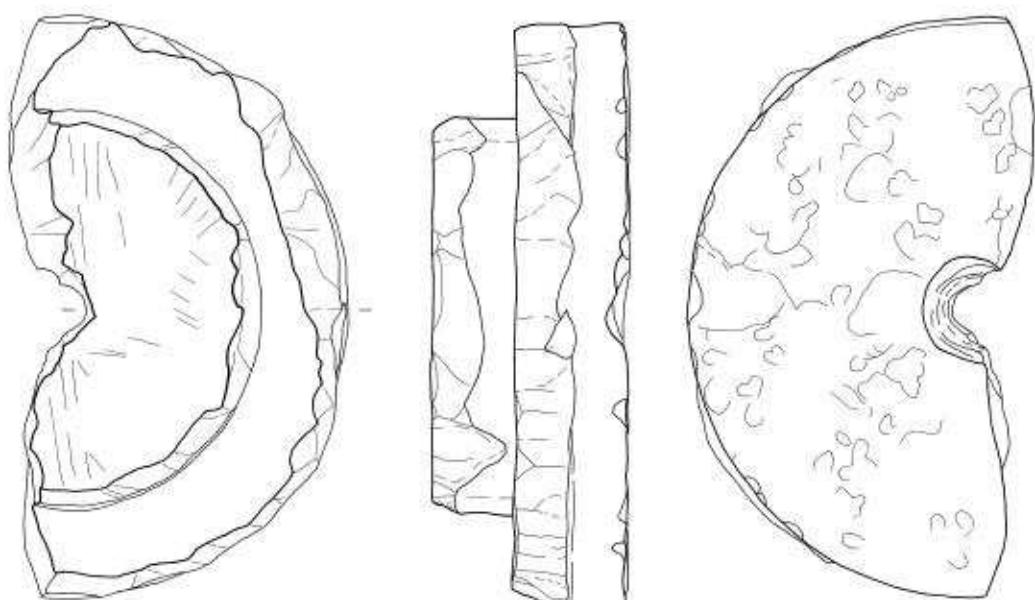
第467図 ピット内遺物②



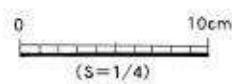
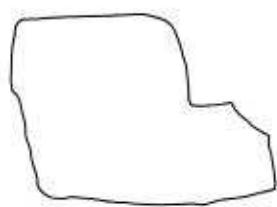
第468図 ピット内遺物③



311



312



第469図 ピット内遺物④

(3) 包含層出土遺物

中世から近世の出土遺物は、全調査区において検出された。この時期に相当する層は、I b層からII層であるが、どの層からも混在して出土する状況であり、中世と近世の時代区分は層位的に困難であった。遺構と同じように、中世と近世の遺物を一括して取り扱い報告する。

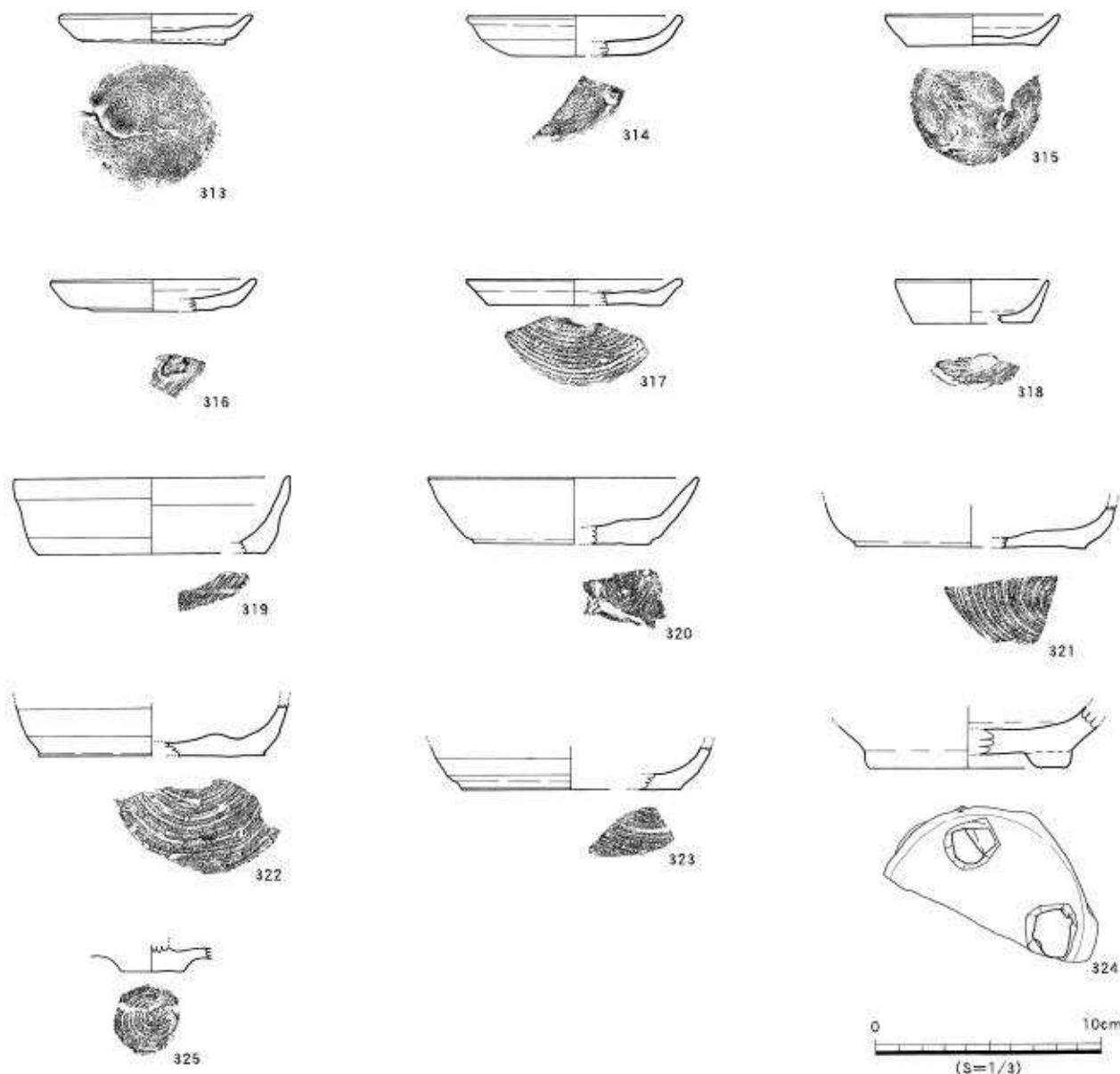
中世に相当する遺物は、土師器、輸入磁器である。青磁・白磁・青花や滑石製品などが出土している。また、古瀬戸が出土している。これらの出土量は571点で広範囲に出土している。

近世に相当する遺物は、瀬戸・美濃産陶器、備前産陶器、肥前産陶磁器、薩摩産陶磁器などが出土している。これらの出土量は1830点で広範囲に出土している。なお、

遺物の分類については概要で述べてある通り、土師器、輸入陶磁器、国産陶磁器、その他の順に報告する。

① 土師器（第470図）

313~325は、土師器である。古代の土師器は大量に出土したが、中世のものと思われる底部の切り離しが糸切りのものは、62点と他の遺物量に比べると少數であった。口径が10cm未満のものを皿とし、10cm以上のものを壺とした。口径がわからないものについては、器高で判断している。313~318は皿である。内外面とも回転ナデによる調整が施されている。313はほぼ完形品である。319~324は壺である。321は外面が赤茶の発色を呈している。324は壺に脚の付いたものである。325は燈器である。底径が2.8cmである。芯入れの部分が破損している。



第470図 中世遺物(1) 土師器

② 輸入磁器（第471図～第474図）

輸入磁器は、中国産の青磁・白磁・青花・赤絵・ベトナム産の青花が出土している。器種は、碗・皿である。

326～332は青磁である。326は剣先連弁文である。327・328は外面に連弁文が施されるものである。329は鍋連弁が簡略されたものである。330・331は龍泉窯系の内面に割花文が施されるものである。332は稜花皿である。

333～337は白磁である。333は景德鎮窯系の楕で高台より下部は露胎である。12～13世紀のものである。334・335は景德鎮窯系の皿である。336は漳洲窯系の碁笥底の皿である。高台内底は露胎で、被熱のため赤化している。337は景德鎮窯系の小杯である。

338～345は景德鎮窯系の青花の碗である。341は、外面を松で表し、内面を蓮又は、巻き貝で表している。343は連子碗で外面は芭蕉文で内面は蓮又は巻き貝を表している。344・345は見込みが緩やかに盛り上がる鎧頭心の碗である。346～350は漳洲窯系の青花の碗である。

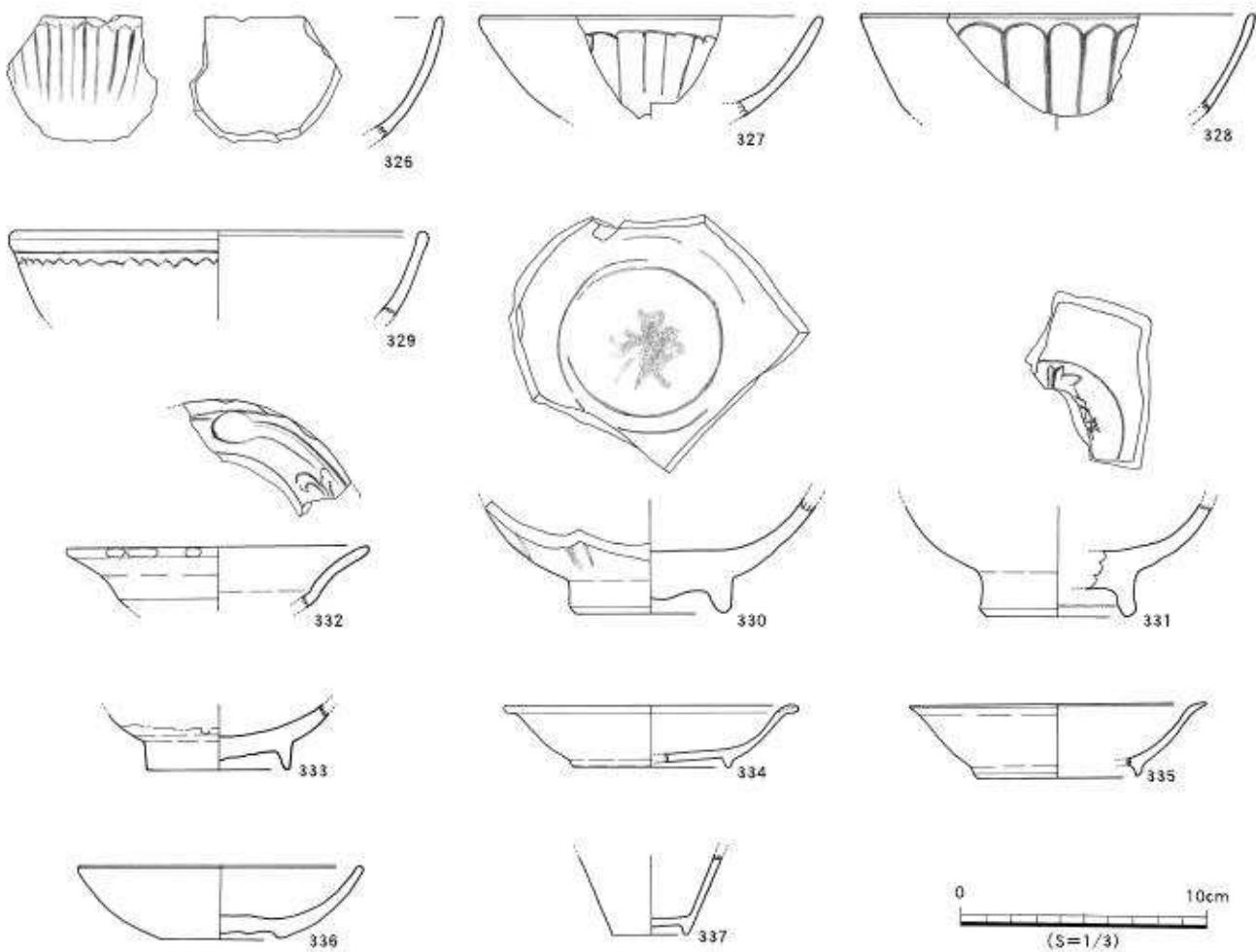
346・347は輪状の釉剥ぎで内面に「正」の字が描かれている。ともに高台内底は露胎である。346は皿の可能性もある。346～348は鎧頭心型の碗である。351～356は景德鎮窯系の青花の皿である。354・355は碁笥底の皿である。357～361は漳洲窯系の青花の皿である。358・359は碁笥底の皿で「寿」を人型に表したものである。360は輪状の釉剥ぎで高台内底は露胎である。

362は景德鎮窯系の赤絵の色絵皿である。赤で輪郭を表現している。16世紀のものである。363はベトナム産の青花の碗である。胎土は乳白色で中国産の青花の胎土より光沢がない。輪状の釉剥ぎで見込みに文様が描かれている。また、高台内底は露胎である。17世紀のものである。

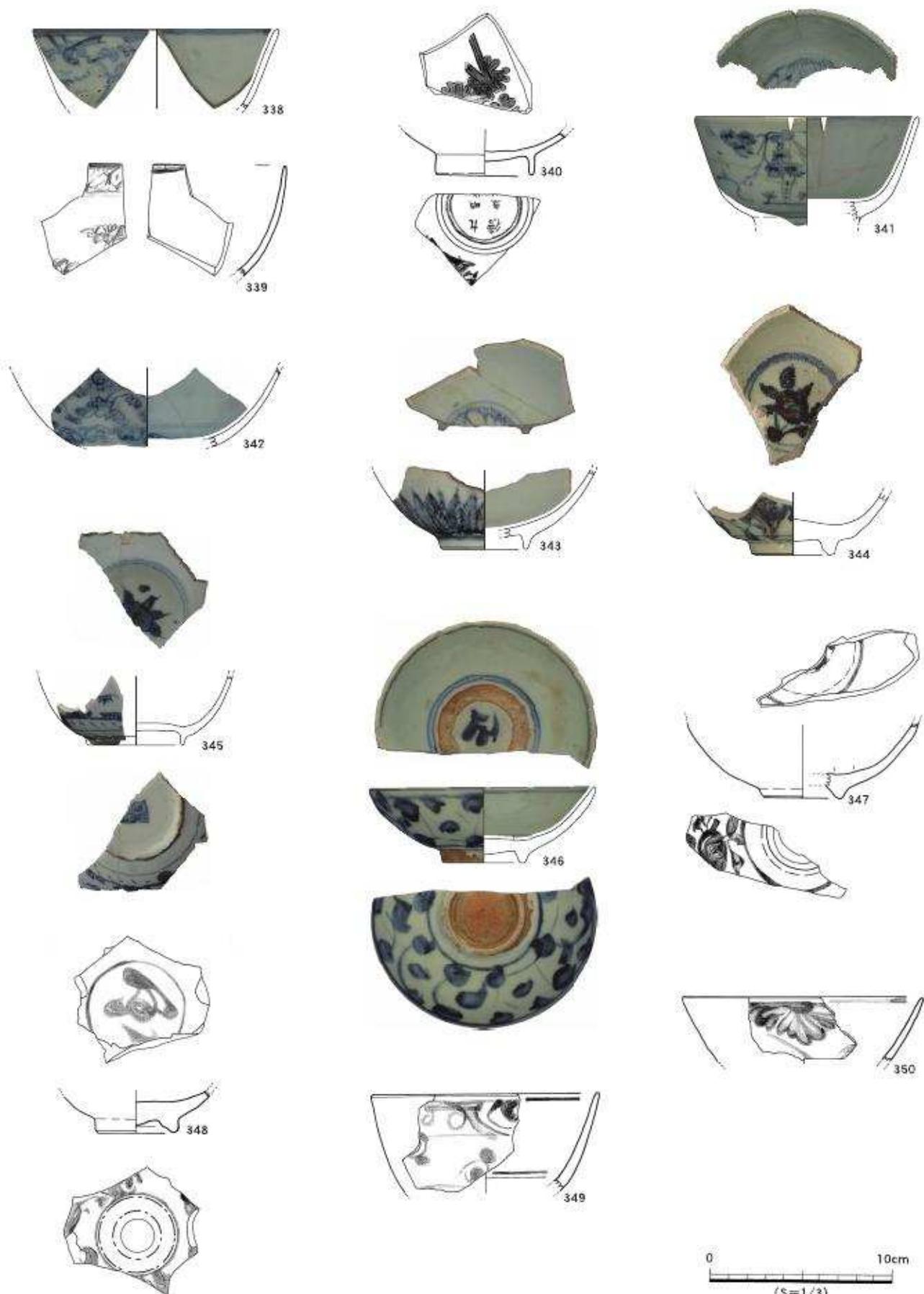
③ 国産磁器（第474図～第477図）

国産磁器は、肥前・薩摩産が出土している。器種は、染付の碗・皿・蓋・徳利が出土している。また、肥前産の赤絵の色付き皿も出土している。

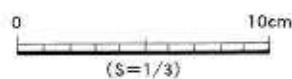
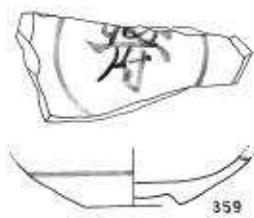
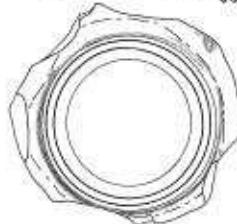
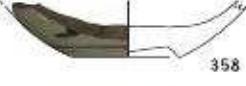
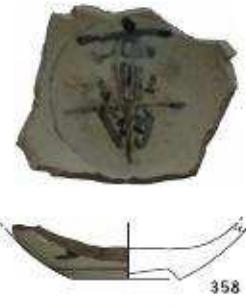
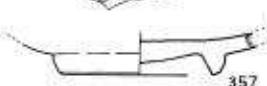
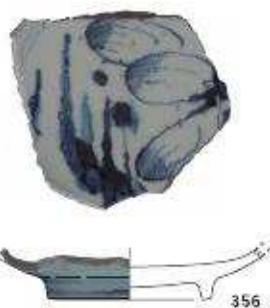
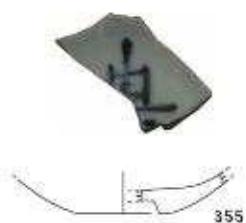
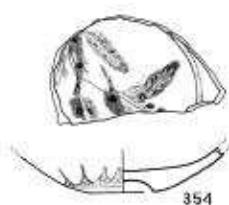
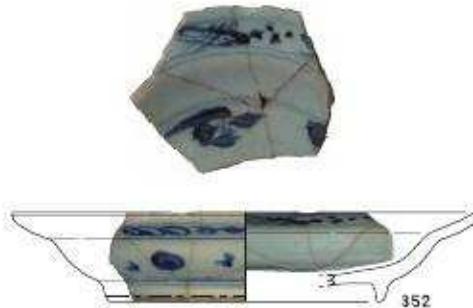
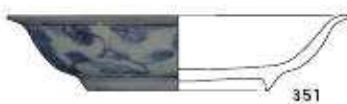
364～391は肥前の碗である364は青磁の碗である。焼成



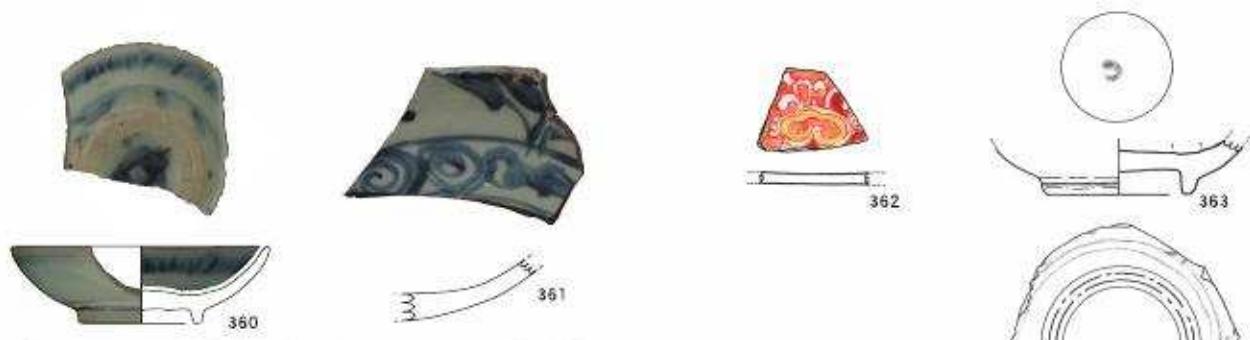
第471図 中世遺物(2) 青磁・白磁



第472図 中世遺物(3) 青花①



第473図 中世遺物(4) 青花(2)



不良である。365は白磁の碗である。367は天目型の染付碗である。369は鉄絵の碗で見込みに菊が描かれている。高台内底露胎である。370は見込みに菊の花を描いている青磁掛分けの天目碗である。高台内底は露胎である。374は饅頭心型の碗で見込みに草の文様が描かれている。376は見込みに「宣徳年製」が書かれた碗である。377は高台内底に「大明年製」の文字が見られ、外面には雨降り文が描かれた17世紀後半の碗である。383は天目型の碗である。384は化粧道具の一つで口唇が鉄釉のうがい碗である。お歯黒を付けたときに使用するものである。17世紀末から18世紀初めのものである。385は丸文の描かれた、くらわんか碗である。386は折れ松葉が描かれた小杯である。389は白磁の小杯である。391はコンニャク印判で描かれた小杯である。392は茶飲み碗である。393は白磁の型紙刷りの向付の上手である。394は蓋付の小鉢である。

395・396は薩摩産の磁器碗である。395は19世紀の端反り碗である。396は広東碗である。

397~409は肥前磁器の皿である。398は椿が描かれた

皿。401は波佐見産で蛇ノ目釉剥ぎの粗製の皿である。高台内底は露胎で無釉の部分は赤化している。402は胎土の色が灰色の粗製品である。405は日ノ字鳳凰文の皿である。408・409は白磁の皿である。409は高台腰から下部が露胎である。

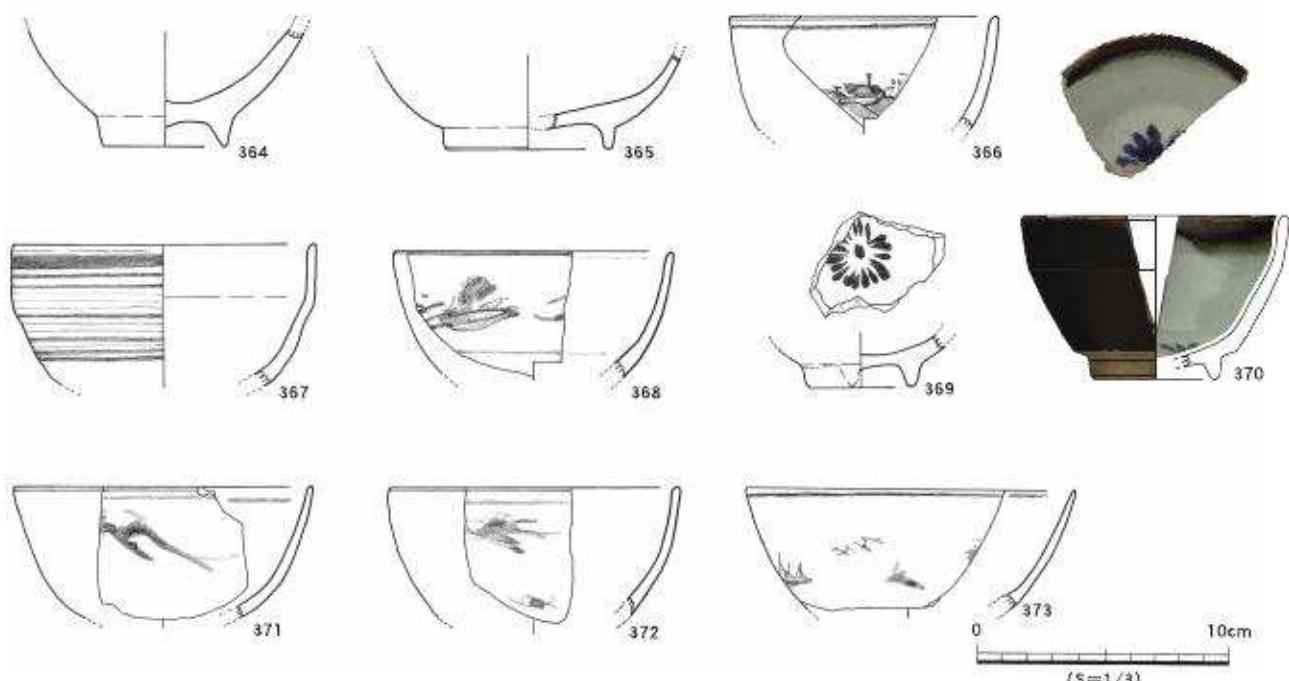
410・411は肥前産の蓋である。410は東南アジア向けの輸出用の蓋である。唐草文である。411は18世紀後半の輪宝文が描かれた蓋である。

412~415は肥前の徳利である。412は輸出向きに多い。415は○×文が描かれている。被熱している。

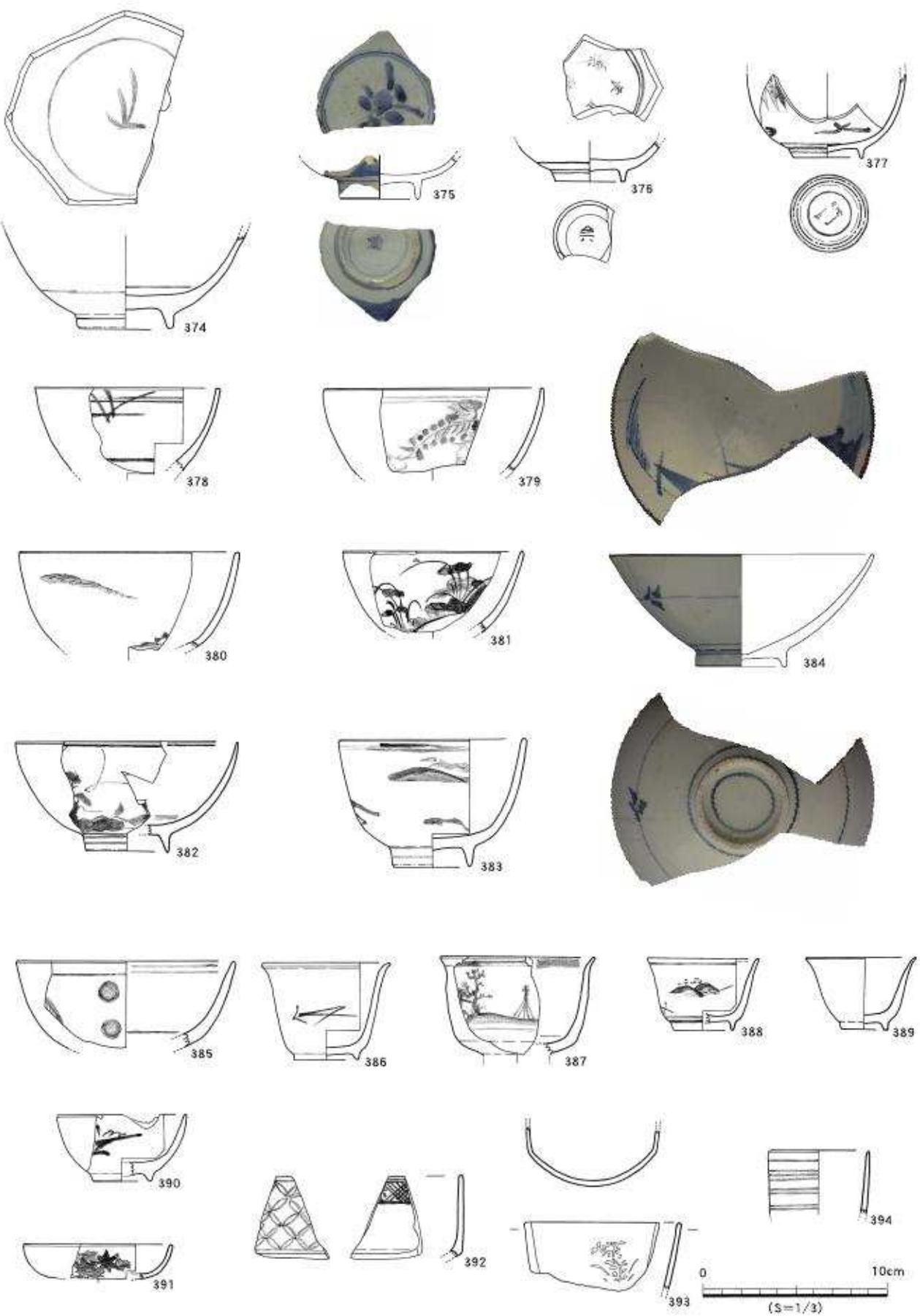
416・417は肥前産の赤絵染付皿である。漳洲窯の呉須赤絵をまねたもので釉薬が溶けて白濁している。416の口縁部は、扇を描いている。416・417は同一個体と思われる。

④ 国產陶器 (第478図~第484図)

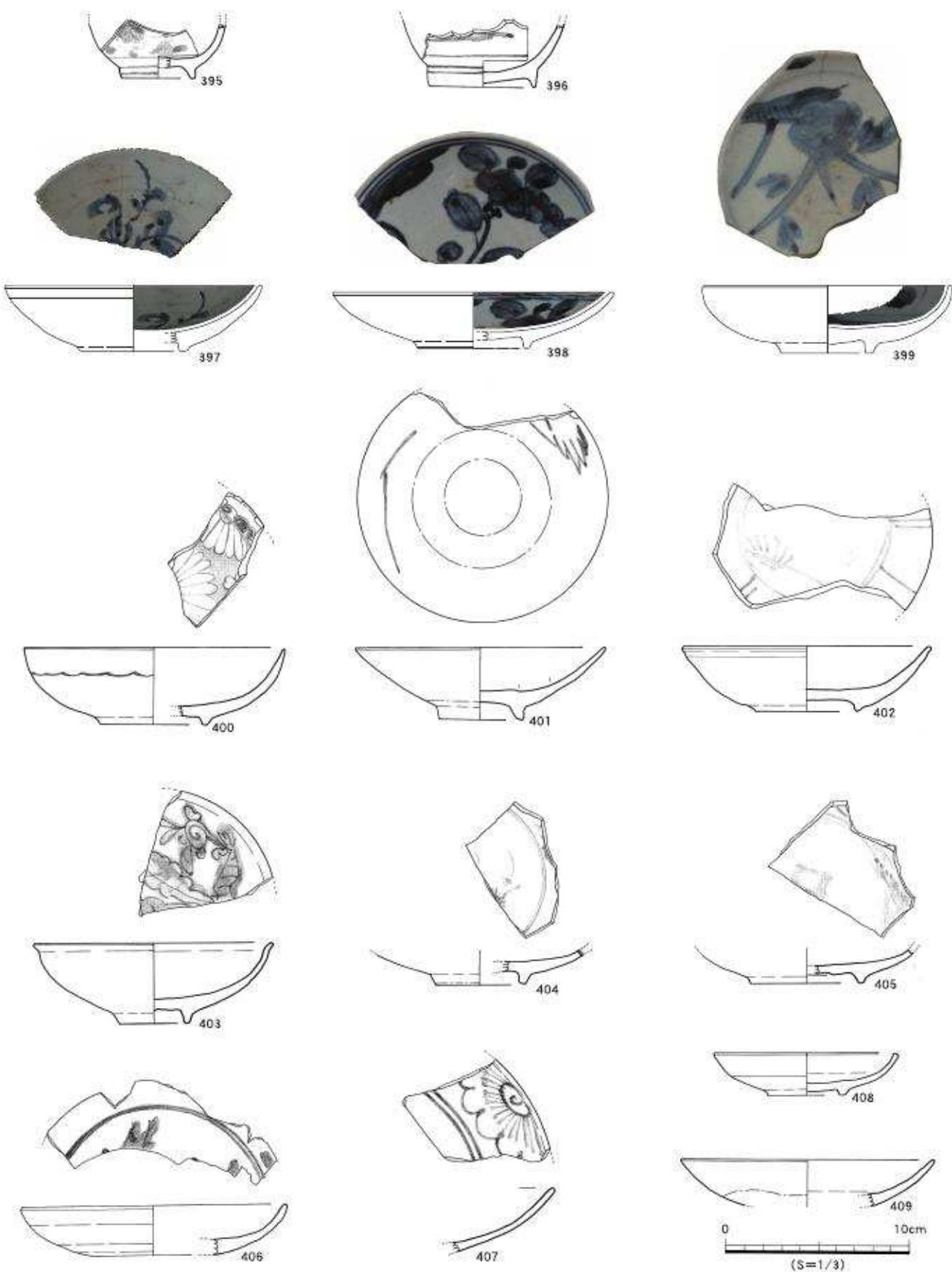
国產陶器は、瀬戸・美濃、肥前、薩摩、琉球産が出土



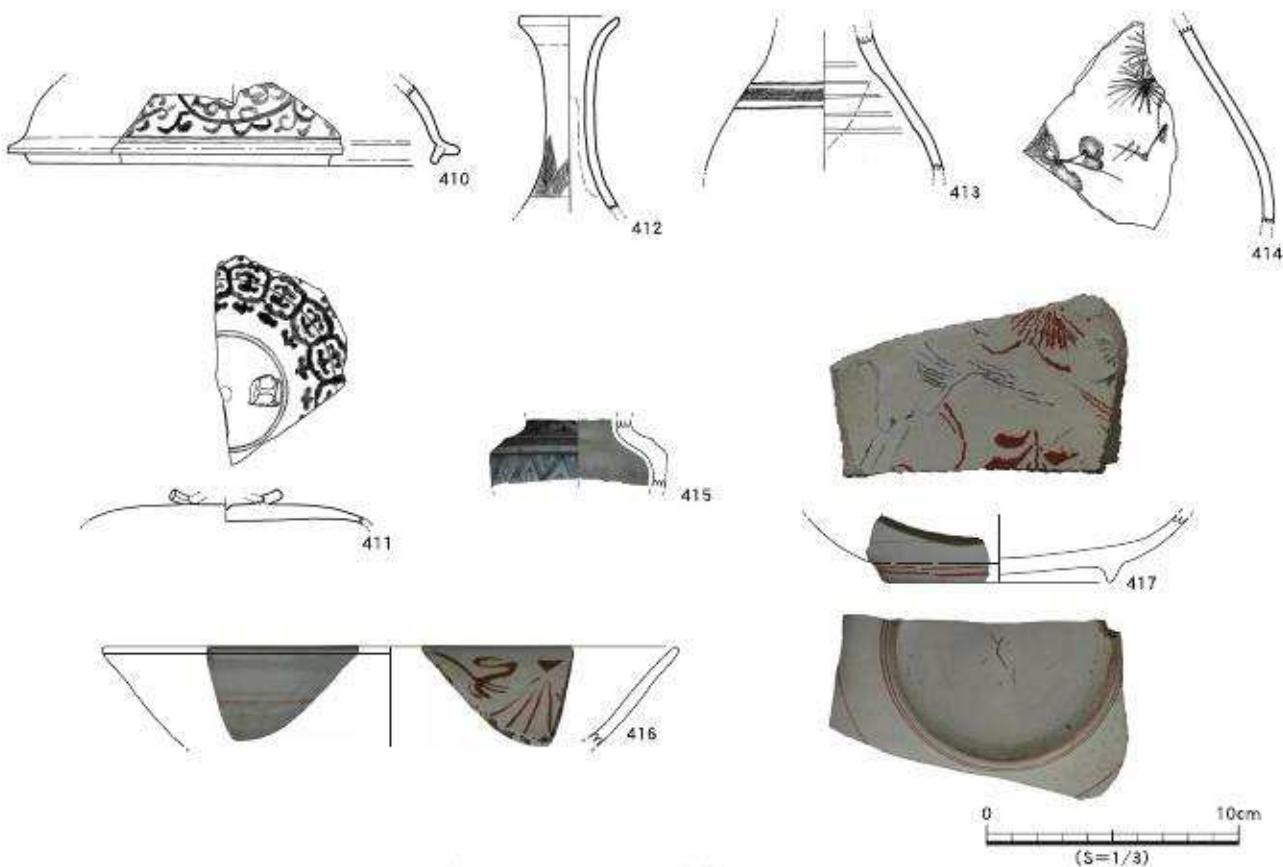
第474図 中世・近世遺物(5) 青花③・染付①



第475図 中世・近世遺物(6) 染付②



第476図 中世・近世遺物(7) 染付③



第477図 中世・近世遺物(8) 染付④

している。碗、皿、甕、壺、徳利などが出土している。

418・419は瀬戸・美濃産の天目碗である。高台腰部から下部は露胎である。16世紀後半から17世紀初めのものである。

420～433は肥前産の碗である。420は呉器手碗である。421は天目碗を意識した作りである。423は唐津の沓形碗である。424は白天目碗である。425は銅緑釉の碗である。漆を継いで割れたものを補修した痕がある。426は灰釉の碗である。高台内底は露胎である。429は銅緑釉の碗である。430は鉄さびを塗ったものである。432は肥前の蛇ノ目釉剥ぎの刷毛目の碗である。433は鉄絵で描かれた焼成不良の向付である。

434～438は肥前産または薩摩産と思われる陶器の碗である。436は焼成不良で、半磁器の可能性がある。

439～453は薩摩産陶器の碗である。439～441は17世紀の堅野系冷水窯の白薩摩である。443・444は龍門司系山元窯の碗である。445～450は龍門司窯産の蛇ノ目釉剥ぎの碗である。447・448は高台下部から露胎である。451・452も同じく龍門司窯系の可能性もあるが、他の产地も考えられる。

454～464は肥前産の陶器の皿である。454・455は脛付に耕穀が付着した灰釉の皿である。456は胎土目の稜花皿である。457・458は砂目の溝縁皿である。459は京焼風陶器の皿である。460は内野山窯の銅緑釉の蛇ノ目釉

剥ぎの皿で高台内底は露胎である。461は肥前系あるいは他の九州産の可能性もある。高台腰から下部は露胎である。462～464は大皿または盤である。462・463は同一個体と思われる。

465・466は薩摩産の龍門司窯系の皿である。

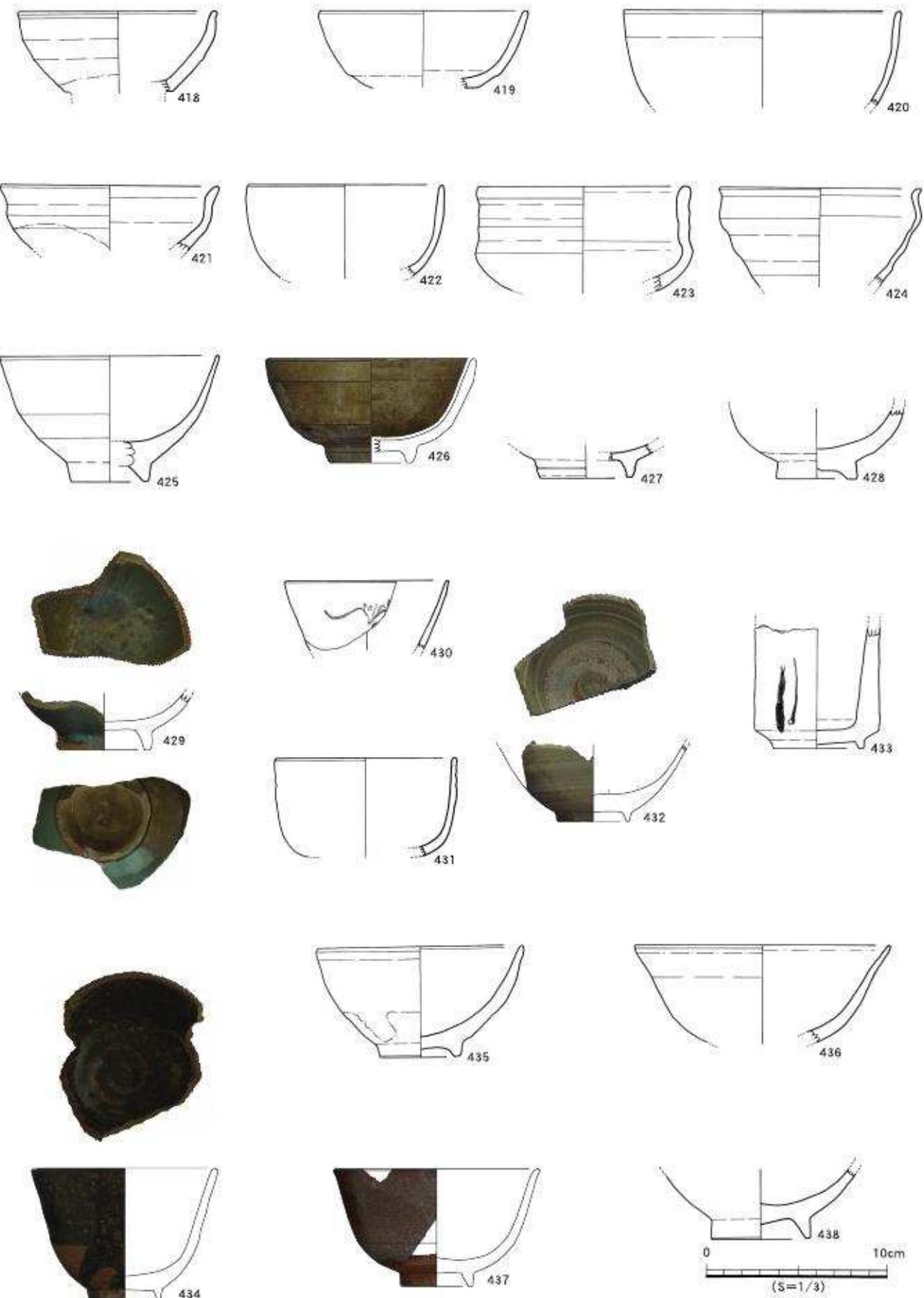
467・468は、古瀬戸の瓶子である。467は肩部で468は底部付近である。同一個体と思われる。中世のものである。

469は瀬戸・美濃産の徳利である。底部は無釉である。470～475は肥前産の徳利である。471は薬灰釉と鉄釉を掛けた徳利の頸部である。473は二彩手の徳利である。鉄釉と銅緑釉の掛流しで白化粧が見られる。475は鉄釉のもので敲きの痕がある。

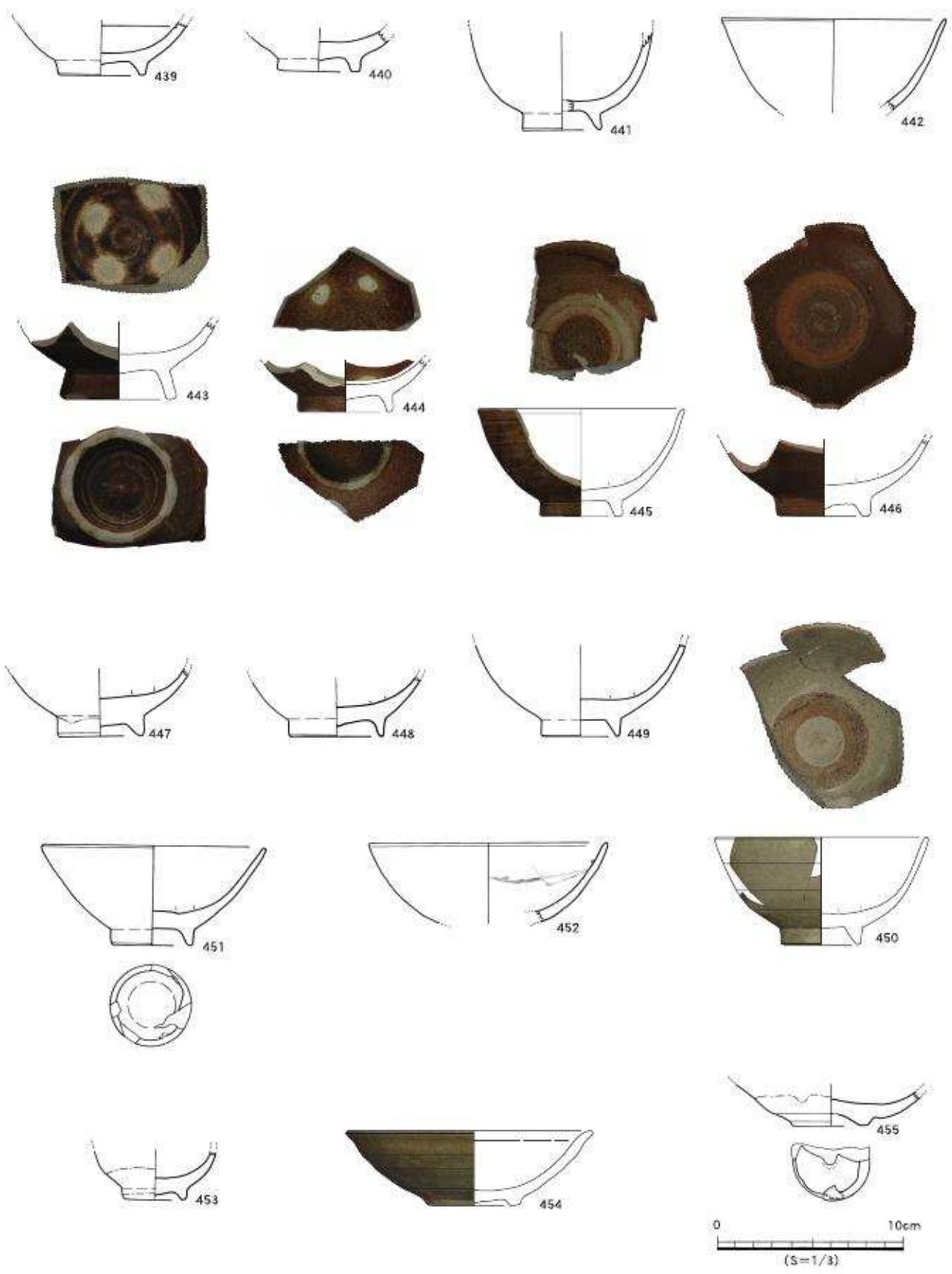
476と477は薩摩産の苗代川系堂平窯の徳利の口唇部と底部である。

478～481は薩摩産の苗代川系堂平窯の片口である。480は釉薬が口唇部には掛けられていない。串木野窯産の可能性もある。

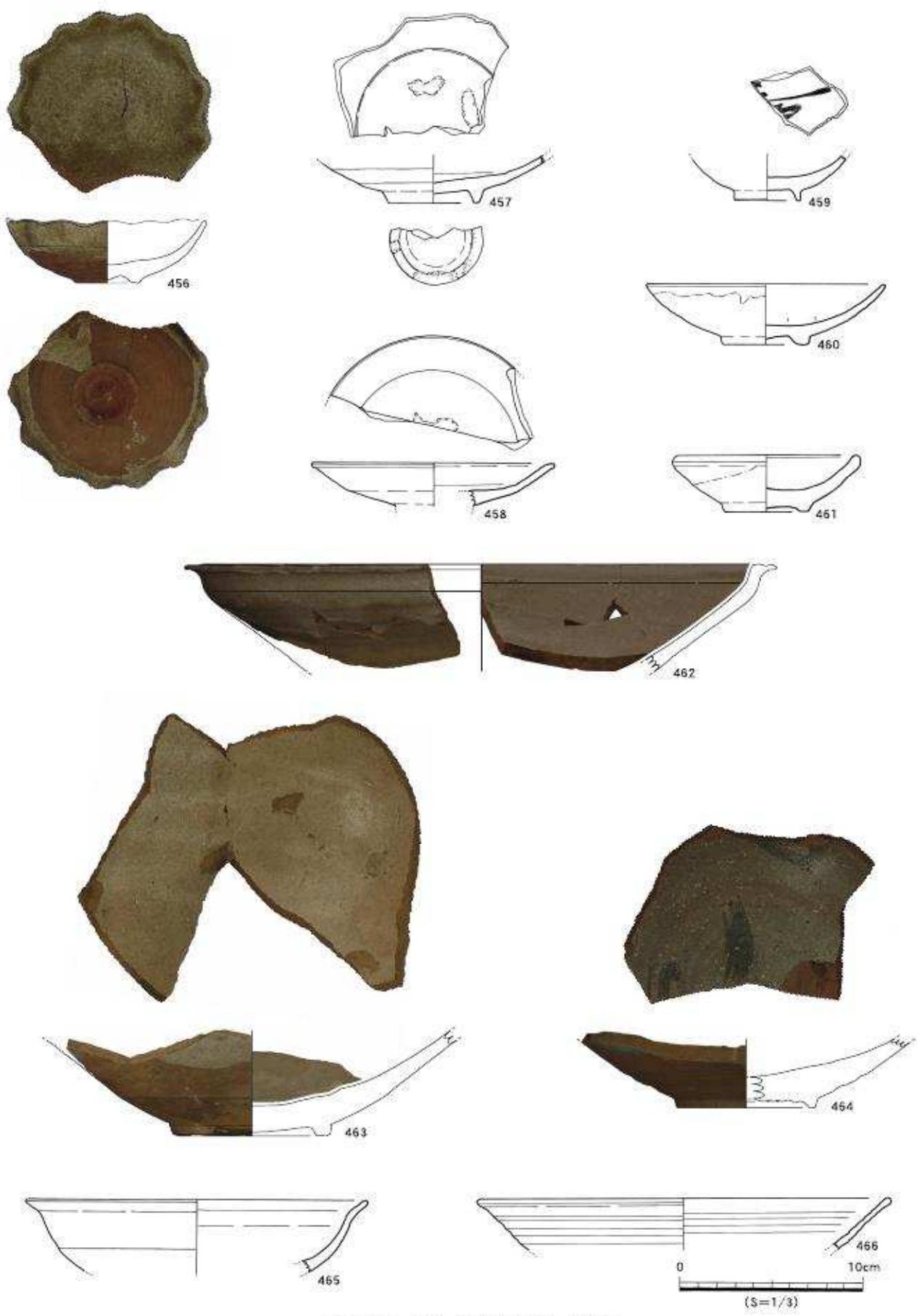
482～484は備前の擂鉢である。482は注ぎ口付近、483は擂目が僅かに見られる。485～487は肥前産の擂鉢である。488～496は薩摩産の擂鉢である。494は擂目が9本単位あるのだが、胎土から薩摩産の龍門司系山元窯の可能性が高い。497は肥前産の16世紀末から17世紀初の蓋である。水差しの蓋の可能性もある。



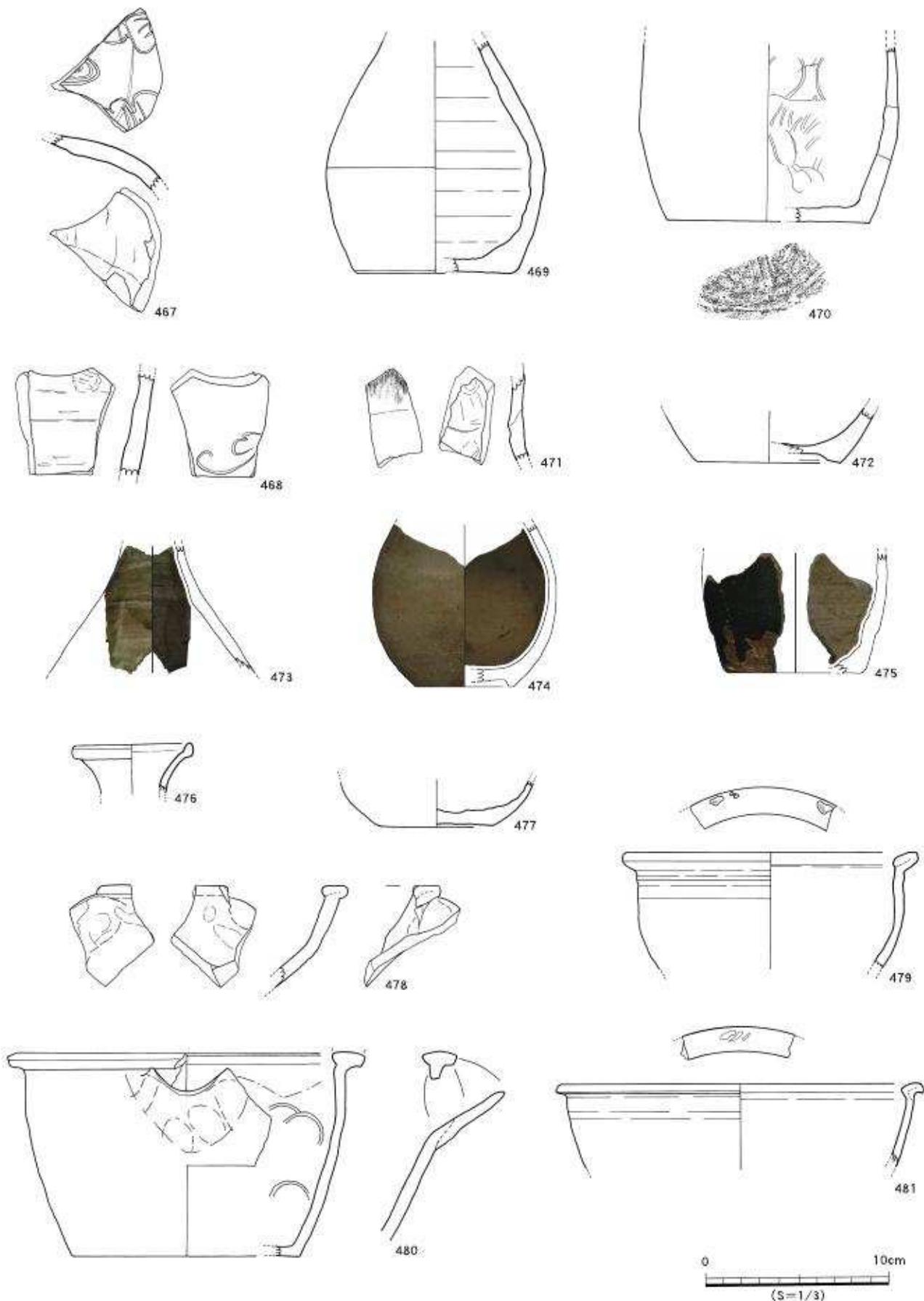
第478図 中世・近世遺物(9) 陶器①



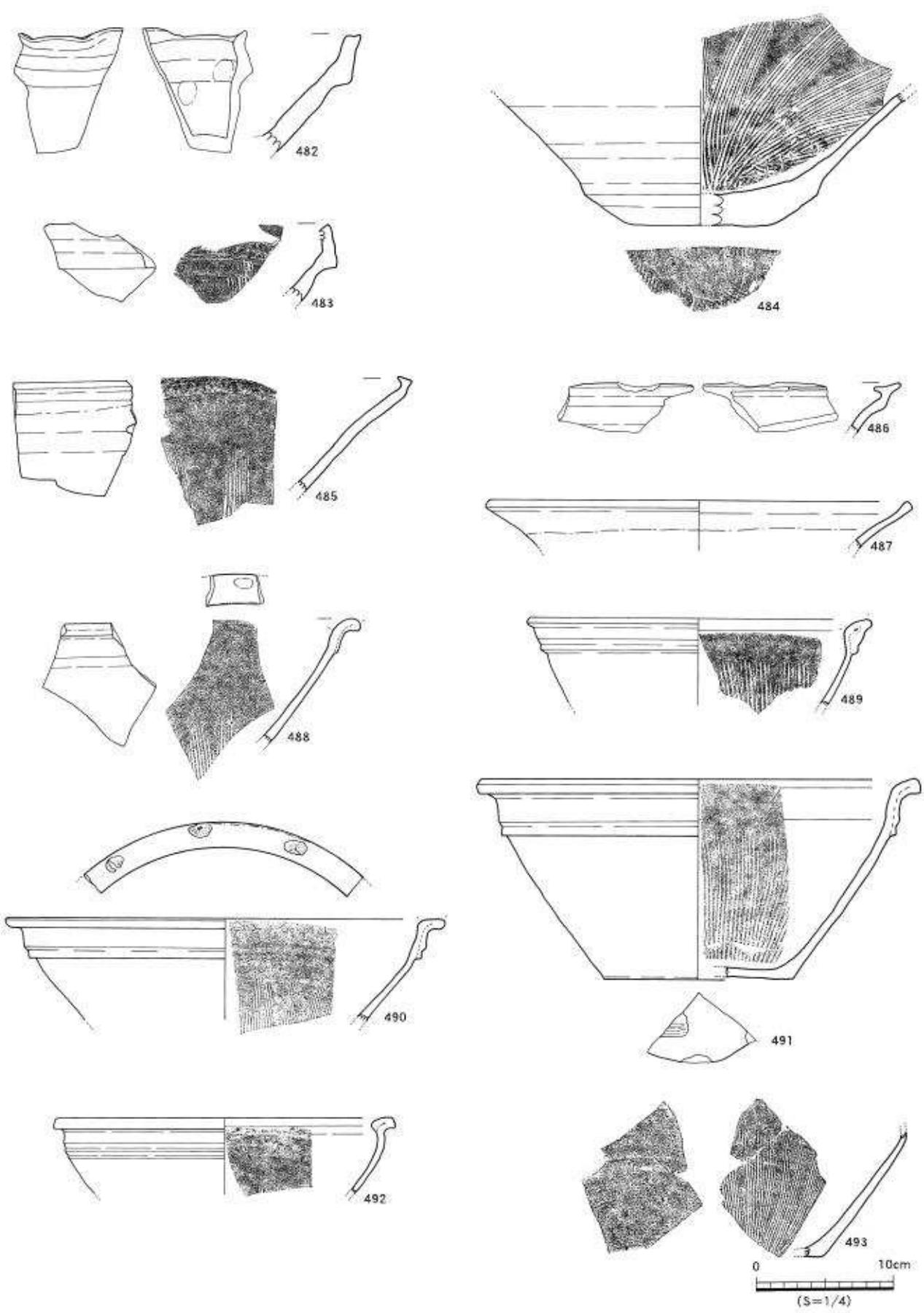
第479図 中世・近世遺物⑩ 陶器(2)



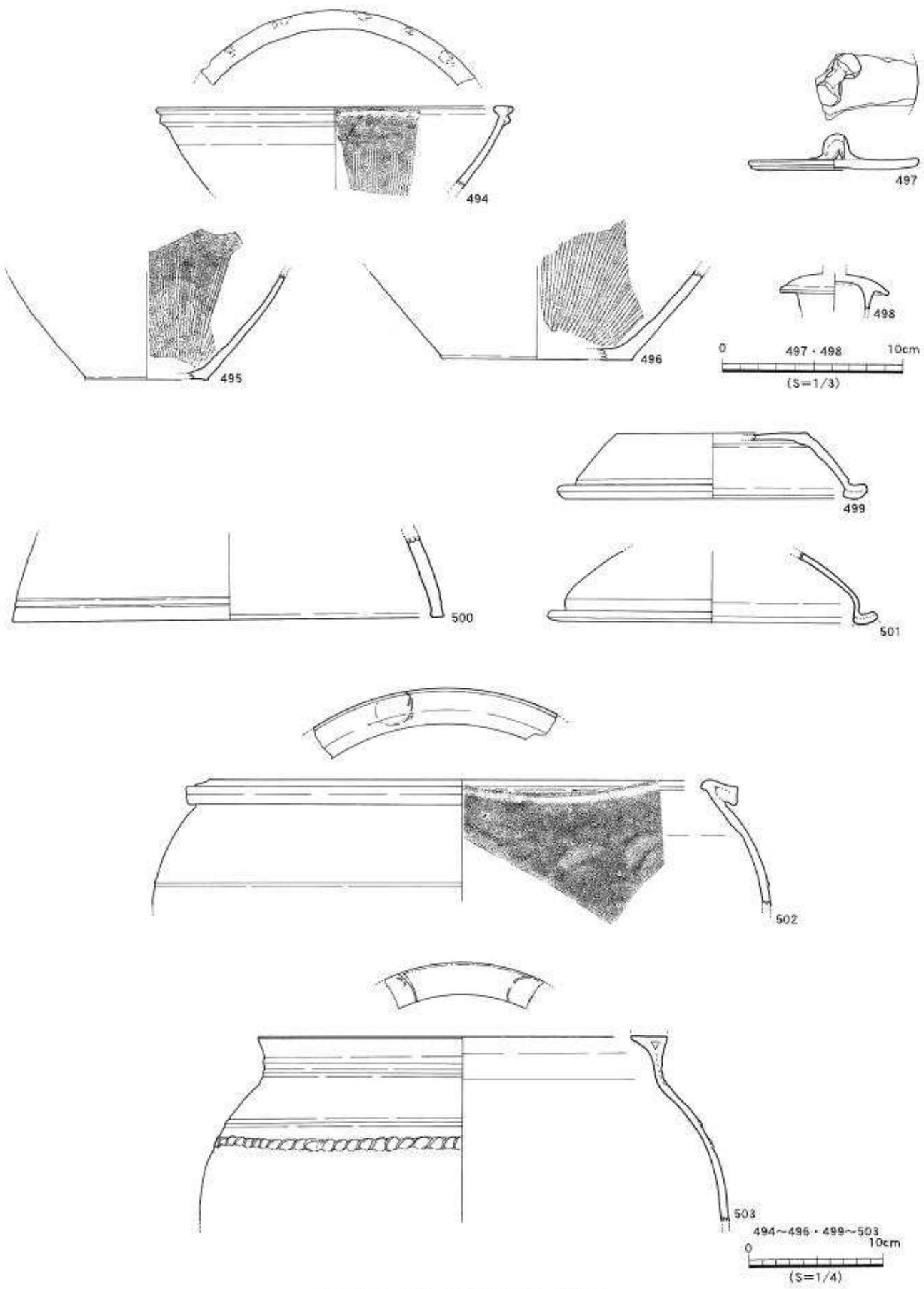
第480図 中世・近世遺物(1) 陶器③



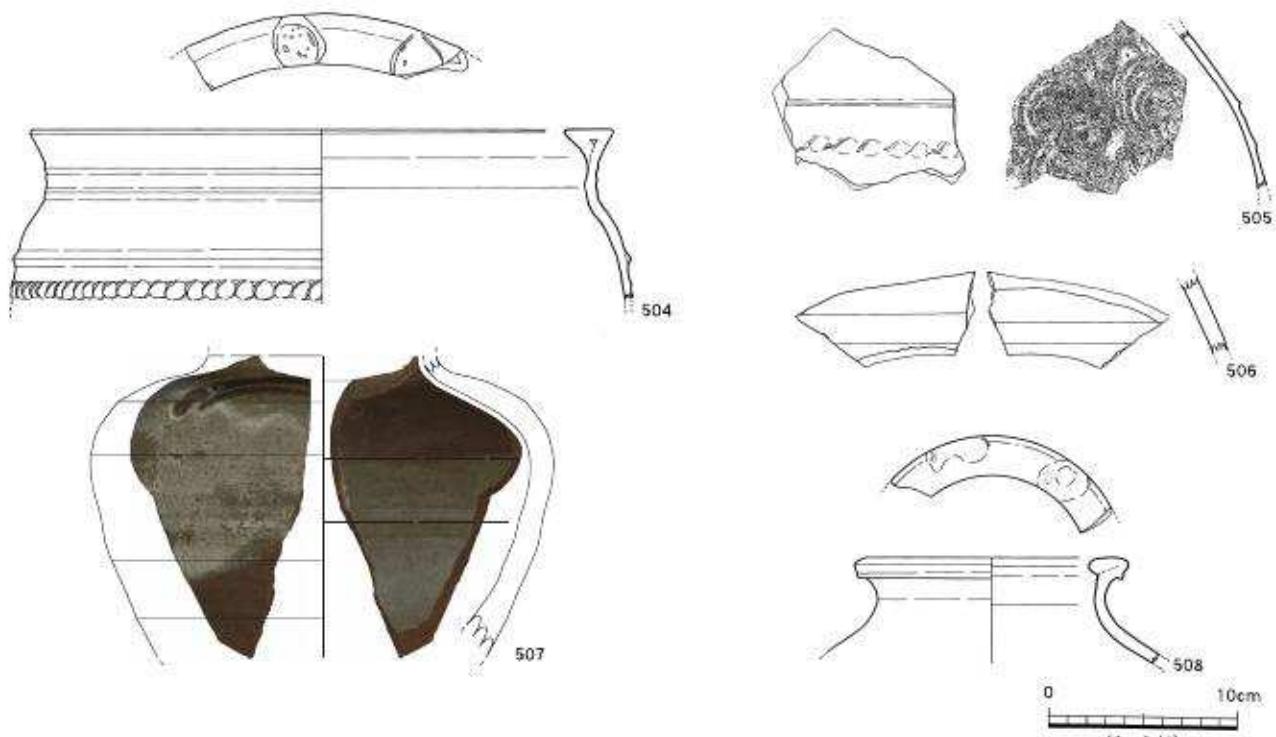
第481図 中世・近世遺物(2) 陶器④



第482図 中世・近世遺物(3) 陶器(5)



第483図 中世・近世遺物(4) 陶器(6)



498は薩摩産の苗代川窯の蓋である。

499～501は薩摩産の苗代川系堂平窯の蓋である。500は焼成不良である。

502～505は薩摩産の苗代川系堂平窯の甕である。

502・505は内面に同心円状の敲き痕が見られる。

506は琉球産の甕の胴部である。胎土が赤褐色である。

507は肥前の鉄絵の壺で蓋のつくタイプのものである。

508は薩摩産の苗代川系堂平窯の壺である。口唇部が内側に折れている。

509～511は肥前産の大型の花生または仏花器である。

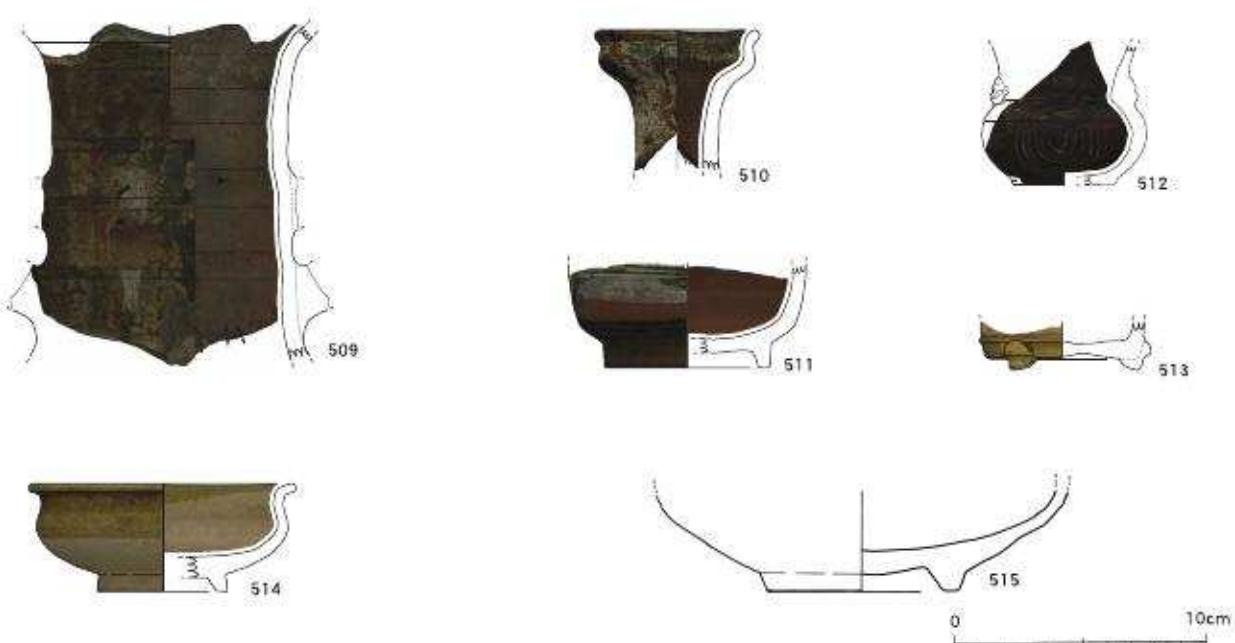
取手がつくものである。510・511は同一個体と思われる。

512は獅子頭付の肥前産と思われる無釉の香炉である。

513は軟質施釉陶器である。白化粧の後、黄釉が掛けられている。18世紀以降のものである。514は肥前産で鉄釉が掛けられた焼成不良のものである。515は肥前産の大型の線香立てである。

⑤ その他（第485図～第490図）

その他の遺物は、瓦質土器、土師質土器、鉄製品、滑石製品、金床石、砥石、軽石製品、古銭などに分類した。少数のものはレイアウトの都合上前後している。



第484図 中世・近世遺物(5) 陶器(7)

516～522は瓦質土器である。516～521は播鉢である。518は4条の播目とその播目の周りに文様のように刺突が施されている。また、底部には円状の文様と刺突が施されている。522は口径40cmになる火鉢である。

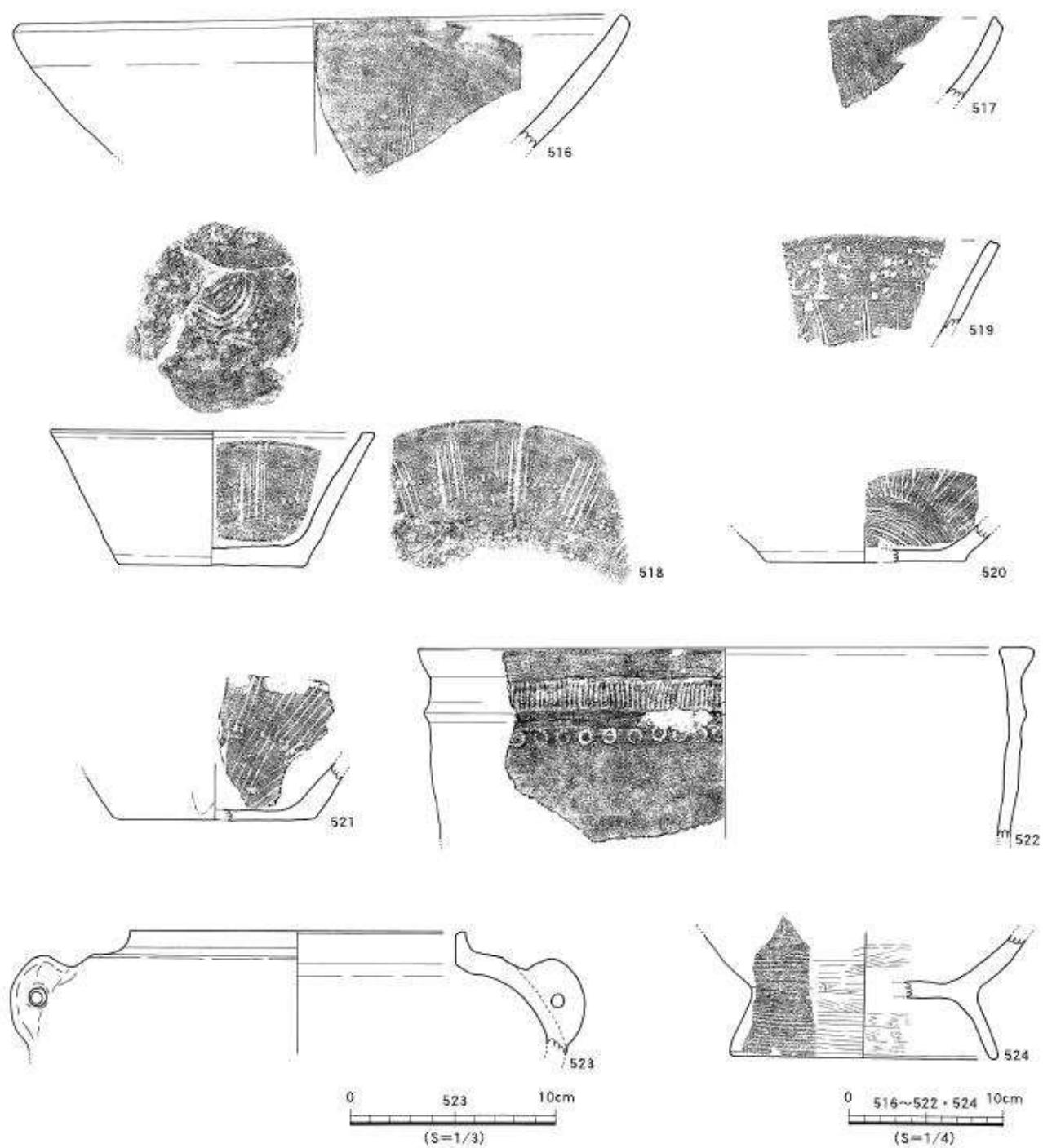
523は土師質土器の茶釜の耳部である。524は脚部の付いた土師質の鉢である。古代の遺物の可能性もある。

525・526は輪の羽口である。525は端部に鉄滓が付着している。

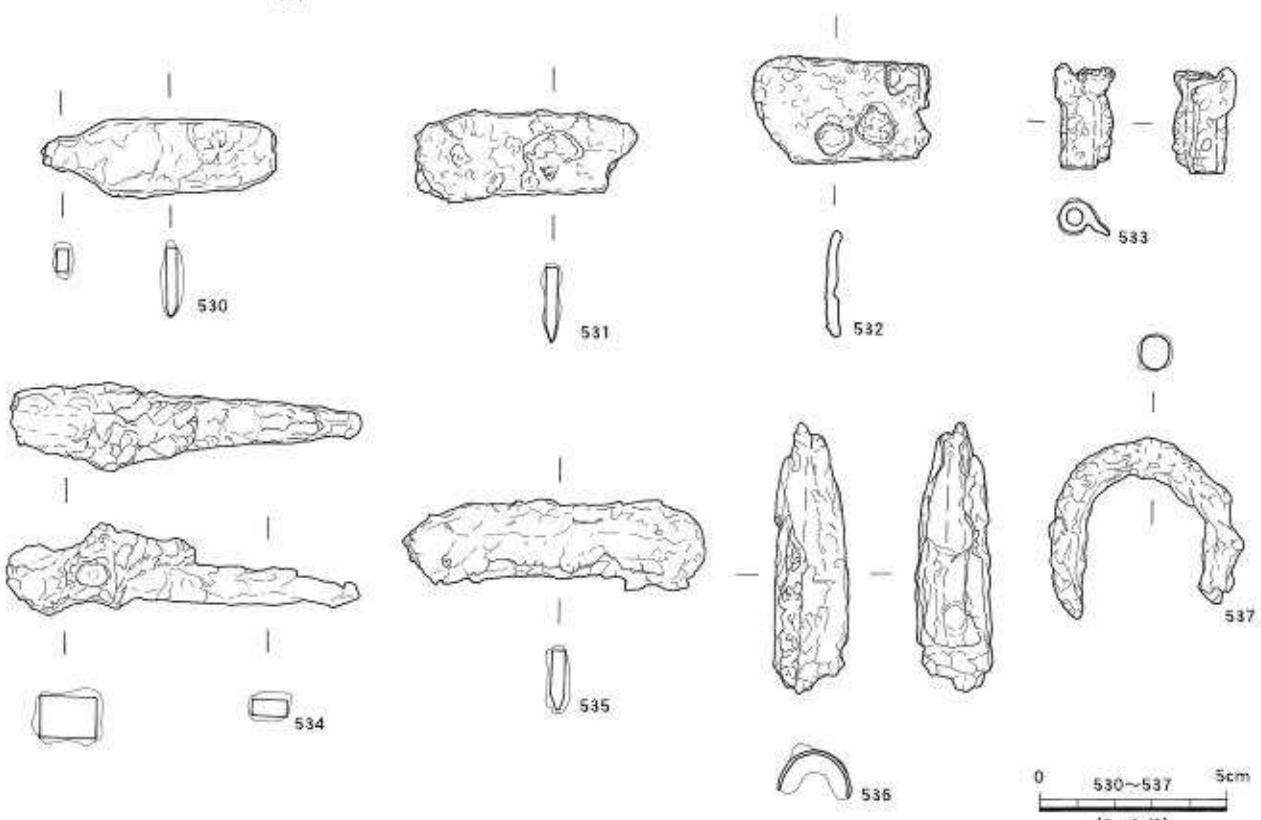
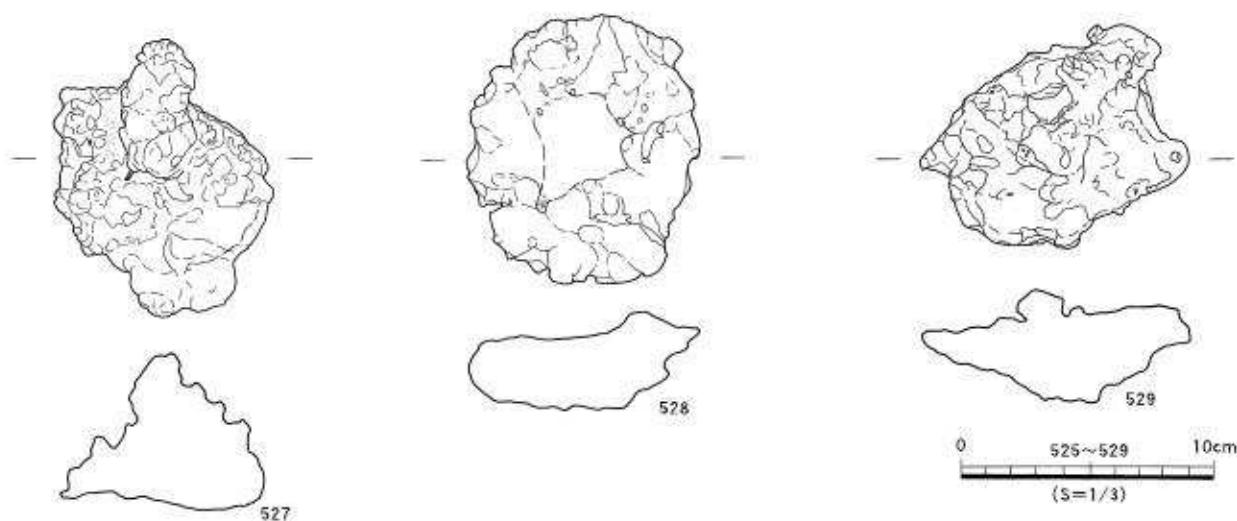
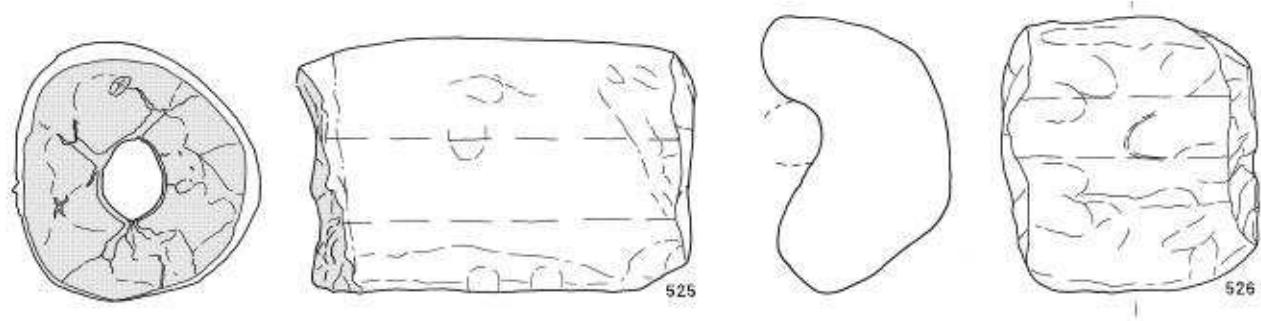
527～529は鉄滓である。ほとんどが碗型滓である。

530～537は鉄製品である。530・531は刀子の刃の部分である。532は板状の部分である。533はストロー状の中が空洞のものである。534は杭またはくさびと思われる。537は釘状のものがU字状に曲がったものと思われる。

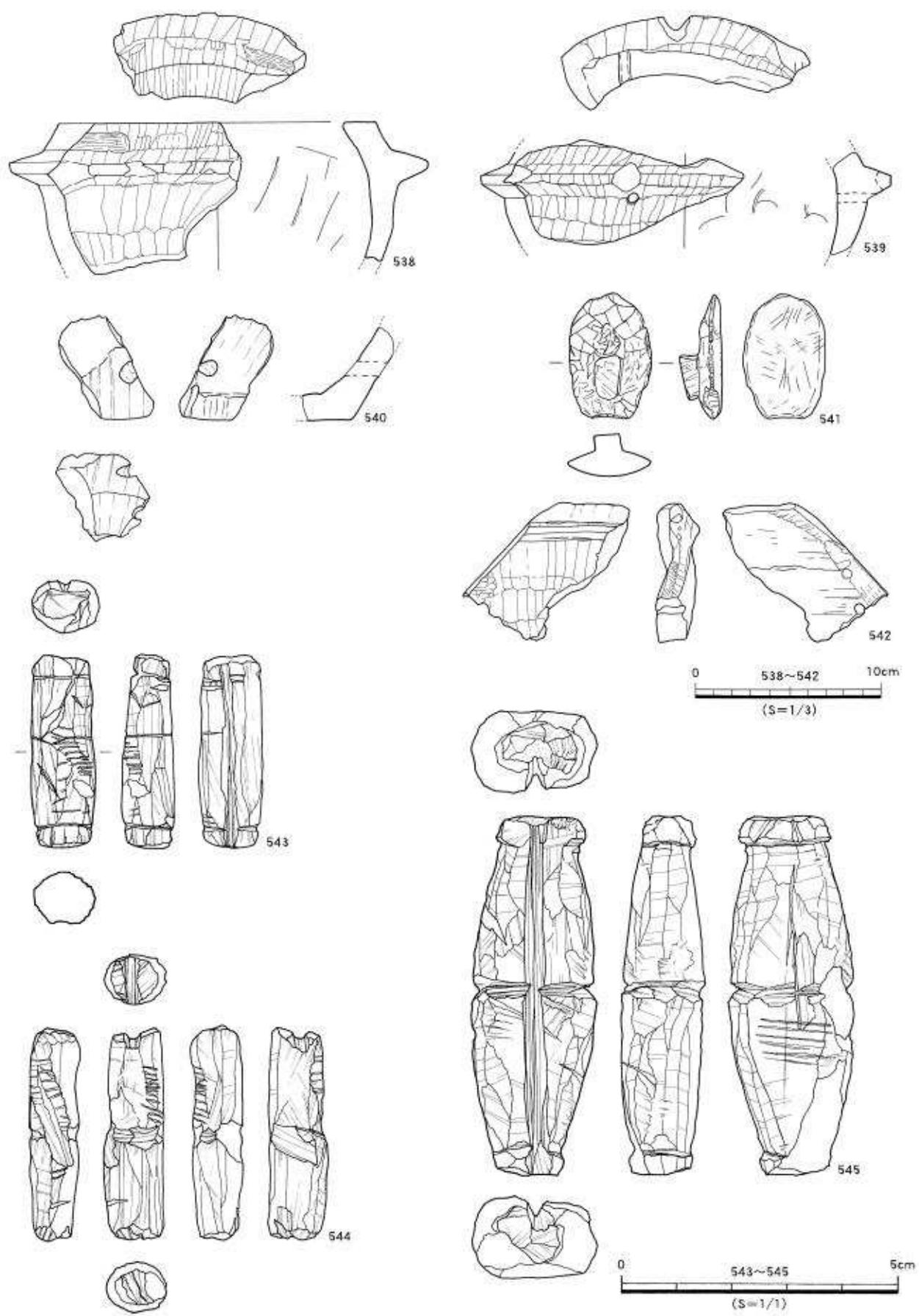
538～545は滑石製品である。538・539は滑石製石鍋である。鍋がめぐるものである。縦方向にノミ状の工具による痕跡を残し、器面調整が丁寧に行われている。540～545は滑石の二次加工品である。540・542は石鍋の部



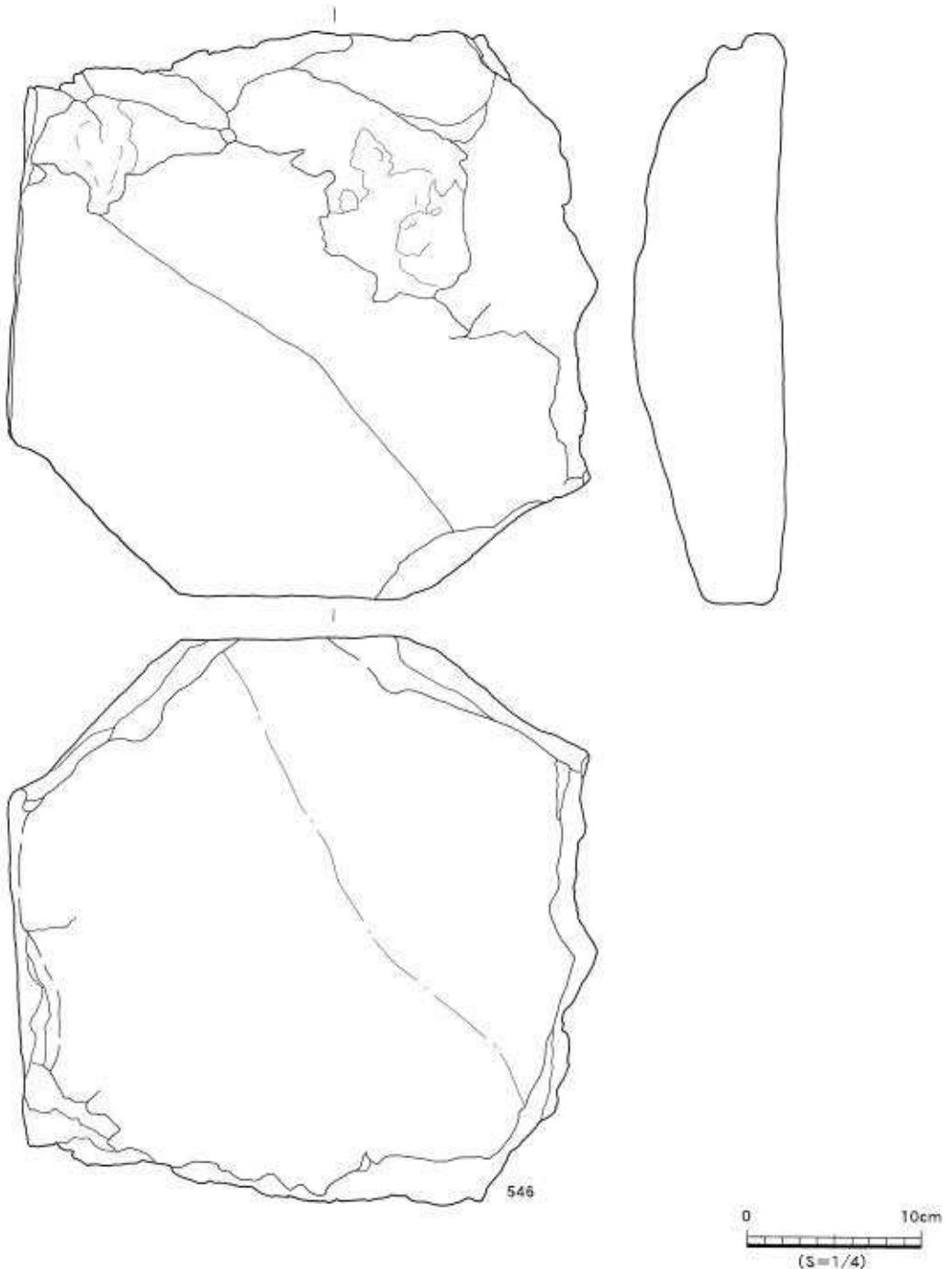
第485図 中世遺物(16) 瓦質土器・土師質土器



第486図 中世・近世遺物⑦ 鞍の羽口・鉄滓・鉄製品



第487図 中世・近世遺物(18) 滑石製品



第488図 中世・近世遺物⑨ 金床石

分に穿孔を施したものである。541は滑石の突起を持つバレン状の製品である。縁部に向かうにつれて薄くなり、端は鋭利である。543～545は両側面と中央に切り込みの入った滑石の錐である。545は長さ6.5cmで他のものより大きい。

546は金床石である。敲打によるはがれの痕が見られる。被熱による赤化が著しい。

547～550は砥石である。547は砂岩製で、全面に磨痕が見られる。548は天草石である。

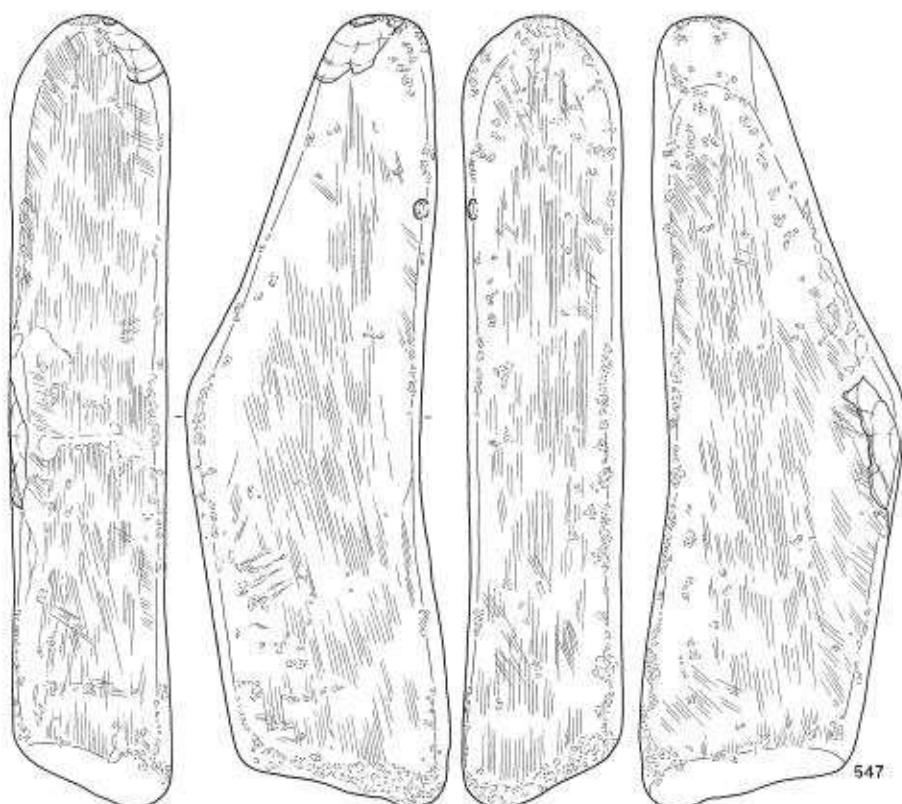
551～556は軽石製品である。551は円形に成形され、中央部の両面と上部に抉りが施されている。また、器面

調整のための磨痕が見られる。552は穿孔と抉りが見られる。554は抉りが施されている。555は中央部に穿孔が施されている。556は円形に成形され、中央部がくりぬかれている。用途不明である。

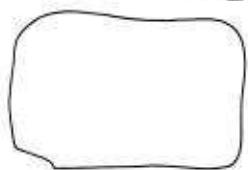
557はつげ製の櫛である。

558～561は錢貨である。558・559は洪武通寶である。2枚重なっている。560・561は寛永通寶である。561は裏面に「文」の字が見られる。

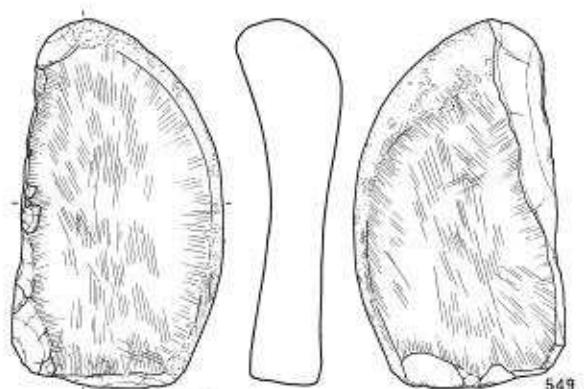
562は写真のみの掲載であるが、鉛玉である。時期は不明である。球体が変形していることから使用された後である。



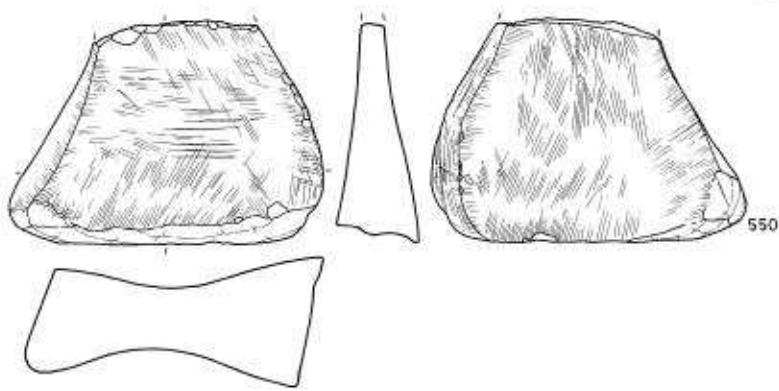
547



548



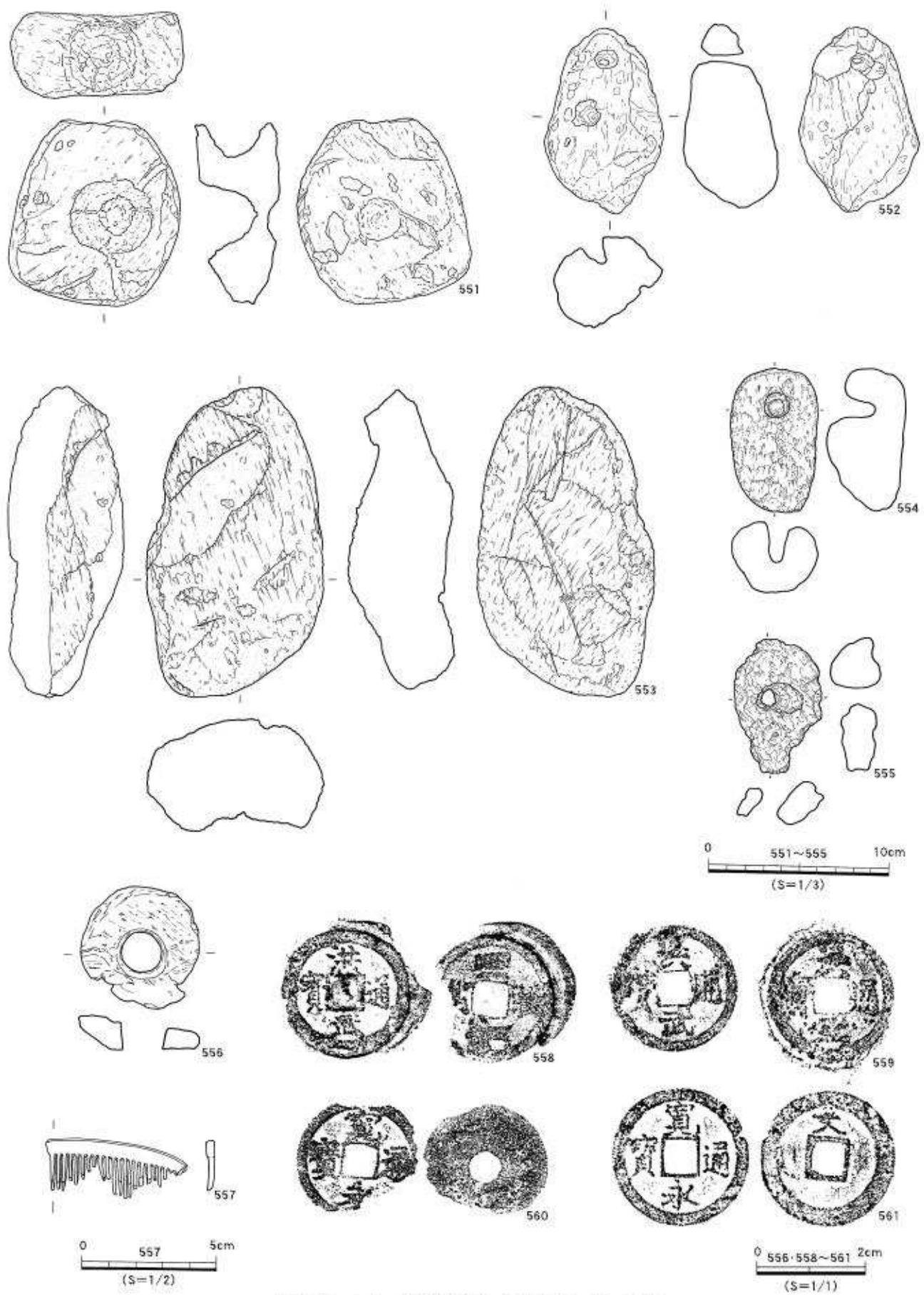
549



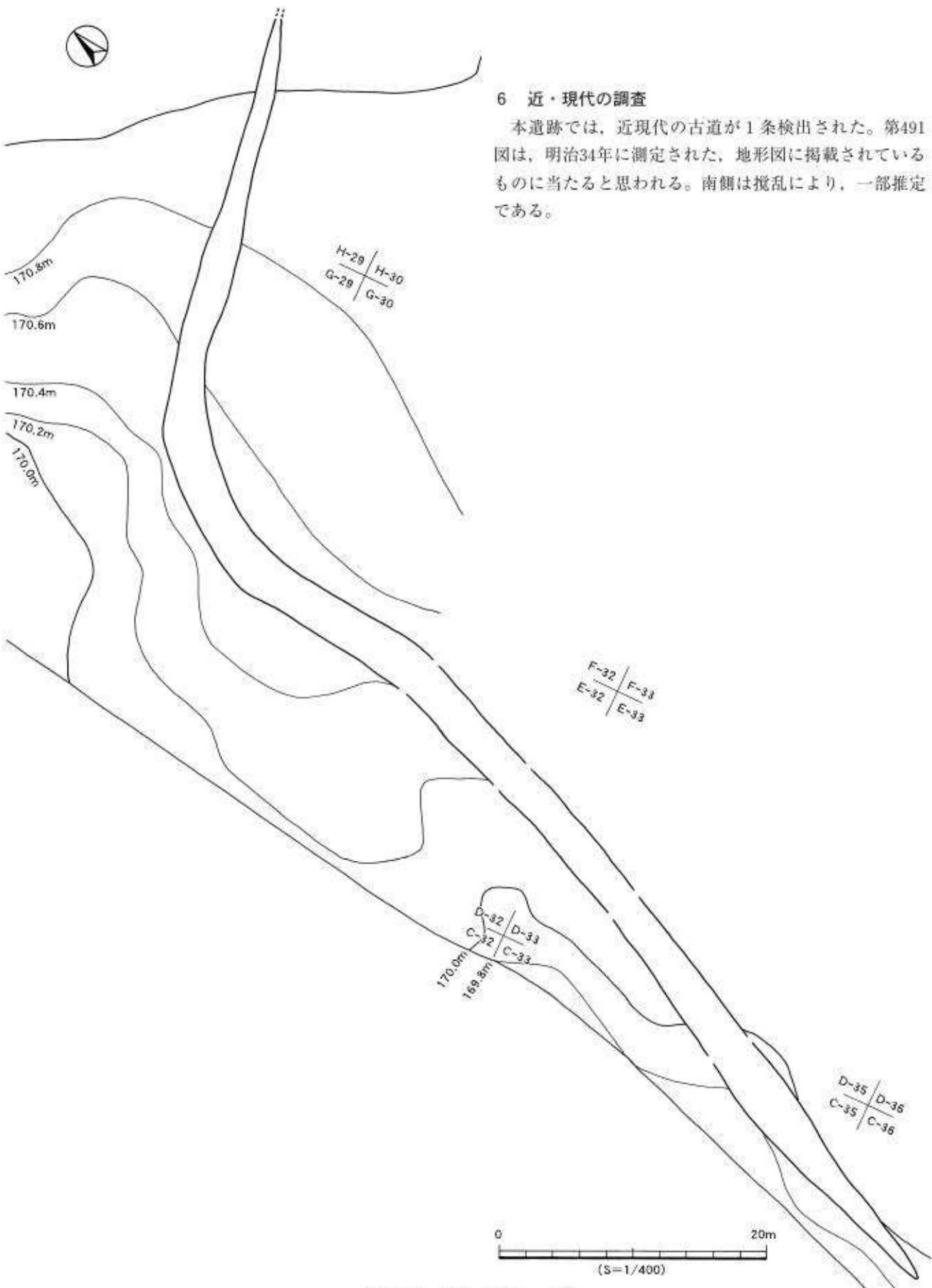
550



第489図 中世・近世遺物⑩ 砥石



第490図 中世・近世遺物(2) 軽石製品・櫛・古銭



第491図 近代・現代 古道